

用ひて之を了す。これ、その鍊、句前に在りて句下に在らず、觀者並にその鍊の跡を見ず、乃ち眞鍊の文なりと。又曰く、意は筆先に在り、力は紙背に造る、麗語あつて險語なく、艶詞あつて淫詞なし、看れば、華藻に似て實は雅潔、看れば奔放に似て實は謹嚴と。かくの如くして、その古體は、十韻に上るもの、極めて希に、篇幅太だ狹しと雖も、意象の充實、即ち然るのみ、固より才の短きに非ず。而して、沈德潛、專らその弊處を論じて曰く、劍南、原と老杜に本づき、殊に獨造の境地あり、但だ古體は粗に近く、近體は杜の沈雄騰踔に遜るのみと。要するに、才情の清新は宋人の特色、思力の深厚は遂に唐賢に及ばず。時習の自ら然らしむる、復た之を奈かむともするなきか。乾隆御選の唐宋詩醇、蘇陸を以て李杜韓白の後を承けしむ、まことに公平の見を推すべし。その佳作の如き、一一擧げず。特に近體に至りては、衆美拾ふに暇あらざればなり。その詞に於けるや、稼軒とともに、纖艶を一掃し、穿鑿を事とせざるを以て稱せらる。

放翁の門下に戴復古あり。字は式之、天台黃巖の人、石屏と號す。奇を負ひ、氣を尚び、慷慨不羈、すでに放翁の門に入りし後、周遊年を歴て、聞見益す多く、爲學益す高深にして、奧密詩を以て江湖に鳴ること五十年。或は、宋詩、唐に及ばずといふものなり。復古曰く、然らず、本朝の詩は、經に出づ、これ人の未だ識らざるところ、しかも復古ひとり心に之を知る。と。故に、その詩、正大醇雅、多く理と契し、機括妙用、殆んど言傳に非ず。然れども、猶ほ自ら胸中千百字の書なく、商賈の貨本の乏しきが如く、奇貨を役す能はずといへるは、蓋し謙言なり。吳荆溪稱すらく、その蒐獵點勘、周漢より今に至るまで、大編秘文、遺事、叢說、何ぞ當に百千家のみならむや、と。包盱江、亦た正に書に滯らざるを謂ふ。楊升菴が直にその百字誦を成すなきを議するは、これ痴人夢を説くの類のみ。これを要するに、腹笥すで、に宏富、よく古今百家を驅使し、清健輕快、斧鑿を費さざる處、優に自ら一家を成すと雖も、その弊や、往々にして、流れて疎漫に入り、神趣復た求むるに難からむとす。こゝに於て、四靈の徒、乃ち起る。

(一七) 永嘉の四靈及び江湖派

永嘉の四靈は、徐照、徐璣、翁卷、趙師秀の四人にして、ともに其字に靈の字あるを以て、この稱あり。その志も、と放翁門下、疎漫の弊を拯はむとするに在り。趙師秀、自ら唐賢の詩を選して衆妙集といひ、殊に賈島、姚合を以て標的となせり。その所長は近體の五言に在り、風調流麗を以て宗となす。然れども、遂に詩壇の大勢力となるに至らざりしは、その志、なほ稱すべきも、不幸にして、力量未だ相添はざりしが故のみ。

翁卷、字は靈舒、他の三人之に因みて、趙師秀は其字紫芝を改めて靈常となし、徐照は

其字道暉を改めて靈暉となし、徐璣は其字文淵を改めて靈淵となし、遂に四靈の稱あり。ともに、永嘉の人。四人の詩を作る、殊に、苦。趙師秀は、尤も五言律を尙び、かつて曰く、一篇幸にたゞ四十字のみ、更に一字を増せば、吾末に之を如何と。徐照は、斲思尤も奇、皆横絶、欸起、氷懸、雪跨、讀者をして變蹕、慄慄せしめ、はじめに吟嘆して、自ら已まざらしめ、しかも異語なく、皆人の知るところなるも、人道ふ能はずと稱せらる。故に、その持論に曰く、昔人、浮聲切響、單字隻句を以て巧拙を計る、蓋し風騷の至精なり。近世、乃ち連篇累牘、汗漫にして禁なし、豈に能く家に名づけむやと。これ正しく宋詩の弊を看破したるものにして、殊に時病に切なるものなくむばあらず。

劉克莊、字は潜夫、莆陽の人、後村と號す。はじめ四靈の徒に従つて遊び、年甚だ少、刻琢精麗、これと並び驅りしが、すでにして、之を厭ひ、諸人極力馳騁するも、わづかに賈島姚合の藩を望見するのみといひ、因つて、唐律を息めて、専ら古體に造らむと欲す。趙師秀曰く、然らず、言意の深淺は、人の胸懷に存して、體格に繫がず。若し、氣象廣大なれば、唐律と雖も、黃鍾大呂たるに害なきも、然らざれば、手に雲和を操つて、驚颯駭電、猶ほ弦撥の間に隱隱たらむと。後村、その言に感じて止む。然れども、これより、思益す新に、句愈よ工に、涉歴老練、布置濶遠、論者謂ふ、江西は麗にして冗なるに苦む、莆陽は其法を得、しかも

能く瘦、能く淡、能く對に拘らず、又能く變化して活動す。蓋し乗伎に會すと雖も、しかも、自ら一宗たるものなりと、要するに、四靈より出で、兼ねて江西の所長を兼取せしものなり、但だ、その詩、同代の故事を用ひて新なりとし、格調亦た高からざるを病むのみ。なほ、その詩話は、卷帙宏富、採擇亦た博く、時に後人の考據に資すべきものあり。

劉後村と略ぼ趨向を同じうし、四靈と江西の餘派とを合せしものを江湖派となし、陳起の江湖群賢小集は、即ち其詩を選録せしものに係る。

陳起、字は宗元、錢塘の人、書肆を業とし、詩を善くするを以て、江湖の詩人と相善く、因つて、この書を刊して、世に售るといふ。然るに、その作家中、詩を賦して、時の宰相史彌遠を誹謗せしものありしが、故に、起等、亦た坐して囚獄に投せられ、この書の版を毀ち、且つ士大夫の詩を作るを禁せられしが、紹定六年、彌遠の死するや、その禁、亦た解かるといふ。

江湖小集、今存するもの全からず。その詳は、考覈するに由なきも、當時の詩風、猥雜細碎に趁きしは、斷じて、争ふべからず。こゝに於て、宋末の謝翱、林景熙、注元量、俞德鄰等、亦た之を救濟せむとし、力未だ及ばず。時忽ち轉じて、元に入り、詩風復た一變し、纖巧冶麗を競ふに至り、宋詩、乃ちこゝに盡く。但し、上記謝林の諸家が、亡國の時に際し、その詩に

唯殺淒涼の哀音あるは、特に注意すべく、次章之に就いて略説するところあるべし。

(一八) 宋末の諸家

南渡の後、孝宗の世、金と和し、兩國しばらく無事を樂み、仍つて一時の盛治と稱せられしが、理宗に至りては、紀綱廢弛、國運日に蹙まり、復た論すべきものあらず。蓋し、理宗はもと小人の擁立するところ、その蒙古と合して金を亡ぼすや、意滿ち、氣驕り、太平の天子を以て自ら居り、唯だ周張程朱の理學を崇尚して、右文の譽を期するのみ。願廻瀾之を評して、理宗の理は文なるのみといへるもの、眞に痛切なるを覺ゆ。こゝに於て、國運の衰替は、いつしか自ら文運に及ぼし、衰颯の氣搖曳するところ、僅に一二を除くの外、幾んど特記するに足るものなし。

方岳、字は巨山、秋崖と號す。累遷して吏部侍郎に至りしが、前には史嵩之の嗾論を以て罷められ、後には丁大全の嗾論を以て罷められ、郡に下るや、賈似道の効を以て、兩たび邵武軍に調せられ、坎壞を以て身を終る。之を評するものは曰く、詩、清新を主とし、鏤琢に工。故に刻意妙に入れば、逸韻横生、嶽瀆の觀、少しと雖も、その光怪、竇とするに足る。と。その天才、尤も駿厲、殊に成語を用ひて警となし、又虚字を運旋するの手段に至りては、長しへに、一派の祖たるに庶幾し。醉矣行に吾婦曰、君醉耶、吾姪曰、非醉也、謂吾醉者固

不然、非醉亦非知吾者、花影滿身扶不起、此紙不知何等語、明朝早與醒者傳、笑倒渠儂吾醉矣、といひ、感懷に、得見古人千載上、已忘今我一瀕邊、不知我者謂爲拙、是有命焉、那用求、悔不可追、身是膽、怒何堪、觸腹生鱗、といふが如き、以て一斑を窺ふに足るべし。

真山民は、宋末の隱士、自ら真德秀の後といふ。その人、竄跡銷聲、名字閱歷、ともに考ふべからずと雖も、その節至高、しかも命に安んじ、天を知り、一も怨尤の語なく、志操識量、及ぶべからざるが如し。その詩源、晚唐に出で、宋人に在りては、別調に屬す。煙碧柳生色、燒青草返魂、飛花游蕩子、古木老成人、風蟬聲不定、羣鳥影同飛、泉石定非騎馬路、功名不上釣魚鉤、水禽與我共明月、蘆葉爲誰吟晚風、小窓半夜青燈雨、幽樹一庭黃葉秋の數聯、皆愛誦すべし。然れども、なほ巧を字句の間に弄し、絶えて、渾雄沈厚の氣なく、奇警超拔の語なきは、亡國の風氣、自ら之を致せしものか。

文天祥、謝枋得の諸公、宋代文學の殿後たるに足る。農田餘話、天祥を稱し、獨り忠義一時に冠たるのみならず、亦た斯文間氣の發見なりといひしもの、決して虚語に非ず。天祥、最も詩を善くし、正氣歌の外、戎馬患難の際に成れるもの、雄偉宏放、兼ねて悲壯感慨、誦すべきもの多し。謝枋得は、生を捨て、節を完うす、天祥と塗を殊にして、歸を同じうするもの、その卻聘の一書、彼の士、郷塾の童、今に至りて、皆能く記誦すといふ。その他

の文亦た光明磊落、卓爾不群と稱せらる。

謝翺、字は阜羽、一字は阜父、長溪の人、後、浦城に徙る。咸淳中、進士に試みられしが第せず。後、文天祥の府を延平署に開くや、その咨議參軍となり、天祥の兵敗れてより、地を浙東に避けしが、ずでにして、天祥の卒するや、亡匿して、至るところ、輒ち感哭し、かつて、酒を挾んで、子陵の釣臺に登り、天祥の主を亭隅に設け、再拜號哭し、竹如意を以て石を撃つて、歌うて曰く、魂朝往兮何極、莫歸來兮關水黑、化爲朱鳥兮有味焉食、と。歌ひ畢つて、竹石ともに碎く。その詳は、西臺慟哭記に見ゆ。後に、杭睦の間に往來し、元貞元年、肺疾を以て死す。年四十七。翺、倜儻にして、大節あり、平生屈原を慕ひ、興を遠遊に托し、因つて、啼髪子と號す。その詩は、緒餘に過ぎざるも、亂頭粗服の態、桀驁にして、奇氣あり、頗る李長吉に得るところあるもの、如く、古詩は相頡頏するも、しかも近體に至りては、卓鍊沈著、長吉の及ぶところに非ず。宋末卑弱の間に於て、この別調を見る、亦た異とすべし。

林景熙、字は德暘、霽山と號す、溫の平陽の人。宋亡びて後、仕へず、會稽王修竹、英孫の家、に客たり。會ま楊璉真伽、宋の諸陵を發くや、英孫、客をして、その棄骨を收めしむ。景熙、高孝の兩函を得て、唐珏が收むるところとともに、蘭亭に墓り、冬青を植ゑて、以て識す。その詩、大抵、悽愴故舊の作、謝翺と相表裏し、翺は奇崛なるも、景熙は幽婉、方逢辰が詩家の

門戸、當に一頭を放つべしといへるもの、亦た虚言に非ず。

汪元量、字は大有、水雲と號す、錢塘の人、琴を善くするを以て、謝后、王昭儀に事へ、宋の亡ぶるや、三宮に隨つて燕に留まりしが、後、黃冠師となりて、南に歸り、匡廬彭蠡の間に往來し、世、その去留を測るなし。その詩、多く國亡北徙の事を紀し、文天祥と獄中に唱和せし諸作の如き、周詳悽惻、人、これを詩史といふ。浮丘道人招魂歌の如き、即ち其一なり。梁棟、字は隆吉、錢塘仁和の尉に調せられて、帥幕に入り、一時聲名、張甚たりしが、宋亡びて後、茅山建康の間に往來して、老子の學を唱ふ。平日吟詠を好めども、稿存するものなく、門人故を問へば乃ち曰く、吾が詩、人に傳ふるに堪へたり、將に腹藁の在るあらむとす。亦た宋末遺民の嚼然たるものなり。何夢桂、字は巖叟、淳安の人、歴仕して、大理寺大卿に至りしが、事の爲すべからざるを知り、遂に疾を引いて去り、元に至つて、累りに徵せども起たず。その詩、淳朴、規摹の跡を混ぼさるも、志節皎然、以て傳ふるに足る。なほ、宋末の詞家として、は、周密、張炎の二家あり。その源、白石より出で、蘋洲漁笛譜と山中白雲詞と、ともに措辭の纖巧婉美を以て、其勝を擅にす。

顧みれば、支那歴史、興亡八十餘朝の中、末路の悲凄慘痛、宋と明とに過ぐるものあらず。蓋し、その取つて之に代るもの、即ち異人種にして、滿廷の臣僚、之に屈するを愧ぢ、名

節の士多く輩出し、その所作、亦た觀るべきもの、理、乃ち然るのみ。

(一九) 小説戯曲の氣運

宋の一代を通じて、學者林の如く、魏晉以後、漸く高潮に趁きし深遠なる形而上學的思想は、こゝに至りて、理學となり、前代訓話の風を一變し了り、社會教育の普及、亦たこの時に過ぐるはあらず。されば、民間の學藝、亦た長足の進歩をなし、當時詞客の製作、亦た士女の玩好に適せしが、俗文學に至りては、未だ特に觀るべきものあらず。宋史藝文志に、小説類三百五十九部、一千八百六十六卷といひ、その大半は、實に宋人の手に出で、藝文志補に、四十五家、三百三十八卷といへば、その量に於ては、決して貧ならず。然れども、居然として、史外の零閑軼事を採録せしものにして、もとより、嚴正の意義に於ける小説に非ず、而して、稍や注意を値するものを、宣和遺事の一書となす。宣和遺事は、もと稱して、史の足らざるを補ふと雖も、實は彈詞の一種にして、南渡の前、人主驕奢、奸臣專横の狀を描き出し、就中、徽宗が高楊二太尉と微行して、金環巷裏に佳妓李獅々を訪ふの一段の如き、筆致極めて妖艶、次に二帝北狩の如きは、最も慘愴を極め、映照甚だ妙、自ら一篇の好叙事詩をなす。後に詳論する施耐菴の水滸傳の如きも、蓋し材を此に取りて、潤色を加へしものに外ならず。

梁紹壬曰く、小説は、宋の仁宗の時に起る。太平すでに久しく、國家間暇、日に一奇怪の事を進め、以て之を娛む、名づけて小説といふ。この事、頗る古しへの稗官と似たれども、亦た必無の事に非ず。しかも、その後、萎微して振はず、更に二三百年を経て、はじめて成形せしは、何の故ぞ。想ふに、儒教殊に當時に盛行せし理學の勢力は、小説戯曲等、謂ゆる俗文學の發達を妨礙したる最大原因たるべく、儒の本旨は、躬行實踐を尊び、世道人心を裨益するを以て、その究極となし、虛中實を見はし、無裡有を生ずる小説戯曲は、斷じて、その鄙斥するところにして、道學者流の眼光を以てすれば、すべて醉人の囁語に異ならず。これを要するに、極端なる實際的傾向を有し、且つ文學の獨立を認めざる北方思想の風潮は、上下古今、禹域全土に洽く、殊に宋代に盛にして、小説戯曲は、長く其下に抑壓せられ、萌芽未だ展びず、伏流久しく地に入りしものに外ならず。かくて、南渡の後、幹難河源の一部落、俄然興起し、驚天動地の大活劇を支那中部に演じ、やがて四百餘州を統一し、餘威はるかに東歐に震ひたるは、ひとり支那史上に生面を開きしのみならずして、漢族の思想にも、一大變動を起さしめ、制度文物、すでに革新せられ、小説戯曲の俄に發達したるも、亦たその餘勢に外ならず。樂府の變じて詞となりしもの、こゝに至りて曲となり、又俗文體を以て長篇の小説を作るもの、頻々輩出し

支那の小説戯曲、これより観るべく、文學の種別、はじめて全し。

支那の文學史は、漢族以外の異人種統轄の下に發生したるものなり。金の興隆より元の滅亡に至るまで、凡そ二百四十餘年、二朝の興替は、宋の中葉にあれども、其源に溯れば、ともに遼の餘澤を受け、仍つて、直に五代の末に接すといふを得べし。遼は、ツングス族の一派にして、即ち古しへの契丹なり。はじめ、太祖、松漠より起り、兵を以て四方を經略し、未だ禮文の事に暇あらず。その後、太宗、汴に入るに及び、晋の圖書禮器を取つて北歸し、制度はじめて修擧す。景宗より修宗に至るの間は、その極盛期にして、科目を以て、人を取り、崇儒の美風、亦た漸く盛ならむとす。然れども、塞外自然の風氣、もとより剛強にして、三面敵に隣し、歲時蒐獮を以て務となせしが故に、典章文物、なほ闕如たり。遼史文學傳、載するところ、蕭韓呼奴、王鼎、耶律昭、劉輝、耶律孟簡、耶律谷欲の徒ありと雖も、未だ觀るに足らざるなり。

第四期 近世文學

第一 金元文學

(一) 異人種の優勢と文運の消長

金元文學は、漢族以外の異人種統轄の下に發生したるものなり。金の興隆より元の滅亡に至るまで、凡そ二百四十餘年、二朝の興替は、宋の中葉にあれども、其源に溯れば、ともに遼の餘澤を受け、仍つて、直に五代の末に接すといふを得べし。遼は、ツングス族の一派にして、即ち古しへの契丹なり。はじめ、太祖、松漠より起り、兵を以て四方を經略し、未だ禮文の事に暇あらず。その後、太宗、汴に入るに及び、晋の圖書禮器を取つて北歸し、制度はじめて修擧す。景宗より修宗に至るの間は、その極盛期にして、科目を以て、人を取り、崇儒の美風、亦た漸く盛ならむとす。然れども、塞外自然の風氣、もとより剛強にして、三面敵に隣し、歲時蒐獮を以て務となせしが故に、典章文物、なほ闕如たり。遼史文學傳、載するところ、蕭韓呼奴、王鼎、耶律昭、劉輝、耶律孟簡、耶律谷欲の徒ありと雖も、未だ觀るに足らざるなり。

金も亦た遼と同種、ツングス族の一派にして、元と女眞と稱し、完顏阿骨打に及び、自

ら帝と稱し、國を大金と號す、太祖是れなり、太宗に至りて、遼を亡ぼし、宋を破り、徽欽二帝を虜にし、大に中國を削侵せり、これより先、遼の舊人を得て、文書を司らしめ、又選舉の法を立て、漸次文化に向ひしが、こゝに至りて、經籍圖書と中國の士人とを得、又宋の使者を拘留し、その文物技能を移植するを務め、奎運大に振へり、之を要するに、金の文學は、遼の遺文と宋の徳教とを以て、其源となし、輿國の氣運に乗じて、忽ち長足の進歩を爲せしものなり、熙宗の時、孔子を祭つて、北面弟子の禮を執り、世宗、章宗に及びて、禮樂正に修まり、庠序日に盛にして、士の科第より宰輔に上るものあり、儒學専門の名家、未だ多からざりしと雖も、朝廷の典章、隣國の書命に至るまで、觀るべきもの、少からず、奎運の隆、こゝに極まる、金史文藝傳、載するところ、文學の士、彬々として觀るべし、而して一代の詩豪、元好問を出すと同時に、胡元の勁敵に抗する能はず、その社稷、不幸にして覆滅の否運に臨みぬ、且つ夫れ、金の國を建つるや、太だ淺陋にして、歷代の述作、兵火に蕩盡し、前は宋に掩はれ、後は元に壓せられ、今や細に其蹟を尋ぬるの手段なく、幾多の名士をして、千秋聞くなからしむ、これ尤も痛嘆すべきなり。

元は即ち蒙古にして、その建國は、宋の寧宗の時に在り、その文學、之を金元より承く、然れども、傳播發達の比較的遲緩なりしは、自國に特有の文字あり、漢族の文化を移植

すること急ならざりしに因る、世祖忽必烈に及び、宋を滅して、中國を併呑し、その版圖の大、史上稀に見るところ、亞細亞の東部より起り、歐羅巴に及び、餘威遠く南洋諸島に震ひぬ、かくて漢族の舊土を統轄するや、新字頌の詔を發し、その人文を革新せむとしたりしが、遂に廣く行はるゝに及ばず、これを一概すれば、善く漢族從來の文物を保存せり、勿論宋代に發達したる思索的學問は、この間に於て、萎微甚だ振はざりしと雖も、異人種の侵入は、中國因襲の習慣風俗を打破するに、頗る有効にして、文學に對する因襲的思想、承嗣的觀念の外に立ちて、新に小説戲曲等、輕文學の發生を促したりき、實際的傾向を有する漢族の間に於て、這般文學の勃興を見たるは、まことに空谷の跫音にして、文學史上に於て、特筆大書すべき緊要事項なり、若し元の國祚にして、さばかり短からざりせば、漢族は、その統治の下に在りて、根柢より、その風俗習慣を刷新し、有力なる一國民となりて、進取的氣象を促進し、世界の文化に對して、偉大なる貢獻をなせしやも、亦た知るべからず、凡そ大なる國家の滅亡は、偉人の天死と同じく、まこと痛惜すべし。

金の文學は、主として詩に在り、而して、元は更に曲を加ふ、蓋し兩者ともに其國を朔漠に建てしを以て、その風俗豪健なると同時に、その辭藻の上に發現せるもの、亦た自

ら一種幽麗悲壯の聲調を含有して、その真情の流露せるを認むべし。たとひ元末に在りては、稍や浮靡に失するの嫌ありとするも、試に之を江南軟柔の地に生長せる文林詞苑の徒が琴酒遊興の間に漏洩せる篇什に比すれば、瑣猥のもの、猶ほ極めて少きを覺ふ。これを一言すれば、金代の詩は悲壯なり、元代の詩は穢麗なり、金代の詩の悲壯なる所以のものは、その國隣敵と境を接して、兵馬攻守に従事し、一日も枕を高うする能はざりし結果として、その人をして愈よ豪健の氣を養成せしめしが故ならむ。しかも宋詩の俚鄙に染まざるは、最も貴ぶべし。元詩の麗なる所以のものは、その國、すべてに宇内を包舉し、秦平を謳歌せし結果として、その人をして、浮靡華麗の嗜好を増長せしめしが故ならむ。彼の小説、詞曲の如き、遊戯の文章、この時に於て、その發達を見しも、亦た一證となすべし。而して、元遺山虞集、楊鐵厓の徒、二三を除けば、金元ともに、一般に大嶽長河の魂を驚かし、目を駭かすが如き規模なくして、之を短に失し、小に失し、微に失し、細に失するの傾向あるは、その時世の自ら致すところ、亦た之を奈かむともするなし。若し夫れ、元曲に至りては、前古未曾有の筆墨にして、漢の史、唐の詩、宋の文と並稱せらる。金元の文學、豈に輕視すべしや、而して、世人、これに注意するもの極めて少きが故に、その研究、愈よ精該細緻ならざるべからず。

(二) 金朝文學の先聲

金の文學が、宋遼二國の舊人に依りて、播種せられしことは、すでに前章に於て略述せしが、猶ほ當時學者の小傳を擧げて、之を詳述せむに、その先づ指を屬すべきは、宇文虛中及び韓昉、吳激等なるべし。

宇文虛中は、本と宋の黃門侍郎なり、使して金に入り、留まり仕へて、翰林學士に拜せらる。學問淵博にして才藻多し、韓昉は、本と遼の狀元、金に仕へて宰相となる。能文の士にして、詔冊は、その尤も長ずるところといふ。かつて太祖睿德神功碑を作つて、時に稱せらる。吳激、字は彥高、自ら號して東山といふ。宋の宰臣拭の子、王履道の外孫にして、畫家米芾の女婿なり。詩に長じて、筆札に工に、畫は婦翁の筆意を得たりと稱す。宋命を以て金に使用するや、金、その知名の士なるを以て、之を留め、翰林待制に拜し、出て、深州に知たらしめしが、官に到る三日にして卒す。その作るところ、春風蜀棧、青山盡、曉日秦川、綠樹平の如き、數樹殘花、喜春在、一聲啼鳥、覺山深の如き、海東絕域、皇華使、天上仙宮、碧落鄉の如き、竹院鳴鐘、疑物外、畫橋流水、似江南の如き、以て一斑を見るべし。その著、東山集あり、就中、樂府は、造語清婉、哀んで傷らず、金朝の第一手と稱せらる。激と同時に蔡松年あり、その父靖は、宋の燕山太守、金に仕ふるに、及びて翰林學士となる。松年、字は伯堅、省

吏より身を起して、尙書右丞相に至る。文詞清麗、亦た樂府に長じ、吳激と名を齊うし、後世因つて吳蔡體といふ。

これを外にして馬定國あり、字は子卿、在平の人、少にして志趣非凡、かつて詩を酒家の壁に題して曰く、蘇黃不作文章伯、章蔡譎爲社稷臣、と之を以て罪を得しが、又爲に名を知らる、金に仕へて翰林御史に拜せらる。高士談、字は士文、又季默といふ。宋の宣和の末、浙州司戸に任じ、金に仕へて翰林學士となる。その子公振、詩名あり、その他、遼より來りしものには、王樞あり、李獻可あり、魏道明あり、宋より來りしものには、王競あり、杜佺あり、兆會あり、朱之才あり、施宜生あり、皆當時の俊才にして、或は知名を以て顯はれ、或は奉使を以て留まりたるもの、その國破れ主辱めらるゝの時に方り、甘心して活を仇讐に求むるに至りては、大節すてに缺亡、未だ士君子を以て稱すべからずと雖も、金の文學、實に此等諸人の手に依りて種植せらる、その功や固より多し。

金朝文學の先聲は、誠に此の如く然り、宇文韓、吳蔡、馬高の如き、固より傑出の才に相違なしと雖も、猶ほ是れ宋儒なり、遼儒なり、もし金朝文學の統派を以て之を論せば、その正傳の宗と爲すべきものは、蓋し蔡珪ならむ。

蔡珪、字は正甫、松年の子なり、齡甫めて七歳、菊を賦する詩を作り、語意ともに人を驚かすものありしといふ。帝亮の天德三年、進士の第に登りしも、選調に赴かず、猶ほ未見の書を求めて、之を讀み、學問の該博、當時第一と稱せられ、朝廷の古禮文を稽ふるや、必ず多くその議論を採取するを以て例と爲せりといふ。世宗の大定四年、禮部郎中を以て、出て、純州に守たり、任に赴くや、道に卒す、著すところ、甚だ多く、その燕王墓辨の如きは、引據甚だ明かに、學者之を馬定國の石鼓考と並び稱して、今に世に傳ふ。尤も文章に妙を得、詩はその所長に非ざれども、觀るに足るもの猶ほ多し。また書に巧なり、蓋し書は、その父松年の由つて名を獲たるところ、父子の筆法、恰も一手に出つるが如し。孫九鼎、字は國鎮、忻州定襄の人、蔡珪に較ぶれば、學問文章、遠く下ると雖も、太宗の天會六年、經義第一を以て及第せしもの、その弟九疇、及び億とともに、時名を負ふ。就中九疇尤も英雋、趙可は、貞元二年の進士なり、風流にして文采あり、詩に工に、樂府に長ず。任詢は、正隆二年の進士、人と爲り慷慨にして、大節あり、書法は推して、當時の第一と爲す。書も亦た妙、評者相稱して、書は書よりも高く、詩は詩よりも高く、詩は文よりも高しとなせども、未だ必ずしも然るに非ず、一たび仕官せしが、時に力を假すものなかりしを以て、連蹇進まず、遂に致仕して、郷里に優遊し、年七十にして卒す。詩數千首ありしも、歿後に散亡して、殆んど傳はらず、之を外にしては、邊元鼎あり、字は德舉、兄元勳、元恕とともに

時名あり、三邊と號す。天資疎俊、詩文に高意多く、時輩及ぶなし。その他、鄭子聃、劉汲、劉瞻、郝侯、馮子翼、李晏、王運寂、劉仲尹の徒、亦た一時の選たり。而して、此等の諸家、或は經義に長じ、或は文章に秀て、或は詩詞に妙、韓高、吳禁に次いで、祖述の力を盡せしを以て、蓄積の功、遂に空しからず、因つて、大定、明昌、貞祐、正大の隆運を致し、黨懷英、趙秉文等の名家を出すに至り、金の文學はじめて大に振ひぬ。

(三) 金朝盛時の諸家

世宗の大定より哀宗の正大に至るまで、七十餘年は、金朝文學の全盛期にして、その文派の正傳を受け、蔡珪に次いで一代の文柄を握りしもの、大定、明昌の際には、黨懷英あり、貞祐、正大の際には、趙秉文あり。これを宋時の歐蘇に比すれば、家數の大小、固より異なれども、その位地聲望、極めて相肖たりといふべし。

黨懷英、字は世傑、少にして穎悟、日に數千言を授けらる。試に應じて志を得ず、又數ば名場に困みしが故に、復た世務を以て懷に置かず。好山、名水の間に放浪して、詩酒自ら樂み、箴瓢空しきも晏如たり。大定十年、はじめて、進士に擧げられ、累進して、翰林學士に至りしが、後致仕し、大定三年、年七十八にして家に終る。諡して文獻といふ。趙秉文、これが墓誌を作りて云ふ、公の文は歐公に似て、尖新危險の語を爲さず。公の詩は、陶謝に似

て、魏晉を奄有すと、これ固より過褒たるを免れずと雖も、以てその體裁を想見すべく、殊に制誥の如きは、金朝開國以來第一と稱す。又筆札に工に、篆籀は尤も長とずるところ、傳神の妙を得たりと稱す。故に秉文又稱していふ、古人は一藝に名あれども、公は獨り之を兼ねたりと、眞に全才といふべし。その詩、題春雲出岫圖の短古は、東坡の江上愁心、千疊山と相並んで、神韻の饒なるを見るべし。

王庭筠は、稍や次なれども、黨懷英と略ぼ雁行すべく、當時に在つては、固より傑出の才なり。庭筠、字は子端、熊岳の人、夙に重名を負ふ。大定十六年、甲科の第に登るに及びて、風流文采、一時に照映し、作るところの篇章、卓然として、時輩の右に出づ。その「人隨白雁霜前到、詩繞青山馬上成」の如き、人心但秋物、天下近庭梧の如き、以て才調を見るべく、書は米元章を學び、得意の處は、髣髴として、その神髓を奪ふ。平生、天平、黃華の山水を愛し、其下に棲居すること十餘年、因つて自ら號して黃華山主といふ。その人と爲り、眉目秀美、談笑俯仰、皆觀るべし。また能く節を折つて士に下り、その及ばざるを恐るゝものゝ如く、苟くも一能一藝の取るべきあれば、口を極めて之を稱道せしが故に、人皆その相見るの晩きを恨みしといふ。卒するるとき年四十七。

趙秉文、字は周臣、自ら號して閉閑といふ。滏陽の人、幼にして穎悟、書を讀むに夙習あ

るが如し、大定二十五年進士に第し、興定中に至つて禮部尙書に任し、侍讀を兼ね、歿する時、年七十五、秉文幼より老に至るまで、未だ嘗て一日も書を廢せず、著すところ、頗る多し、その文は、大抵義理の學より出づるが故に、尤も辨析に長じ、復た繩墨を以て自ら拘せずして、その言はむと欲するところを極めて止む、その詩に於けるや、七言排律は、氣勢縱橫、律詩は壯麗、絶句は精絶、五言古詩に至りては、沈澁頓挫は阮嗣宗を學び、眞淳簡淡は陶淵明を學べりと稱す、その廣武山川、迷故壘、成阜、草木闕空城の如き、嶺上風煙、高鳥路、山頭雲、雨化人宮の如き、萬古山河、雄朔部、四時風月、入南樓の如き、雲山浮近句、宇宙有高樓の如き、幽麗の中に一種悲壯の氣を含み、以てその風骨を窺ふべし、人と爲り至誠樂易、人と交るに崖岸なく、黨懷英に次いで一世の文柄を掌握すること、殆んど三十年に及べども、未だ嘗て大名を以て自ら居らず、五朝に歷仕して六卿に官すれども、自ら奉ずること、寒士に同じく、富貴の何物たるかを知らざるが如し、泰和大安以後、科擧の文、唯だ程度に苟合するものを取り、少しく奇氣あるものは、皆之を排す、秉文之を慨し、貞祐の初省試を司るや、李獻能の作、格律や、疎なるも、詞藻富麗なるを以て、首として之を拔く、當時異論多く、擧人臺省に訴へ、秉文を以て文格を破壊するものとなすに至る、然れども、流弊爲に一洗し、學者、これを宋の歐陽修に比す。

秉文と相並ぶものを楊雲翼となす、字は之美、樂平の人、資性英敏、博く經傳に通じ、天文、律曆、醫卜の學に至るまで、究到せざるなし、母に事へて至孝、人に交つて、欺曲周密、事に處して詳雅、しかも能く大節を以て自ら任じ、死生禍福を以て志を易へず、趙秉文と文柄を代掌すること二十年、金氏の高文大冊、多く其手に出で、門生天下に半し、時人並稱して楊趙といふ、興定の末、吏部尙書に拜せらるゝや、中外その旦暮入つて相たらむことを望みしが、足疾を以て果さず、翰林學士を以て終る、天下識ると識らざると、皆之を哀惜す、時に年五十九。

楊趙の外、李純甫、雷淵、最も傳ふべし、純甫字は之純、號を屏山といふ、弘州襄陰の人、人と爲り聰敏、少にして自ら才を負ひ、氣に任じ、以爲へらく、功名手に唾して取るべし、と、矮柏賦を作り、諸葛亮、王猛を以て自ら期す、然れども、又勉勵し、書に於て窺はざるなく、尤も莊列、左氏國策に通じ、その文章、亦た之に肖たるもの多し、三十以後、偏ねく佛書を讀み、能くその精微を盡くし、又道學の書を讀み、一書を著し、三家を一となし、更に伊川、横渠、晦菴、諸儒の得るところに就いて、一一商略し、秋毫も假借せず、且つ之と同時に生れて、辨難攻撃せざるを憾みしといふ、その氣概、亦た想見すべし、後、時事の漸く非にして、道の行はれざるを度り、意を仕進に絶ち、頽然として酒に隠れ、未だ嘗て一日も飲ま

ざるなく、飲んで酔はざるなく、禪僧士子の輩と文酒の間に遊戯して、歌呼歌舞、或は禮法の外に出づ。また賢を好み、善を樂み、新進の少年と雖も、往いて、その門に遊へば、必ず之と爾汝の交を爲し、復た貴重せず。卒するとき、年四十七。雷淵、字は希顔、別字は季默、應州渾源の人、人と爲り、軀幹雄偉、髯張り、口哆し、顔は渥丹の如く、眼は望羊の如く、不平の事に遇へば、疾惡の氣、眉宇の間に見はれ、或は齒を嚙んで大に罵る。痛く自ら懲折すれども、粹に變ずる能はず。食は三四人を兼ね、飲は數斗に至るも亂れず、淋漓として醉談し、その辭氣の縦横なるは、戰國の策士の如く、歌唱の慷慨なるは、關中の豪傑の如く、事の成敗を料るは、宿將の如く、操心の危にして慮患の深なるは、謂ゆる孤臣孽子の如く、平生、孔融、田疇、陳元龍の入と爲りを慕ふ。而して、人も亦た古人を以て之に比せり。故にその詩賦文章の如きは、固より、稱して一代の作家と爲せども、淵に在りては、緒餘に過ぎず。淵、三歳にして父を喪ひ、七歳にして諸兄に養はれ、長じて十四五歳に至るも、貧にして資となすなきが故に、發憤し、冑子を以て國學に入り、刻苦して書を讀み、その間、賓客を送迎せず、人にて倨となして齒するものなかりしが、李純甫に従つて學ぶに及び、學問文章、日に進んで、その名、益す重し。正大八年卒す。年四十六。蓋し當時濟々たる多士の中、豪傑を以て稱せられしは、實に李雷二人のみ。

明昌正大の際に在つて、碩學奇才、楊趙李雷の徒と相前後して名をなせるもの、猶ほ頗る多し。趙昂、字は之昂、その長ずるところは、賦律にして、輕便巧麗の文字を排儷し、優に一家を成し、詩も亦た晚唐の體を得て、尤も絶句に工に、往往人口に膾炙す。劉中、字は正夫、賦は楚辭の句法を得て、詩は清便喜ふべく、尤も古文に長じ、典雅雄放、頗る韓柳の氣象ありと稱す。子弟に教授すること多年。王若虛の如き高法麗の如き張履、張雲卿の如き、皆その門下に出て、高第に擢んでられしが、故に、當時古文に志あるものは、翕然これを宗とし、劉先生といへり。路鐸、字は宣叔、詩に長じ、清緻溫潤、自ら一家を成し、父伯達、弟和叔と相並んで、ともに重名を負ふ。高憲、字は仲常、博覽強記、大學中に在りて、敢て之と抗するものなく、自ら言ふ、世味に於ては、淡として好むところなく、唯だ文學の間に生死せむのみ。世に東坡あらしむれば、相去ること萬里と雖も、亦た當に往つて之を拜すべしと。趙元、字は宣之、詩名あり。趙秉文、雷淵、皆之を愛し、至るところ、左を虚うして待つ。後、明を失ふや、營爲するところなく、萬慮を擧げて、一に詩に歸し、因つて愈よ妙を加へ、殊に五言は、正淡にして、他人到り易からずと稱す。王若虛、字は從之、李純甫と相抗立し、その數語を出すや、純甫をして、再び舌を鼓する能はざらしむといふ。麻九疇、字は知幾、又重名あり、牛童馬走、亦た能く姓名を記し、耆宿、趙秉文の如き、猶ほ微君を以て之

を目して、名いはず、その文は巧ならざれども、詩は尤も得意とするところ、殊に物を賦するに妙なり、その他諸家一一こゝに具せず。

これを要するに、以上の諸家は金朝文學の盛時に於ける士林の録録たるものにして、趙秉文、楊雲翼の名節、周昂、李獻能の孝友、雷淵、李純甫の豪傑、或は宰相となり、或は狀元となり、或は異人、隱逸となる。その作るところを觀るに、或は沈鬱、或は簡淡、或は奇崛、或は巧縟、各その流派を殊にすれども、之を一概するに、養ふところの氣格は完全に之を得て、金源氏の文運を鼓吹し、一時殆んど前代を凌駕せむと欲するの概ありしと雖も、國運漸く非なるや、時は之を待たず、加ふるに、西伯の元帥、崔立之、兵を擧げて亂を爲し、禍の及ぶところ、博學宏詞の徒、首を駢べて難に死せしかば、その藝文の發展、亦た爲に一頓し、わづかに、その過渡として、たゞ一の元好問を出せしのみ。

元好問は、金の遺臣にして、其朝の詩を集録して、中州集を撰せり、その人、二百四十の多きに至る。蓋し金詩は、晚唐を學び、一種の氣骨を以て、之を矯正せしものにして、悲壯感慨の趣、宋元二朝の上に在り、而して、最も稱すべきは、その撰者たる好問、その人に外ならず。

(四) 元好問

金朝文學の權柄は、一に元好問の手に在り、好問は、大定、明昌の際に於ける黨懷英と貞祐、正大の際に於ける趙秉文とに次いで、文章の正傳を得、因つて一時の主盟たりしものにして、後人之を宋に蘇東坡ありしに比す、その著宿凋零の後、海内の重名を一身に集むること三十年、文辭の妙、愈よ加はるに至りては、今古幾んど其匹を絶てりといふも不可なし。

元好問、字は裕之、遺山と號す。太原定襄の人、その系、拓跋魏に出て、その父德は、實に金の文學を重からしめしものにして、遺山の素は、即ち家學に在り、年十四、陵川の郝晋卿に従つて學び、經傳百家を淹貫し、六歳にして業成り、太行を下り、大河を渡り、箕山、琴臺の詩を作る。時に趙秉文、禮部に官して、重名あり、之を見て、以爲へらく、少陵以來、この作なしと、書を以て、之を招く。こゝに於て、その名、京師に震ひ、稱して元才子といふ。正大年間、鄆州南陽令に辟せられ、轉じて、内卿令となり、尙書都督掾となり、天興の初、翰林に入り、官は尙書省左司員外郎に至る。金亡びて仕へず、著作を以て、自ら任じ、乃ち亭を家に構へ、名づけて野史亭といひ、金源君臣言行録を作り、他に壬辰雜編、中州集等の撰あり、郝經、之を稱して曰く、汴梁亡びて、故老皆盡く、先生遂に一代の宗匠となり、文章を以て天下に獨歩すること三十年、天下功德を銘するもの、盡く其門に趣くと、卒するとき、年

六十八

遺山詩文、ともに妙、金史本傳に云ふ、文を爲る、繩尺あり、衆體を備へ、その詩、奇崛にして、彫削を絶ち、巧纏にして、綺麗を謝し、五言は高古沈鬱、七言樂府古題を用ひずして、特に新意を出す、と。紀曉嵐又曰く、好問才雄にして學瞻、その趣、皆與象深遠、風格迥上、文亦た繩尺嚴密、根柢盤深なり、と。まことに筆墨勁健、銘詞雄宏、一往疎宕の氣、その間に滿つるは、諸家ともに及ばず、然れども、詩名特に重きは、百世の公論、斷じて争ふべからず、これを唐宋の諸大家に比すれば、固より相及ばずと雖も、その血脈境遇、ともに朔北に承け、且つ其時恰も社稷の覆亡に際したるを以て、悲壯激越、最も感愴に富む、趙甌北、かつて之を評して曰く、才甚だ大ならず、書卷亦た甚だ多からず、之を蘇陸に較ぶれば、自ら大小の別あり、然れども、正に惟れ才大ならず、書多からず、しかも専ら精思銳筆を以て、精鍊して之を出す、故にその廉悍沈摯の處は、やゝ蘇陸に勝れり、蓋し雲朔に生長し、その天稟、本と豪健、英傑の氣多く、又金源の亡國に値ひ、宗社邱墟の感を以て、發して慷慨悲歌を爲す、工を求めずして、自ら工を爲すものあり、これ固より地之を爲し、時之を爲す、と。遺山の詩、大要實に此の如し。

遺山の所長は、古體特に樂府歌行に在り、同時の李冶曰く、樂府は清雄頓挫俗を用ひ

て雅と爲し、故を變じて新と爲し、前輩不傳の妙を得たり、と。郝經曰く、その歌謠跌宕、幽并の氣を挟み、一世を高視す、五言を以て、雅に工を爲し、奇を出し、長句雜言に於て、新聲を掄揚し、以て怨思を寫す、と。沈德潛又曰く、七言古詩、氣王神行、平蕪一望、時に常に峰巒高く挿み、濤瀾地を動かすの概を得たり、又東坡後の一能手なり、と。趙甌北は、之を蘇陸に比して曰く、蘇陸の古體、行墨の間、尙ほ排偶多し、一は以て、その辨博を肆にし、一は以て、その藻繪を侈る、固より才人の能事なり、遺山は専ら單行を以てし、絶えて偶句なく、構思窅渺、十步九折、愈よ折れて、意愈よ深く、味愈よ雋、蘇陸と雖も、及ばざるなり、と。因つて、その七律を稱して曰く、沈摯悲涼、自ら聲調を爲す、唐以來、律詩の歌ふべく泣くべきもの、少陵十數聯の外、絶えて嗣響なく、遺山は往々にして之あり、と。然れども、要するに、身世の變偶、ま得たるものにして、思力の深厚を缺き、且つ複句の多き、殊に甚しく、その才、甚だ大ならざるの誦、こゝに於て、愈よ見るべし。

試に集中に就いて、その傑作佳句を求むれば、七律は車駕遁入歸德の「白骨又多兵死鬼、青山元有地行仙」、蛟龍豈是池中物、蟻蝨空悲地上臣、高原水出山河改、戰地風來草木腥、出京の「只知灞上眞兒戲、誰道神州竟陸沈」、送徐威卿の「蕩蕩青天非白日、蕭蕭春色是他鄉」、鎮州の「只知終老歸唐土、忽漫相知是楚囚」、日月盡隨天北轉、古今唯見海西流、還冠氏に「千

里關河高骨馬、四更風雪短檠燈、座主閉閉公諱日の、贈官不暇如平日、草詔空傳似奉天、贈王仙翁の、燕南趙北非全土、王後盧前總故人、といふが如き、皆時に感じ事に觸れ、聲淚共に下り、千載の下、猶ほ讀者をして低徊措く能はざらしむ。若し夫れ、甲午除夜の詩に、神功聖德三千牘、大定明昌五十年、といふに至りては、前朝の盛を忘れざりしも、亦た念ふべく、その他、放言送李參軍北上の諸篇は、以て本來の面目を想見すべく、解劍行、王黃華、墨竹、湧金亭、墨竹等の作も、七言古詩の雄篇と稱す。五言古詩に至りては、箕山、瀟水、南溪、赤壁圖等の諸篇を推すべく、絶句も亦た寄托遙深にして、趣致清新、雋味多きもの、間ま之あり。

遺山に次いで附記すべきもの、郝經あり。經は遺山の師、郝晉卿の孫、元初に在りて、名を擅にし、遺山と壘、麴相和せり。元の憲宗の釣魚山に殂するや、世祖に勸め、急に北に旋つて即位せしめ、後、宋に使し、賈似道の爲に眞州に拘へらるゝこと數年、遂に臣節を屈せず。その人、固より雋偉、その詩、遺山と略ぼ規を同うし、時に甲乙を辨ずべからざるものあり。遺山をして、名場誰與子爭先といひ、捧腹正有五千卷、下筆須論二百年といふに至らしむ。その俊邁の詞章、亦た一代の絶品なり。

(五) 劇の發達

凡そ東亞の人文史上、劇といへば、人は直に元代を想起す。乃ち謂ふ、支那の劇あるは、元より昉まると、然れども、支那の劇は、今日と雖も、正劇即ち歌舞伎に非ず、而して劇の名は、もと元より昉まるとに非ざるなり。論者或は齊の景公、魯の定公と夾谷に會し、齊の優倡侏儒、戲を爲して進むや、孔子趨つて進み、匹夫して諸侯を榮惑するもの、罪、斬に當す、といひ、有司法を加へ、手足處を異にすといふを引けども、優の史に見ゆるは、その例、なほ前に在り。或は、優伶戲文は、優孟の抵掌を濫觴とすといへども、又、迂と云ふべく、後世、装旦の漸を漢書に求め、宦者傳の脂粉を傳ふの侍中に繋けむとする等、史書に見ゆるもの、外、絶えて事物の源委を考ふるものなしとなすは、善く古を論ずるものに非ざるなり。魏書の陳思傳、又粉墨椎髻、胡舞して、優孟小説を誦することを記す。蓋し假りて以て豪俊爽邁の氣を逞しうせしものならむと雖も、かくの如き優家者流の裝束、民間に行はれたりしこと、如何に悠遠なるかを知るべし。教坊に雜劇ある、又久し。唐宋の舊俗を記するもの、以て稽求に資すべし。蓋し昔時雜劇ありて、劇文なし、公家宴を開くごとに、百樂具陳すること、漢魏の世、すでに然り。唐に至りては、歌者の外、殊に舞隊を重んじ、歌舞の外、又樂器に精しきものあり、琵琶、羯鼓の屬の如し。この外、俳優雜劇、以て一笑に供するに過ぎず、その用、蓋し傀儡と甚だ相遠からず、故に雅士の意を留むるとこ

ろに非ざりしなり。宋の世亦た然り。南渡の後、稍や淨旦等の目あるを見るも、その用、以て大に異なるところなかりき。元に至りて、許多の雜劇より以下、琵琶、西廂の二傳奇、相踵いて、迭に才情を出し、すでに即奏に富み、加ふるに、演習に工なるや、梨園幾んど天下に半し、上都邑より、下、閭閻に至るまで、一劇を演ずる毎に、往々にして夕を窮め、且に徹し、衆樂ありと雖も、雜陳に暇なし。これ古今の一大變革。故に劇といへば、直に元代を想起すること、もとより、理なきに非ざるなり。

これを要するに、原始的劇、即ち假裝劇の一種は、遠く其源を周代に發し、唐宋に至りて、稍や進歩せしと雖も、集合美術としての劇は、元代に至りて、はじめて稍や觀るべく、劇は、こゝに漸く成形するに、庶幾からむとせり。詩樂の關係は、屢ば予輩の考察を経しが、こゝに劇の發達を論ぜむと欲せば、自然の勢、歌舞の關係に就いて、知るところなくむば、あらず。毛奇齡、かつて、之を論じて、頗る其要を得たり、今その言に據り、且つ聊か附益し、以てこの問題の解釋を試むるを得む。古しへ、歌と舞とは相合はず、歌には舞はず、舞には歌はず、こゝに於て、舞曲中の詞、亦た必ずしも舞者の搬演と照應せず。唐人、柘枝詞、蓮花鏤歌を作つてより、舞者執るところと、歌者措くところと、詞、稍や相應ず、然れども、未だ事實を以て脚色せしもの、あらず。

りき。宋の鼓子調は、趙德麟の蝶戀花に始まり、會真記の事實を以て詞曲に譜せしが、なほ演白なし。蓋し鼓子調は、一人鼓に和して歌ふが故に、この名あり。知るべし。事實を譜するは、先づ歌曲に於て試みられしが、舞曲に於ては、なほ然らざりしを。

金に至りて、絃索調あり。絃索調は、一人琵琶を彈じて念唱するが故に、此名あり。而して、その首たるものは、金の章宗の朝に於ける董解元にして、又會真記の事實を譜し、名づけて西廂擲彈詞といへり。會真記は、こゝに、西廂として知られ、彈詞なるもの、亦たこゝに起りぬ。彈詞には、白あり、曲あり。これを要するに、當今吾が邦に行はる、淨瑠璃と視て大差なかるべし。

絃索調は、更に進んで、連廂となりぬ。これ金人が遼時大樂の製に仿ひしものにして、こゝに、歌舞の合同を見るや、はじめ、舞臺の裝置を備ふるに至れり。連廂には、歌者たる司唱一人、琵琶、笙、笛を彈吹するもの、各一人の外、男形たる末泥と女形たる旦見と、並に襪色人若干あり。勾欄に入つて扮演し、唱詞に従つて、舉止を爲す。例せば、參了菩薩といへば、末泥、祇揖し、只將花笑然といへば、旦見、花を燃るの類、北人今に之を連廂といひ、因つて、連廂を打すといひ、連廂を唱ふといひ、又連廂の搬演といふ。連廂の義に就いては、二三の異説あり。毛奇齡は、西廂を連ね、舞人にして、其曲を演すが故に、云ふといひ、廂

を以て、劇の發達の中心にして且つ曲名たる西廂の義となせしが、廂は舞臺の一隅を意味し、こゝに歌者・樂人・舞人連坐するが故に云ふとなす方、むしろ穩妥なるに非ざるか。連廂は、すでに歌と舞とを合はせしが、しかば猶ほ舞ふものは唱へず、唱ふものは歌はず、古人の舞法と以て異なるなし。而して、連廂の劇文は、これを連廂詞といへり。

元に至りて、劇は更に長足の進歩をなしぬ。これ固より、時勢の要求ならむと雖も、その一、これを歐西文化の影響に歸するも、當時相互交通の頻繁なりしを知るもの、必ず直に之を否定することを爲さざるべし。連廂は、更に進んで、雜劇となりぬ。即ち雜劇なり。こゝに於て、勾欄に舞ふもの、自ら歌唱を司り、而して、第だ笙笛琵琶を設けて、其曲に和するのみ。わが邦の能は、實に之に模せしものなるが故に、能の何物たるかを知れば、容易に雜劇の性質を解知し得べし。雜劇の劇文は、即ち曲なり。雜劇の特質として、入場ごとに四齣を以て度となす。その曲、皆四折なるは、即ち此故なりとす。

雜劇すでに事實を譜す。而して、一事を譜するに、一劇に止まらず、換言すれば、四折以上のものは、元末に始まり、その劇文は、名づけて院本といへり。世に傳奇といふもの、即ち是れなり。西廂は、前後合せて二十折、即ち五劇にして、一事を譜せしものなり。時降れば、往々にして四五折、雜劇に十數倍なるものさへあり。この劇に在りては、司唱一人

ありて、勾欄の舞人に代つて唱を執る。その舞人自ら唱ふるは、代唱といふ。但し、その唱ふるもの、たゞ二人、末泥は男唱を主とし、旦兒は女唱を主とし、他に若し襍色場に入れば、第だ白あつて唱なし。之を賓白といふ。客は主と對す。白を説くは客に在つて、唱者自ら主あるを以てなり。その之を北曲といふは、はじめ、北方に發達せしが故のみ。

北曲は、北人の創意に成りしものにして、その性質上、もとより南人に譜はず。こゝに於て、元末明初に至りて、南曲あり。南曲に在りては、襍色人皆唱へて、客主を分たず。その他、なほ多少の差異あり。明時の南曲は、唯だ管絃を用ふるのみなりしが、嘉隆年間、崑山に魏良輔といふものあり、舊習を革め、はじめて、衆樂器を備へてより、劇場幾んど大成し、漸く正劇に近きを得たり。これを崑曲といふ。北曲は、明の中葉以後、すでに廢絶せしが、そは他の故あるに非ず。吳人南を重んじ、殊に崑曲一時に盛行せしが故のみ。こゝに於て、唐宋の謂ゆる劇、即ち假裝劇は、今、なほ教坊中に其習を遺すと雖も、わづかに、人の一笑を引くに過ぎず。而して、現時の支那劇は、その本質、南曲に屬し、しかも歲月久しきを經て、自然に幾許の變化を累ねしものなり。

支那劇の發達、略ぼ此の如し。而して、予輩の此に爲すべきは、これ等の劇に伴へる劇文、即ち脚本の文學的批判に在り。されば、上に説くところ、往々にして、不十分の嫌あり。

更に細心精緻の研究を要すべきも、たゞ大體を知り得たるを以て、略ぼ足れりとし、以下、主として、曲に就いて、述ぶるところあるべし。

(六) 戯曲の形式

宋金の間に於ける鼓子調、絃索調、連廂等は、劇の發達上、極めて重要なりといへども、その曲本、傳ふるもの少きを以て、こゝに詳論せず。これに次いで、金の院本は、輟耕錄に、その名目を載すと雖も、その存否如何を詳かにせざれば、今日その性質を明かにして、批判を著くるを得ず。これに次いで起りし元の雜劇の曲本(普通に謂ゆる雜劇)は、その體裁、前の數者と異にして、全篇の半は律語を以て成り、その間の接續として、時文を倩ひ來つて科白となすを常とす。而して、その律語は、即ち曲にして、詞と異なり。詳言すれば、詞より變化して、一種の規律を存すべき約束を有するものなり。されば、詩の詞に於ける曲の詞に於ける、恰も相似たりといふべく、その連鎖として、兩者に共通の調あるが如き、明かに之を證するものといふべし。

然れども、詞は直に變じて曲となりしに非ずして、その間に大曲あり。大曲は、もと數調を連ねて一閱となし、首尾一貫したる詞の一體にして、若し其間に時文を挿入して、科白となせば、その形式上、雜劇の一折と酷似するの觀を呈すべし。但し、宋の大曲は、樂府雅詞に載する董穎の薄媚(西子詞)一閱の外、不幸にして完全なるもの、現存せず。高麗史樂志に載する惜奴嬌曲破も、大曲たるべきも、殘闕して考ふべからず。宋史樂志の中に、曲名のみ存して、その詞の傳はらざるものあり、泛清波摘遍の如きは、その一なり。これを要するに、曲は詞の大曲より一變して出で、更に若干の新詩形を創定したるに因つて、その體制は、じめて完成したるものなり。

凡そ樂府は、皆音律と緊密なる關係を有するものにして、曲に於ては、拘束殊に嚴なり。抑も、支那の音律は、六陽を律となし、六陰を呂となし、以て十二月に配し、十二律呂、各五音ありて、演じて宮となり、調となり、宮調各十二あり。然れども、詞に於ては、唯だ七宮十二調を行ひ、曲に於ては、その初には六宮十一調、後には九宮三調を行ひしのみにして、その餘は、絶えて預らず。而して、曲に於ては、如上各宮調の下に隸屬する若干の曲調あり。その北曲に在りて普通に用ゆるものは、黃鍾宮三十三章、正宮五十四章、仙呂宮六十一章、中呂宮七十三章、南呂宮三十九章、雙調一百三十三章、商調五十章、越調三十八章、大石調三十五章等にして、その名目は、詳に輟耕錄元曲選等に載せ、皆、その内容の事象如何によりて、適否あること勿論なり。故に燕南芝菴の論曲に曰く、仙呂宮を唱ふるは、清新綿邈に宜しく、南呂宮は感歎傷悲に宜しく、中呂宮は高下閃賺に宜しく、黃鍾宮は

富貴纏綿に宜しく、正宮は惆悵雄壯に宜しく、道宮は飄逸清幽に宜しく、大石調は風流蘊藉に宜しく、小石調は旖旎嫵媚に宜しく、高平調は條物泥濘に宜しく、般涉調は拾掇坑塹に宜しく、歇指調は急併虛歇に宜しく、商角調は悲傷婉轉に宜しく、雙調は健捷激鼻に宜しく、商調は悽愴怨慕に宜しく、角調は嗚咽悠揚に宜しく、宮調は典雅沈重に宜しく、越調は陶寫冷笑に宜しく、とかくの如き宮調の特質を了解して、巧に之を使用して謬らざるは、一度曲家の技倆に屬す。なほ、曲の韻法は、詩詞と異にして、詩經の詩に見ると同じく、入聲は皆讀んで他の三聲に入れ、平仄を通じて、十九部に分ち、その處に因つて、平韻を押し、又之に通ずる仄韻を押しして相叶ふ。故に、換言すれば、平仄兩韻相通じて、各その處に従ふものなり。元の周德清の中原音韻は、全く北曲の爲に作りし唯一の韻書にして、古今の典據なり。

雜劇は、即ち普通の北曲にして、その體裁もとより一定し、必ず一本四折より成る。その理由は、かつて前に述べたるが如し。この外、楔子、或は有り、或は無し。又大抵、通篇の首に在れども、時に折の間に在ることあり。各折長短、一ならざるも、白曲を合せて、一折三千言、内外を普通とし、一折を通じて、一の宮調に依り、従つて、一韻到底、且つ第一折の破題は、仙呂點絳脣の調を以て起ること、最も多きに似たり。次に、雜劇を鋪張して作りし

北曲の傳奇は、西廂記を第一とし、全部十六折、即ち四雜劇を連ねて一となせしものにして、各折に就いていへば、依然雜劇と異なることなしと雖も、なほ聊か差異なき能はず。

北曲の特質として、唱者唯だ一人、例せば、漢宮秋の劇に於て、曲を唱ふるものは、各折を通じて、常に元帝たるが如き、即ち是れなり。かくの如くして、戲場の裝置、甚だ簡單にして、興味少く、唱者又勞するを免れず。且つ互唱、合唱等は、こゝに其跡を著くるを得ず。前記の漢宮秋に於ても、第三折の末、王昭君が胡地向ひ黒江に投ずるの一段の如き、若し其口を借りて、曲を唱ふるを得ば、更に一段の妙を添ふるや必せり。されば、雜劇は、その結構、單醇簡古に過ぎ、改良を施すべき餘地あること、勿論にして、これ王實甫が新に創意して、十六折の西廂記を出せし所以なり。西廂記に於ては、局面の結構、布置、普通の雜劇と稍や異にして、出場の人多きのみならず、曲を唱ふるもの、復た一人に非ず、換言すれば、全く如上の要求を満たさむが爲にして、又、實に南曲の爲に其備を作りしものあり。

南曲に於ては、折の數を問はず、且つ各折中、たゞ唱者一人に非ざるのみならず、互唱あり、合唱あり、これに従つて、折中時に宮調を變じ、又従つて韻を換ふ。而して、南曲の曲

調は、新に制定せし特異の者なきに非ざるも、詞調を其儘に用ゆること多く、押韻の法、又詞と同じ。蓋し、北曲の曲調は、詞と全然異にして、之に關する特殊の素養準備なきものば、到底作るを得ざれば、時勢が劇に熱中したる結果として、難を去つて易に就き、その法則を寬にし、一たび詞と離れしもの、又驟つて、詞と合したるなり。かくの如くして、南曲は、劇として、はるかに、北曲より興趣多く、且つ之を作ることも、又比較的容易なるを以て、明代に至りては、作家、皆南曲に向ひ、北曲は遂に廢滅して、復た指を染むるものなく、亦た是れ、自然の趨勢に外ならず。こゝに於て、臧晋叔が「ひとり怪む、今の曲を爲るもの、南と北と、聲調異なり」と雖も、しかも過宮下韻は一なり、高則誠の琵琶、主として、宮を尋ね、詞を數へざるの説を爲して、その短を掩覆せしより、今や遂に口を藉りて、調は北に嚴にして南に疎なりといふ、豈に謬らずや」といひしは、いたづらに古を株守して、その推移の理由と短長の區別とを審かにせざりしものに外ならず。試に、上に述ぶるところを總括して、北曲南曲の差異を言へば、略は次の如くならむか。

(一)北曲は唱者一人、南曲は數人、故に互唱合唱等は、ひとり南曲に之あるのみ。

(二)北曲は、特異の曲調を用ゆれども、南曲は多く詞調を混用す。故に、詩形上よりいへば、北曲は詞を全然破壊したるものなれども、南曲は然らず。但し、音律上よりいへ

ば、北曲は整美なれども、南曲は時に然らざるものあるべし。

(三)北曲には特殊の韻あれども、南曲は一に詞韻を用ふ。

以上は、主として、劇文の上に就いて考察せしものなれども、又他の方面より、南北兩曲の別を論せしもの、古今その人に乏しからず。試に、その二三を擧ぐれば、王世貞曰く、曲は詞の變。金元中國に入りてより、用ふるところの胡樂、嘈雜、凄緊、緩急の間、詞を按ずる能はず、乃ち更に新聲を爲つて媚ぶ。但し大江以北、漸く胡語に染み、時々採入し、沈約の四韻、遂に其一を闕く。東南の士、未だ盡く會せず。顧曲の周郎、逢掖の間、又稀に之を辨擿す。王應稍や復た新體を變じ、號して南曲となす。高則誠、遂に前後を掩ふ。大抵、北は勁切、雄麗を主とし、南は清峭、柔遠を高しとす。才情に本づくとも、雖も、俚俗と諧はむことを務む。之を譬ふれば、同一師承して、漸く分教するもの、俱に國臣にして、文武科を異にするものなりと。これ南北兩方、聲音の異に就いて立論せしなり。何元朗曰く、北人の曲は、九宮を以て之を統べ、九宮の外、別に宮、高平、盤涉の三調を道くあり。南人の歌は、亦た南九宮あり。然れども、南歌或は多く、絲竹と協はず、豈に謂ゆる、士氣偏、鐘律平和を得ざるものか。と。これ音律の異を云ふなり。之に次いで、李笠翁は曰く、北曲には北曲の字あり、南音には自ら呼んで我となし、人を呼んで爾となす。北音には人を呼んで爾となし、自

ら呼んで俺となし、咱となすの類の如き、是れなり。北字は粗豪に近きを以て、剛勁の口に入り易く、南音は、悉く嬌媚多く、窈窕の人を施すに便なりと。これ用字の差を言ふなり。これを前に述べたる鄙言と併觀すれば、略ば其全を盡くすに足らむか。降つて、明清の傳奇は、大抵、南北兩曲を併用し、又作者の意に従つて、後に謂ふが如き割合を爲して、毫も顧みず。こゝに於て、曲は、愈よ拘束少く、且つ自由なるものとなりし觀あり。次に、曲を一種の詩形として見る時、他の詩詞と異なりたる二三の特質あり。今、その主要なるものを擧ぐれば、その一を襯字となし、その二を合調となし、その三を句中の韻となす。

襯字は、詩形として定まれる字數外に、字句を挿入することにして、亦た音律の關係に本づく。襯字は、北曲にも之あり、南曲にも之あるも、たゞ南曲は北曲の多きに如かざるのみ。おもふに、北曲は襯字多しと雖も、しかも自ら一定の法ありて、任意に増減するを得ず、曲律に神明なるもの、自ら能く之に辨せむのみ。もし任意に字句を増減すべくば、手に隨つて塗抹し、別に新名を立つるも、不可なるものなく、何ぞ必ずしも一定せる曲の牌名に拘々たらむや。惟だ任意に増減すべからざるが故に、曲を作るもの、襯字に注意すべきは、もとより論なく、これを讀むもの、又深く意を此に注がざるべからず。

要するに、襯字は、曲の關鍵にして、その特質如何は、同調の曲を類集し、精細に比較したる後に於て、はじめて神解すべきのみ。今、一例を擧ぐれば、

〔賞花時〕天主京師祿命終、子母孤孀途路窮。旅襯在梵王宮、盼不到博陵舊冢。血淚灑杜鵑紅。

可正是 人值殘春蒲郡東、門掩重關蕭寺中。花落水流紅、閒愁萬種。無語怨東風。

〔前腔〕鍼綫無心不待拈、脂粉香消懶添。春恨壓眉尖。靈犀一點。醫可病懨懨。

〔前腔〕相見時、紅雨紛紛點綠苔。別離後、黃葉蕭蕭凝暮靄。今日見梅開、忽驚半載。特地寄書來。(西廂記)

その右傍に細書せしは、即ち襯字にして、湯臨川李笠翁が諸作の原刻本は、大抵かくの如し。

合調は、二個以上の調を割裂湊合して、新一調を成すの謂にして、宋人の詞に於ける、江月晃重山、暗香疏影等の如き、又北曲に於ける農樂歌兼破雁兒、落沙子、兒擬破清波引の如き、即ち是れなり。然れども、これ等は、すでに一新調となりしものなれども、曲に於ては、作者隨時に之をなし、甚しきは、十數の詞調を割合して、以て一曲となすに至り、高湯阮洪の諸人、皆之あり。而して、洪、昉、思、最も甚しとなす、長生殿傳奇中の十樣錦の如

き、即ち是れなり。蓋し自ら新調を創して、嘉名を立つるは、詞曲に深きものに非ざれば爲すこと能はず。これ即ち、その技倆を示す所以に外ならず。李笠翁の如き、新を愛する餘、亦た喜んで之を爲すと雖も、かくの如く大膽ならず。大抵、詞調の工を取り、その首尾を併せて之を成す。例せば、

〔太師圍醉〕太師引竹籬安。祇是由風靜葉蕭蕭。經霜未零。雖則是梅花冷淡。也守松拍寒盟。
〔醉太平〕伶仃芝蘭玉樹。兩無憑。依舊是庭階凄冷。一任那紅鸞近。絲羅有情。怎奈我這枯株無力引嬌藤。（儷香伴）

句中韻は、句の中間に押韻の字を填せしものにして、謂ゆる宮調は、即ち此邊に在るものと思はる。例せば、

〔點絳脣遊藝〕中原脚根無綫。如蓬轉望眼連天。日近長安遠。鏡字句中韻。
〔前腔〕相國行祠。寄居蕭寺。遭橫事。幼女孤兒。將欲从軍死。寺字句中韻。
〔前腔〕竝立開階。夜深香燭。橫金界。蕭灑書齋。悶殺讀書客。馬字句中韻。

その他、なほ曲の形式に就いて論すべきものあれども、専門的に過ぐるを以て、しばらく此に擧げず。讀者幸に如上の論旨を解し、西廂琵琶等の諸曲に就いて、自分之を検すれば、略ぼ、その特質の一斑を盡すに足らむ。

元の戯曲として、著名なるものを擧ぐれば、北曲には雜劇の代表者たる元曲百種及び西廂記あり、南曲には琵琶記を主として、荆釵記、幽閨記等あり、以下數章、これに就いて論ずるところあるべし。

(七) 元曲百種

元の雜劇、甚だ多く、古今群英樂府、編するところ五百五十六本、元五百三十五本、無名氏一百七本、娼夫十一本と稱せらる、その作者名目、ともに考ふべく、これを選録せしものに、元人百種曲選、元人雜劇選、陽春奏古名家雜劇、童雲野刻雜劇、新刻古名家雜劇等あり、皆、明清間好事家の校刻に係る。この中、元人百種曲選は、一に元人百種、又元曲選といひ、最も廣く世に知られしものにして、明の萬曆中、臧晋叔の選に係り、我が邦、亦た稀に之を傳ふ。

何故に、雜劇の製作は、元に盛なりしか。疑もなく、北方思潮繫縛の解除は、その遠因なれども、猶ほ他に、一層直接なる人爲の機械的刺衝あるが如し。臧晋叔曰く、或は謂ふ、元の士を取るや、填詞の科ある、今の括帖の如し。然れども、給を風簷寸晷の下に取る、故に一時の名士、馬致遠、喬孟符の輩と雖も、第四折に至りては、往々強弩の末なりと。沈德符曰く、元人未だ南宋滅びざるの以前、雜劇を以て、士を試むと。吳梅村、亦た此説を信せり。

然れども、梁廷枏は、疑を存し、この事、元史選舉志に見えず、又他に確證なし、必ずしも、憑信を値せずといへり。若し、予が鄙見を著くるを許さば、元人の之を好むこと、さながら食色に於けるが如く、後人をして、此説ありしに至らしめしものと爲し、以て其盛を證するは、もとより不可と爲さざれども、これ以上に推及するは、談もとより容易ならずといはむのみ。説者又云ふ、蓋し當時僧尼の考試さへ執行せし程なれば、或は別に一門を設けて、梨園の供奉に備へしなるべく、なほ宋の徽宗の畫を好むや、唐詩の一句を題として、その渲染を恣にせしめ、その畫外の趣を得たるもの、高第に登りしと相似たるものありたらむかと。然れども、これ亦た雜劇の成立及び弘布を豫想して、論を爲せしものにして、ある時期を経過せし後に於ては、蓋し相當ならむと雖も、當初に溯りて立論するを得ず。おもふに、元人は、その初、朔漠荒寒の區に在りて、穹廬の活を爲せしものにして、その新に中國に主たるや、昔日勤苦勞役の反動として、自然の勢、豪華華美を好みしこと、史上頗る明徴あり。されば、耳目の娛樂を主とし、その必要上、唱曲作劇を促せしならむ。加ふるに、元の一代を通じて、歴世の天子は、もと異人種にして、風俗慣習を異にするが故に、政略以外に於ては、毫も文教學藝を重んぜず、故を以て、一代の才人文士、衣食に窮するの餘、争つて、作劇を事とし、關漢卿の如きは、ひとり之を作りしのみならず、又場に上つて自ら之を演せしといへり。されば、一言以て之を蔽へば、雜劇は、支那

に於ける最古の文士劇にして、偶ま當時上流社會の嗜好に適せしを以て、一時に盛行せしものに外ならず。まことに、異人種侵入の勢力は、舊來の慣習を破壊し、期せずして、人性自然の美的情操を煥發したる結果、實際上の必要と相待つて、こゝに至りしとなすこと、最も妥當の見ならむと思はる。

雜劇の内容は、これを一概して、古代史的事實の斷片、若しくは逸話瑣聞の類にして、多少の技工を着け、潤色を加へしものなり。馬致遠の漢宮秋、戚夫人、王實甫の陸績懷橘、于公高門、關漢卿の狄梁公、王皇后救周勃、綠珠墜樓、侯正卿の燕子樓等、唯だ名目を一瞥して、容易に、その内容を推知すべきなり。但し、雜劇の重んずるところは、知音善歌にして、作者は専ら曲に苦心し、科白は、必ずしも問ふところに非ず。今、元人の所作を類集比較するに、題目同じく、甚しきは科白に至るまで、全然同じきものあり。因つて、上に述べしが如く、之を以て士を試むるの説を生せしならむと雖も、更に熟慮すれば、當時の劇部に於ては、往々にして、脚色を案出するもの、別に存し、その曲の製作を知名の文士に依頼するが如き場合なしとも限らず。いづれにするも、その間、臆説の著け難きに非ず、しかも、曲の愈よ重んずべく、且つ重んぜられたるを推究し得べし。然れども、曲は、亦

た特殊の天才を要するものにして、作詩填詞の餘技を以て之を爲すも、遂に其勝を擅にするを得ず。元遺山の如き、趙孟頫の如き、薩都刺の如き、一代の名家を以て、亦た指を此に染めしと雖も、その作の今に傳へざるが如き、以て觀るべきなり。但し、元の雜劇作者にして、一もその經歷を詳にせざるが如き、聊か怪訝に堪へざれども、支那人が固有の思想より、この輩を輕視し、殆んど之を文人視せざること、その最大原因たるに想ひ到れば、復た辨するなくして可ならむのみ。

雜劇の重んずるところ、すでに曲に在り。故を以て、その詞章に至りては、芳芬悱惻、兼ね到り、一段の編織、彩艶爛斑として、人目を眩せしむるを疑ふものあり。元人の絶技、正に此に極まる。故に、李笠翁は曰く、歷朝文字の盛なる、その名、各歸するところなり。漢の文、唐の詩、宋の文、元の曲、これ世人口頭の語なり。漢書史記、千古磨せず、唐は詩人濟濟、宋は文士踰踰たるあり、宜なり、その文壇に興足して、三代後の三代たるや。元の天下を有するや、ひとり政刑禮樂一も宗とすべきなきのみならず、即ち語言文字の末、圖書翰墨の微も、亦た概言多し。詞曲を崇尚し、琵琶西廂及び元人百種の諸書を得て、後代に傳ふるに非ざらしめば、當日の元も、亦た五代金遼と與に同じく、其れ泯滅せむ、焉ぞ能く三朝の驥尾に附して、學士文人の齒頰に掛らむや。これに由つて、これを觀れば、填詞は末

技に非ず、乃ち史傳詩文と源を同じうして、派を異にすべきものなりと。

涵虛子詞品に、元の雜劇家の詞を評せし語あり。曰く、馬東籬は朝陽鳳鳴の如く、張小山は瑤天笙鶴の如く、白仁甫は鵬の九霄を搏つが如く、李壽卿は洞天春曉の如く、喬夢符は神驚波を鼓するが如く、費唐臣は三峽の波濤の如く、宮大用は西風鷓鴣の如く、王實甫は花間の美人の如く、張鳴善は彩鳳羽を刷するが如く、關漢卿は瓊筵醉客の如く、鄭德輝は九天の珠玉の如く、白無咎は太華孤峰の如く、以上十二人を首等となす。その他、併せて九十八人の多きに及び、なほ其外に百五人を擧げ、並に傑作と稱するも、未だ優劣を以て論すべからずといへり。元の雜劇に於ける作者、何ぞ多きの甚しきや。次に元曲百種中に載する著名の作家とその作品とを擧げて、豹の一斑を窺ふに便せむ。

馬致遠には、漢宮秋、薦福碑、岳陽樓、陳搏高臥、黃梁夢、青衫淚、任風子の六種あり。その中、漢宮秋は、王昭君入胡の事を叙し、その末、身を黑江に投じて死するに終る。哀怨悽惻、兼ね至り、その曲、亦た典雅にして、雋妙、他の諸劇、亦た之と相若く。まことに、元代有数の作家たるに愧ぢず。

喬孟符、或は夢符に作る、名は吉。金錢記、揚州夢、兩世姻緣あり。金錢記は、賀知章、李太白の友たる韓飛卿の事を叙し、卓犖不羈の才子を描出し、結構布置、ともに妙にして、作者

が一番の狡猾手段、讀者を瞞過し去つて、覺えず奇を叫ばしむる處あり。揚州夢は、構思簡にして用筆雅、杜牧と張好好の情事を把つて、詩趣饒多に叙過せしもの。兩世姻縁は、妓女玉簫の情郎を戀うて相思の病に其命を終りたる後、愛執の一念、荆襄節度使張延賞の義女に憑りて、未了の因縁を了するを叙し、前半は、香消玉碎の光景、悲むべく、後半は、冥界陽世の關聯、異とすべし。輟耕錄に云ふ、喬孟符、博學多能、樂府を以て稱せらる。かつて云ふ、樂府を作るにも、亦た法あり、曰く、鳳頭猪肚豹尾の六字、是れなり。大概起は美麗を要し、中は浩蕩を要し、結は響亮を要す。尤も貴ぶは、首尾貫穿、意思清新なるに在り。苟くも、能く是の如くなれば、これ以て樂府といふべし、と。こゝに謂ゆる樂府は、疑もなく、雜劇を指すものにして、如上の數語は、自家の閱歷より工夫したる戲曲論の大綱として見るべく、虬龍の鱗甲、殊に寶とすべし。

揚顯之には、瀟湘雨、酷寒亭あり。瀟湘夢は、後半、殊に觀るべく、有情の人をして覺えず一幅の痛涙を漲がしむ、酷寒亭は、壯士恩に報ゆるの快談を綴りしものにして、甚だ妙ならざるも、亦た鐵版を拍いて、一誦するに足る。

關漢卿には、玉鏡臺、謝天香、救風塵、胡蝶夢、魯齋郎、金錢記、寶娥冤、望江亭あり。その中、寶娥冤は、悲壯、胡蝶夢は、悲酸、望江亭は、滑稽、その他は、大抵、普通の喜劇に屬す。望江亭は、譚

記兒といへる美人を主人公とし、聰明の女子、痴漢を弄する奇話を叙し、美人薄倖ならず、痴漢が自繩自縛する光景、讀者をして、覺えず絶倒せしむ。

その他、白仁甫、石君寶、武漢臣、高文秀、宮大用、鄭德輝の如き、皆一代の名家たるべく、無名氏の作、亦た觀るべきもの多し。就中、梧桐葉の一劇情致纏綿、筆情縹緲、通篇玲瓏、元人の陳套に落ちず、復た贅牙の病なく、西廂に駕して上ること、すでに幾等、その他は、復た問ふを須むざるなり。

(八) 西廂記

西廂記は、王實甫の作と稱す。實甫、その人、固より考ふべからず、且つ異説亦た少からず。明の隆萬以前は、専ら關漢卿となし、或はその孰れか後先なるを知らずと雖も、二人の手によりて合撰せらるるといふものあり、これに關する議論は、頗る多端なるを以て、こゝに略す。然れども、之を王實甫となすは、涵虛子の太和正音譜に本づくものにして、たとひ、的確の證なきも、最も普通の説なるを以て、姑らく之に従ふに如かず。

西廂記は、唐の元微之の手に成りし會真記を潤色して、四套十六折となせしものなり。然れども、王實甫の前、すでに多少の先驅者ありしを忘るべからず。宋には、趙德鄰の商調蝶戀花の詞あり、金には、董解元の絃索西廂あり。趙德鄰の作は、その雜著侯鯖錄の

中に見え、會真記の原文を稍や平易に改作し、且つ處々に蝶戀花の詞を挿入せしものにして、さながら鳴物入の講談を聴くが如く、その趣向、極めて嶄新、詞も亦た元明以後の腔調に入らず、尤も愛誦すべし。而して、其序を讀めば、この體、明かに德鄰の創意に成りしを知るべく、これ即ち鼓子調の濫觴に外ならず。董解元は、金の章宗の時の人にして、涵虛子詞品に、其名を載するを見れば、他に尙ほ其作ありしや必せり。而して、絃索西廂は、全部を通じて、一曲なく、全く當時の俚語を以て綴りしものにして、もとより劇曲として見るべきものに非ず。王實甫は、二人の後に起り、鐵を點じて金となすの活手段を以て、黃絹幼婦の新曲を作り、筆に入神の妙あり、後人十襲して措かず、張生の風流、鶯鶯の嬌名、こゝに至りて千古に重し。蓋し現存せるものに就いて立論すれば、傳奇の體は、全く實甫に始まりしものにして、雜劇を擴張し、又南曲の爲に其備を作りしものにして、元代一般輕文學の上よりいふも、實甫一人の上よりいふも、その進境として觀るべく、特に精細なる考察を値するものといふべし。

今日坊間に流布する西廂記は、金聖嘆の改訂を経たるものにして、その字句、舊と異なるもの少からず、別に李卓吾の評點せし一本あり、これ其舊なり。西廂を讀むもの、兩書を併觀せざるべからず。然れども、聖嘆の前、毛奇齡が、この書、人の爲に更竄せられし

をいへるより考ふれば、これも亦た純然たる其舊に非ざること、固より論なく、元明の間屢ば他人の筆を加へしを知るべし。而して、古今の名家にして、西廂を刻し、批し、釋したるもの、無慮數十人。この書、世に行はるゝこと、すでに久しく、且つ盛なるを知るべし。西廂脚色の大體は、會真記より出て、甚しき差異を認めずと雖も、結局の着想、ひとり異なり。西洛の人、張珙、字を君瑞といふもの、應試の爲に都に上らむとし、その途中、河中府の普救寺に遊び、一個の秀麗を見る。この佳人、崔相國の女にして、名を鶯鶯といひ、芳紀正に十九、すでに従兄鄭恒に許嫁せしもの、今や父の喪に丁り、母とともに故里博陵に安葬せむとし、兵寇に遇ひ、途阻りて進む能はざるに因り、此寺に假寓し、鄭恒を招致し、相扶けて必ず其郷に歸らむとするなり。張生一見、情に堪へず、乃ち策を出し、請うて寺中の一室を借り、便宜を窺うて、必ず相近づかむとす。鶯鶯の侍女を紅娘といひ、聰慧快活、張生之に頼つて意を通ぜむとし、しかも、却つて譏弄せられて止む。鶯鶯、夜ごとに花園に香を焼く。張生謀して、之を知り、因つて應酬の吟あり。但だ崔氏閨門治まり、加ふるに、鶯鶯すでに許嫁の夫あり、張生煩懊すと雖も、之を奈かむともするなし。時に一片の飛警は、ゆくりなくも、張生に好機を與へ、賊將孫飛虎といふもの、鶯鶯の美を聞き、兵を率ゐて之を掠めむとし、寺門を圍むことあり。崔家の夫人、大に之を患ひ、善く賊を

退くるものには、女を興へむことを約し、張生自ら進んで策ありと稱し、因つて飛虎に三日を約し、書を修して、援を其友蒲關の守將杜確に乞ひ、其兵を以て寺を衝り、因つて崔家の厄を除くを得たり。然れども、夫人の言は、一時の權謀にして、固より真に其意あるに非ず、二人をして、強ひて兄妹たらしめ、直に之を瞞過し去らむとす。張生悶甚しく、いつしか病を得て、命縷の如し、鶯鶯之を憐み、一夕の歡會を諾す。佳人才子、こゝに至りて、遺憾なきなり。夫人之を知つて、その女と侍女紅娘とを拷責すれども、終に及ばず。こゝに於て、夫人、張生を招き、三代白衣の婿を招かざるを告げ、早く朝に上り、官を得て還るべきを命ず。張生乃ち辭して出て、草橋店の一夜、旅魂凄然、忽ち驚夢を感じ、曲こゝに終る。

これを概言すれば、西廂の曲たるや、正に一部の情史、男女離合の情緒を描寫せし者なれども、脚色の單調にして、變化に乏しきは、姑らく言はず、遂に人情の幾微を闡き、運命の究極に接觸せず、之を戯曲としては、頗る幼稚なるの諷を免れず。たゞ稱すべきは、人物の割合に善く活動せしこと、是れのみ。鶯鶯は深閨の處女、才色雙絶、氣稟自ら高く、凜として秋霜の如きものあり。然れども、さすがに、一片の柔性あり、亦た善く情を解せり。これに對して、反映の妙を観るべきは、その侍女紅娘にして、その輕佻を脱せざると

ころ、その生の卑賤なるを知るべく、しかも、幾分の俠氣を帶び、男子を翻弄しつゝも、同情を寄するに吝ならざるが如き、最も作者の手腕を見るに足る。崔家の夫人は、純然たる高貴の未亡人、家門を誇り、名聲を重んじ、その經驗を恃み、却つて事を破るに至る。而して鶯鶯に比照すれば、母子性格の類似、終に争ふべからず。三個の女性は、かくの如く、殆んど遺憾なきまで、巧妙に描かれ、之に次いで、惠明の如き、固より、主要なる人物に非ざれども、俠僧の面目、さながら、活くるが如し。ひとり、張生に至りては、性格高からず、宛然たる一個の蕩子、殆んど取るに足らず、之を鶯鶯に配するは、駿馬癡漢を乗するが如く、大に不倫なるやの嫌あり、聊か惜むべしとす。

西廂は十六折、驚艶に始まりて、驚夢に終る。故に、後、更に四折を續撰せしものあり。鶯鶯許嫁の夫鄭恒を拉し來り、之をして、張生と相争はしめ、後に鄭亡びて、張存し、鶯鶯と偕老するに終らしむ。然れども、かくの如きは、常套の構想にして、却つて平凡化せしものに過ぎず。之に加ふるに、脚色拙陋、文辭亦た庸劣、人物性格の一致を缺けるもの、遂に狗尾續貂の諷を免れざるなり。

西廂の意匠結構は、必ずしも激賞を値せざれども、その文辭に至りては、正に天下の妙を極めしもの、李卓吾は、之を化工となし、極力讚辭を着けて曰く、意ふに、宇宙の内、本

と自ら此の如く喜ぶべきの人あり、化工の物に於ける如く、その工巧、自ら不可思議のみ、と之に次いで、金聖嘆は曰く、左傳の文、莊生その駘宕あり、孟子その奇峭あり、國策その匪綴あり、太史公その寵崑あり、夫れ莊生、孟子、國策、太史公、又何ぞ多く道ふに足らむ、吾ひとり思はざりき、西廂は傳奇、而して亦た其法を用ふ、と、又西廂を讀むものに教へて、必ず地を掃つて之を讀むべしといひ、必ず香を焚いて之を讀むべしといひ、必ず雪に對して之を讀むべしといひ、必ず花に對して之を讀むべしといひ、必ず一日一夜の力を盡し、一氣之を讀むべしといひ、必ず半月一月の力を展べて精切に之を讀むべしといひ、必ず美人と並坐して之を讀むべしといひ、必ず道人と對坐して之を讀むべしといへるが如き、その詞章の空靈神妙を影寫せしものに外ならず、あゝ人間豈に容易に花團錦簇、這般の大文章あるを得むや。

(九) 琵琶記

琵琶記は、高則誠の作、則誠の傳は、幸に考ふるを得べし、名は明、崇儒里に居る、性聰敏、少より博學を以て稱せらる。一日歎じて曰く、人一經に專ならずして、第を取る、博と雖も、奚ぞ爲さむ、と、乃ち自ら奮つて春秋を讀み、聖人の大義を識り、文を屬するや、筆を執つて立どころに就る。一時の名公卿、皆慕うて與に交る。乙酉、進士の第に登り、處州錄事

を授けられ、數ば權貴に忤ひ、病を謝して去り、福建行省都事に任ず、道慶元を經るや、方氏竊據、強ひて幕下に留め、力辭すれども、從はず、病に臥して卒す。著すところ、柔克齋集二十卷あり、弟誠、字は則明、亦た文あり、明の時、高氏の兩難と號す。則誠の集、今存否を知らず。瞿宗吉、かつて趙孟頫の韵に次せし、岳王墳の一律を激賞せり。曰く、莫向中原唱黍離、英雄生死繫安危、內庭不下頒師詔、絕漠全收大將旗、父子一門甘伏節、山河千里竟分支、孤臣尙有埋身地、二帝遊魂更可悲、と、筆意の至るところに隨ひ、絶えて次韵の痕跡を見ず、虬龍の片甲、また珍愛すべし。

琵琶記は、則誠の名を千古ならしむる傑作たること、固より論なし、但だ涵虛子の詞品、元の作家を評隲するや、一語も之に及ぶものあらず、或は其才當時未だ世に知られざりしが故ならむといふものあり、然れども、私見を以てすれば、則誠は元末の人にして、時、明初に及ぶ、而して、詞品の選、特に元代を限りしが故に非ざるか、たとひ、之をして當時に名なからしむるも、何ぞ關せむ、則誠たるもの、蓋し時様に趁くを欲せず、自ら一新機軸を出せしもの、愈よ多とすべきのみ。

琵琶記の作は、作者の友王四が舊妻を棄て、婚を權門に結びしを諷せむが爲に作りしものといふ、然れども、王世貞は、唐人の小説に本づくものとなせり、牛丞相僧孺の子

繁、蔡生と文字の友たり、蔡の才あるを以て女弟を嫁せしめむとす、蔡に妻趙氏あり、力辭する能はず、後、牛氏、趙とともに處り、能く卑順、自ら將る、蔡遂に歷仕して、節度副使に至る、これ琵琶記の由つて來るところ、不幸にして、原本傳はらざるのみ。

蔡生、名字は詳ならず、故に假りに之を漢末の蔡邕に托す、深意あるに非ず、邕、名節やや缺くと雖も、才學一時に重く、貧時蔬を賣り、且つ至孝の名あり、この處、兩者頗る相似たるが故ならむのみ、假設の蔡邕、學識ともに高く、その妻を趙五娘といふ、美にして慧、一家團樂の樂、想見するに堪へたり、邕、之に安んじ、絶えて富貴を欲せず、隣家の張太公、之に勸め、強ひて京に上り、試に應ぜしむ、邕、意を決して、家を辭し、科場の三試を經、第一の秀才、狀元郎の榮を荷ひ、すでに美官を授かる、然れども、未だ家を迎ふるに及ばず、故園の茅屋、爺嬢饑寒に泣き、幸に孝順の媳婦、趙五娘の爲に慰められ、纔に其日を送れり、すでにして、天子、邕の人物才學、ともに凡ならざるを愛し、牛丞相に命じ、其女を嫁せしむ、こゝに於て、邕、猛然として、家を思ひ、功名榮華、兩つながら之を去り、官を辭して歸臥せむとす、牛丞相、權勢あり、乃ち邕をして、去官辭婚、共に之を得ざらしむ、牛氏の女、賢なり、之を知つて、閔、禁せず、次いて、邕、陳情の表を上り、切に請ふところありしが、遂に許されず、この間、故山の地、餓、李路に滿ち、趙五娘、義倉に穀を請ひ、しかも、歸路之を奪はれ、將

に古井に投ぜむとせしが、良人の依囑を想起し、舅姑の依恃なきを悲み、僅に其意を翻し、張太公の食を給するに因り、三個幸に一縷の生命を繼ぎ得たり、幾もなくして、姑先づ死し、舅亦た病篤く、因つて五娘を改嫁せしめむとす、五娘強ひて辭す、しばらくして、舅終に死し、之を葬るの費なく、乃ち自ら烏雲を剪り、以て錢に代へむと欲せしも、時凶にして、人の之を買ふものなし、張太公、又來りて之を救ひ、墳塋わづかに築き成すを得たり、こゝに於て、五娘乃ち意を決し、別を張太公に告げ、行々琵琶を彈し、長安の古道に上つて、其夫を尋ねむとし、關山萬里、備さに苦楚を極む、すでにして、都に入り、牛氏の女の爲に救はれ、終に其夫と相見る、この間、變化曲折、頗る多し、邕、すでに新舊二妻あり、しかも、閨門能く治まる、乃ち牛丞相に請ひ、二妻を拉して、故里に歸喪し、張太公に見え、一門の孝義、はじめて全し、忽にして、天子の詔勅あり、邕は中郎將を授けられ、妻趙氏は陳留郡夫人に、牛氏は河南郡夫人に封ぜられ、父母皆贈位を辱うす、これを琵琶一篇の梗概となす。

琵琶は西廂と異にして、専ら趙五娘の節義を傳するを主とし、その妙、言ふべからざるも、なほ結構上、多少不自然の跡あるを憾まざるを得ず、加ふるに、蔡邕の意志薄弱にして、精神氣魄なき、さながら、西廂の張生と相似たるものあり、兩者の正色、全く同一の

模型に出でたるも、一奇なり、毛聲山の琵琶を評する、なほ金聖嘆の西廂に於けるが如く、これを激賞して、その口を極め、必ず西廂より重からしめむとす、曰く、王實甫の西廂は、是れ色を好んで淫せざるものか、高東嘉の琵琶は、其れ怨悱して亂れざるものか、西廂は風近くして、琵琶は雅に進む、琵琶の西廂に勝るや、二あり、一に曰く、情勝る、西廂の情は、佳人才子花前月下私期密約の情にして、琵琶の情は、孝子賢妻敦倫重誼纏綿悱惻の情なり、これ琵琶の情西廂に勝るところなり、西廂は妙文なり、琵琶も妙文なり、然れども、西廂の文中には、往々にして、方言上の語を雜用す、而して、琵琶に至りては、莫しこれ琵琶の文、西廂に勝る所以なり、と、然れども、この論は、全く迂腐なる儒教的見地より來り、眞正の文學的批判に非ざること、言を俟たず、但だ李笠翁の如き、頗る之に慊らざるが如く、因つて、その瑕疵を列舉し、且つ曰く、これ等の詞曲、幸にして元人より出づ、若し我輩より出でしめば、群口之を誦り、身を何の地に置くかを識らず、予敢て古を讎とするに非ず、すでに詞曲の爲に言を立つ、必ず人をして、法を取るを知らしむ、若し世俗の見に狂れ、事々元人に法るべしといへば、吾恐らくは、未だ其瑜を得ずして、先づ瑕あらむ、人或は之を非らば、元人を舉げて、口を藉らむ、焉ぞ知らむ、聖人千慮、必ず一失あり、聖人の事、猶ほ盡く、法るべからざるものあり、况んや其他をや、と、

こゝに公平なる見を以てすれば、琵琶はその意匠、西廂に比して、はるかに複雑多端、脚色に於ては、稍や勝れりといはむ、但し、その文は、清雅冷艶なるも、西廂の婉麗豐贍に及ばざること遠し、故に、湯若士は曰く、琵琶は、すべて性情上より工夫を著く、并に詞曲の巧情を以て長とせず、と、陳眉公又曰く、西廂は一幅着色の牡丹、琵琶は一幅水墨の梅花、西廂は一個艶粧の美人、琵琶は一個の白衣の大士、と、二書、各長短あり、しかも、相並んで千古たるを妨けず、

世に流布する琵琶記は、清の毛聲山が評語を加へしものにして、且つ字句を改竄せし跡あり、金聖嘆の西廂に於けるが如く甚しからざれども、遂に其舊に非ず、されば、眞正の古色古味を領せむと欲せば、必ず無評の原本に於てせざるべからず、

北曲の傳奇は、西廂以外、殆んど聞くところなきも、元の南曲として著名なるものは、琵琶記の外に、荆釵記あり、作者柯九思は、丹邱生と號し、もと畫家として知られ、且つ詩を善くし、ひとしく、元末の人なるも、これを高則誠に比して、やゝ後輩に屬するものか、劇は篇幅太だ長く、且つ科白多く、曲亦た拙劣にして、遂に相比するに足らず、傳ふるものは、云ふ、荆釵記中の玉蓮は、王梅谿の女、而して、孫汝權は、宋の進士、梅谿と同年生にして、敦く古誼を尙ぶ、史浩の和議を主とするや、梅谿その國を誤れる八罪を劾し、汝權實

に徳憑す。史氏恨を啣み、遂に門下の客をして、傳奇を作り、その事を謬つて之を贗さしむ。然れども、これ製作の時期に留意せざるものにして、又鄭齋雜記に引ける莊相伯の言を見れば、孫は武人にして、玉蓮はその室、姓は錢氏、茫々千古、この案、何の時か白せむ、まことに謂なきことに屬すといふべし。

(一〇) 水滸傳

西廂琵琶すでに元の劇曲を代表すとすれば、水滸、三國、元の小説を代表し得べし。この四書、當時すでに四大奇書の目あり、後に金瓶梅、西遊記の出づるに及び、水滸三國に配して、又支那小説の四大奇書といひ、乾隆中、之を合刻せしものあり、二書の價值、決して少々ならず。

水滸傳の作者に就いては、異説頗る多く、之を羅貫中となすものあり、之を施耐菴となすものあり、兩人の合作となすものあり。その第一、これを羅貫中となすものは、王圻の續文獻通考に本づく。曰く、水滸傳は、羅貫の著、字は本中、杭州の人、小説數十種を編撰す。而して、水滸傳は、好盜脫騙、機械甚だ詳、然れども、變詐百端、人の心術を壞る。説者、子孫三世皆啞なるを謂ふ、天道好還の報、かくの如し、と。これに由つて見れば、普通世に謂ふところの羅貫中は、實に羅貫の誤なり。その第二、これを施耐菴となすものは、胡應麟の

莊嶽委譚に、癩たまり、その第三は、金聖嘆等、清朝評家に出で、之を耐菴に歸するに就いては、異言なしと雖も、七十回以後を斷つて、後人の續撰となせり。菽園贅談に曰く、ただ小説家の言、筆に信まかせて揮洒し、失檢なくむばあらず。聖嘆從つて潤色し、之を耐菴の古本に托し、遂に洋洋たる大觀を覺ゆ。何物の羅貫中、強起干預、妄に續貂を行ひ、七十回以前、その竄亂を被るもの、亦た復た少からず、實に水滸の一大厄なり。毅然として忠義の名を以て群盜を褒するに至りては、更に耐菴の料るに及ばざりしところ。後人、貫中を譏らずして、耐菴を譏る、曷ぞ聖嘆批するころの本を取つて、之を觀ざる。これ事の小なる者なりと雖も、しかも、實に人心風俗の大に關係す。余、故に言に已む能はず、と。又曰く、水滸の主腦は、收結三十六人に在り、故に梁山泊惡夢に驚くを以て、憂然として止む。意は著書に在り、故に止むべくして止む。群盜に在らず、故に空に憑つて起るもの、亦た端なくして止む、謂ゆる不了を以て之を了するなり。これは著書の體例、人に示すに破綻を以てするに非ず。後の察せざるもの、紛紛蛇足、幾何か讀者をして齒冷かならざらしめむ、と。

予の私見を、以てすれば、本書は、その全部を舉げて、疑もなく、施耐菴の作なるべく、第二説、蓋し真なるべし。今、世に傳ふるもの、百二十回本と七十回本とあり。なほ他に百回

の古本あれども取らず。百二十回本は、李卓吾の忠義水滸傳にして、七十回本は金聖嘆の評するところなり。聖嘆の古を評する、往々にして、原文を改竄することあり、殊に本書に於ては、前に云ひしが如く、全く後半を削除し、その妄、殊に甚し。西廂水滸、ともに李卓吾の校刻に係るものを以て、比較上、正本に近きものとなすべし。

本書の内容は、北宋の末に於ける群盜の事蹟にして、その一半は、正史に見えたる實録より出で、宋史の徽宗本紀、蒙傳、張叔夜傳等に散見するものは、實に本書の骨子に外ならず。曰く、宋江起つて盜をなし、三十六人を以て河朔に横行し、轉じて十郡を掠め、官軍敢て其鋒を擧ぐるなし。知亳州侯蒙、上書していふ、江の才、必ず大に人に過ぎたるものあらむ、これを赦して、方臘を討ち、以て自ら贖はしむるに如かずと。帝、蒙に命じて、東平府に知らしめしが、未だ赴かずして卒す。又、張叔夜に命じて、海州に知らしむ。江、將に海州に至らむとす。叔夜、間者をして、向ふところを覘はしむ。江、徑に海濱に赴き、鉅船十餘を刼して、鹵獲を載す。叔夜、兵士を募つて、千人を得、伏を近城に設け、輕兵を出して海に距ぎ、之を誘つて戦ひ、先づ壯卒を海旁に匿し、兵の合するを伺ひ、火を擧げて、其舟を焚く。賊、之を聞いて、皆鬪志なく、伏兵之に乗じて、その副賊を擒にす。江、乃ち降る。となほ宋江、方臘の亂を爲せしことは、青溪寇軌等に見え、又宋江等、諸人の事蹟は、郎瑛

の七修類稿に具し、他に湖壩雜記には、六和塔下にも、魯智深の像ありしを云ひ、甕江胖語に載する宋江が題壁の詞は、潯陽樓に吟せし反詩と大に相似たるあり。然れども、これ等の記事遺聞は、皆簡單にして、未だ十分にその材料を供給するに足らず。而して、本書の構想に對して、直接の關係あるものを張叔夜の檄文及び宣和遺事の二となす。胡應麟が莊嶽委譚中の一節は、本書著作の動機を説明して、下の言を爲せり。曰く、余偶ま一小説の序を閲するに、施某、かつて、市肆に入り、故書を閲し、種々敵楮の中に於て、宋の張叔夜が兩賊を招撫する檄文一通を得たり、その中、一百八人の由つて起りし顛末を載す、因つて、之を潤色して、この編をなせりと。叔夜の檄文、多少の材料を供給せしは、蓋し實ならむ。然れども、宣和遺事に至りては、更に大なるものあり。そは兩書の内容を比較して、容易に推知すべく、斷じて復た疑ふべからず。宣和遺事には、宋江等、群盜の總員數を三十六となし、その間、事實の起伏、頗る複雑にして、波瀾に富めり。その結末に曰く、宋江、三十六將を統率し、往いて東嶽に朝し、金爐の心願を賽取す、朝廷奈何ともせず、せひなく榜を出して、宋江等を招諭す。こゝに、元帥、姓は張、名は叔夜といふものあり、これ世代將門の子、前すみ來りて、宋江を招誘し、かの三十六人と宋朝に歸順せしむ。各、武勇を受け、大天誥勅、諸路の巡檢使に分注して去らしむ。これに因つて、三路の寇、悉く平

定するを得たり。後に宋江を遣し、方臘を攻めて功あり、節度に封せらる。と。

施耐菴は、遺事中に載する他の事實をも援引して、巧に換骨脱胎をなせり。李獅々の事に關するものゝ如き、即ち是れなり。又他書をも合せて摺摭せし形跡あり、高俅の事に關するもの、即ち是なり。王阮亭の居易錄に曰く、稗官小説、盡く虛妄の説のみに非ず。施耐菴の水滸傳、その載するところ三十六人の姓名の如き、龔聖予の贊に見えたるのみに非ず、首篇高俅の出身を叙せしは、宋人の著、揮塵後錄に載するところと吻合すと。又張順が湧金門の死は、宋史に見えたる同名の人の事實と頗る相似たるものあるが如く、もし仔細に穿鑿すれば、この類、極めて多かるべし。なほ、梁山泊は、假設の地名に外ならざるも、梁山灤は、宋史の蒲宗孟傳に見え、梁山灤盜多く、宗孟これを痛治し、小偷と雖も、必ず其足を斷つ、盜衰止すと雖も、殺すところ甚だ多しとあり。宗孟は、神宗の時の人、且つ其事究に宋江と涉るなきも、作者、又意ありて、牽合せしに非ざるか。或は、梁山泊を以て、古しへの鉅野澤にして、一統志に載する南旺湖ならむといふものあれども、正否を知らず。

遺事載するところの群盜三十六人、水滸は之を衍して、その三倍、即ち百八人の多きに上れり。抑も百八の數たるや、儒佛の諸書に見え、最も因縁に富む。易に於ては、老陽の數三十六、一歳七十二候、之を合して百八たり。又瓦釜漫錄、谷響集等に、釋氏念珠の顆一百八零たるは、年に七十二候、十二月二十四氣あるに准ずといひ、洪邁の容齋續考には、鐘聲一百八撞、十二月二十四氣七十二候に應ずといひ、又三藏法數、天台四教儀集註には、人の一身に百八の煩惱ありといひ、論者、遂に斷じて曰く、施耐菴、この義に取りて、三阮兄弟を立て、立地大歳、短命二郎、活閻羅の綽號を付け、三人を一身と見立て、人生過隙、生涯快樂の事、幾もなきを歎じ、卷首の詩餘に於ても、略ほ其意を漏らせり。と。水滸の豪傑、實に一百八人なれども、その主とするところは、依然として、天罡三十六員に在り、他の地煞七十二員は、要するに、附隸にして、その描寫も、亦た頗る省略に従へる跡あり。相傳ふ、施耐菴、水滸傳を撰ぶとき、空に憑つて三十六人を壁に畫き、老少女女、その狀を一にせず、毎日之に對して、毫を吮ひ、務めて刻畫して致を盡さむことを求む故に能く一人は一人の精神あり、脈絡貫透、形神ともに化すと、その用意の頗る到れる、以て概見すべきなり。

水滸の一書、大抵殺人放火等、凶猛暴惡の事蹟を以て満たさると雖も、その間、亦た多少の風流情事あり、殊に映照の妙を極む。宋江の閻婆惜に於ける、西門慶の潘金蓮に於ける、楊雄石秀の潘巧雲に於けるか如き、即ち是れなり。全篇を通じて、結構の大、最も誇る

に足るべく、その失として、往々類似の意匠を反覆し、時に才思の窘、掩ふべからざるものあれども、三十六員を主とし、首尾貫徹、その人物を描破し、巧に之を躍動せしめし手腕に至りては、まことに、化工の神筆たるに庶幾し。之に加ふるに、その文辭は、雄渾にして、爽利、跌宕にして、踔厲、最も稱すべきなり。金聖嘆曰く、莊周、馬遷、杜甫、その妙、彼の如きは、復た具さに論せず。かの施耐菴の書の如き、しかも、亦た必ず心盡き氣絶えて、面、猶ほ死人の如く、しかる後に、その才、前後繚繞して、始めて書を成すを得るに至る。夫れ、而して後、古人の書を作る、真に苟且に非ざる者あるを知らむと、聖嘆の言、常に此の如しと雖も、之を此に見る、必ずしも、所好に阿るものに非ず。

水滸傳に續ぐもの、水滸後傳あり、一は雁宕山樵に出で、一は天華翁に出づ。之を評するものは曰く、一は、李俊、國を海島に立て、花榮、徐寧の子、共に成業を佐け、高宗の却上金鰲、背上行の織に應ず。なほ忠君愛國の旨を失はず。一は、宋江、楊公に轉世し、盧俊義、王魔に轉世し、一片邪淫の談、文詞乖謬、尙ほ狗尾にも若かざるなりと。又、清人の作に、寇蕩志一名を結水滸傳といふものあり。一百八人、泊中に聚まりしより筆を起し、力を寇盜剿平の事蹟に用ひ、稍や觀るべきものあり。

(一) 三國志

三國志演義は、羅貫の作に係ると稱す。胡應麟の莊嶽委譚に曰く、施某、すでに水滸傳を作る、その門人羅某、これに倣うて三國志演義を作る、と、これに由つて之を觀れば、羅貫は實に施耐菴の門人にして、その師が宣和遺事を粉本として水滸傳を結撰せしに對し、陳壽の三國志を取つて、敷張演義し、やがて、この書を作れるなり。王圻の續文獻通考に依れば、貫字は本中、杭州の人、小説數十種を編撰す、と、隋唐志傳の如き、亦た稍や觀るに足ると云ふ。水滸傳、亦た動もすれば、其作と稱せられると雖も、近時専ら之を施耐菴に歸し、前に引くところの胡氏の説を以て正しと爲す。貫の行事閱歷に至りては、今之を詳にし難し。

この書、羅貫の作に係ると稱すること、前述の如し、と雖も、古來疑を挾むもの、固より少しとせず。但だ他に確證の出でざる限り、之を以て、姑らく羅貫に歸するも、不可なからむのみ。或は云ふ、今傳ふるところの三國志は、其舊に非ず。真本復た觀るべからず。と、この書現存するもの、明の萬曆版より以下、數種、各多少の異同あり、その最も汎く世に流傳するものは、毛聲山別集中の三國志にして、聲山の評語を挿入し、首に金聖嘆の序及び讀法を冕す。聲山は、他に琵琶記の評あり、聖嘆は、水滸、西廂、謂ゆる六才子書の評を以て知らるゝものなり。然れども、聲山の評、果して眞なりや否やは、未だ容易に首肯す

べからず。何となれば、之を琵琶記の評と比較して、その見地文章、大に徑庭あること、何人と雖も、直に之を認むべければなり。こゝに於て、予が私考を述べれば、坊間射利の徒、若しくは無名の文士、前人の評語を摺撫し、之を修整して首尾を一貫せしめ、假りに名を聲山に托し、且つ聖嘆の序文を僞撰せしものなるべく、その本文、往々にして舊に同じからざるは、亦た此際改竄を施せしが故ならむ。されば、之を以て全く真本に非ずといふは、稍や激に過ぐるの嫌ありと謂はざるべからず。

この書は、元時に在りて小説の水滸傳奇の西廂琵琶と相並んで、四大奇書と稱せられ、その後、水滸金瓶西遊とともに四大小説の名を博し、支那小説を説くもの、萬口齊しく稱せざるなし。今試に毛聲山本の首、金聖嘆の讀法より數條を抄出せむか。曰く、三國叙事の妙、真に史記と彷彿たり、而して、その叙事の難き、倍も史記より難きものあり。史記は各國分つて書し、各人分つて載す、こゝに於て、本紀世家列傳の別あり。今三國は然らず。殆んど本紀世家列傳を合して、一篇を總成す。分てば、文短くして工なり、易く、合せば、文長くして好なり、難きなり、と。又曰く、三國を讀むは、列國志を讀むに勝れり。夫れ左傳國語は、誠に文章の最も佳なるもの、然れども、左氏經に依つて傳を立て、經、すでに段を追うて、各自文を成し、傳、亦た段を逐うて、各自文を成す、相聯屬せざるなり。國語は、經

を離れて、自ら一書を爲す、以て聯屬すべし。究竟、周語魯語晉語鄭語齊語楚語吳語越語、八國分つて八篇となす、また相聯屬せざるなり。後人、左傳國語を合して、列國志を爲す、國事多類に因つて、その段落の處、到底貫串する能はず。今三國演義は、首より尾に至るまで、之を讀むに一處として斷つべきなく、その書、又列國志の上に在り、と。又曰く、三國を讀むは、西遊記を得るに勝る、西遊は、妖魔の事を捏造し、誕にして經ならず、三國、帝王の事を實叙し、真にして考ふべきに若かざるなり。且つ西遊の好處、三國すべては皆之あり、鹽泉黑泉の類の如き、何ぞ子母河落胎泉の奇に異ならむ。桑思大王木鹿大王の類、何ぞ牛魔鹿力金角銀角の號に異ならむ。伏波顯聖山神指迷の類、何ぞ南海觀音の救に異ならむ。只だ一卷の漢相南征記、便ち一部の西遊記に抵り得たり。前にして鎮國寺、後にして玉泉山、或は戒刀を目視して、火厄を脱離せしめ、或は空を望んで一語棒喝に同じきあり。豈に必ずしも、露臺方寸斜月三星の文を誦して、乃ち禪心を悟らむや、と。又曰く、三國を讀むは、水滸傳を讀むに勝れり。水滸傳文字の真、較や西遊の幻に勝ると雖も、しかも無中有を生じ、意に任かして起滅、その匠心難からず、終に三國一定の事を叙し、改易を容るなく、しかも直に能く匠心の難しと爲すに若かざるなり。且つ三國人才の盛、寫し來つて各出色、又高く、吳用公孫勝等に出づる萬々なるものあり、吾謂へらく才子

書の目宜しく、三國演義を以て第一と爲すべしと、

如上の評語、三國志を稱艶するに於て、以て加ふる蔑しと雖も、その偏見亦た甚しといふべし。その之を史記に比するの不倫は、しばらく言はず、列國志に較べて稍や勝れりといふは猶ほ可なりとするも、西遊記を呼んで、不經となすは、小説の何物たるかを解せざるものにして、諸葛南征の一事、すでに西遊記の全部に中れりとなすは、紗燈と烏鐘とを同一視するの愚のみ。水滸は、構想の大半、作者より出づ。三國志の専ら演義を事とすると同じからず。比擬すてに當を失し、固より、齒牙に掛くるに足らず。聖嘆、こゝには三國を以て第一となし、而して、その自ら水滸を評するや、乃ち三國を斥く、兩舌かくの如きは、媒婆と雖も、なほ愧づべし。聖嘆の言、時に矛盾あるも、かくの如きの甚しきを爲さざるや必せり。こゝに於て、之を坊賈の偽撰となすことの、愈よ徒爾ならざるを知了すべし。

三國を推賞するもの、大抵上に述べたる如く、而して、又一方に於ては、その價值を否定するに怯ならざるものあり。胡應麟曰く、甚だ淺鄙にして笑ふべしと。謝肇淛又曰く、惟だ三國演義は、錢塘記、宣和遺事、揚六郎等の書と、俚にして味なし、何となれば、事太だ實なれば、腐に近く、以て里巷の小兒を悦ばすべく、しかも士君子の爲に道ふに足らざるなりと。然れとも、かくの如きは、演義即ち歴史小説の何物たるを知らざるより出て、し一己の私言にして、たとひ斷に果なりと雖も、亦た頗る酷なりといはざるべからず。今、如上の兩説を折し、試にわが批判を着けむに、大抵三國の事實、固より奇加ふるに、作者亦た多少の巧志あり、故を以て、布置排列、自然に妙、波瀾あり、變化ありといはむ。その大綱は、正史に憑據するも、假構の事實、亦た決して少からず。殊に作者は、諸葛亮を神せむとするの極、往々にして怪誕の事を加へて、之を潤色し、且つその爲すところ、權數に過ぎ、さながら、術士の如く、策士の如く、忠良の循臣たる本來の面目に遠く、人をして、大に敬慕の念を減ぜしむ。その他、この類少しとせず。要するに、作者は、篇中人物の性癖を想像し、極力この點を描破し、各自の性格を明白にせむとするの餘、却つて塗澤に過ぎ、動もすれば、醜に近からむとす、これ其過なり。その文辭、亦た稍や渾成圓熟の妙を少くと雖も、零碎して取るべきもの、固より尠しとせず。たとへば揚雄の文の如く、その規度の大を害せず。之を要するに、三國演義の一書、支那の歴史小説として、未だ甚だ至れるものに非ずと雖も、又決して第二流以下に落ちざるものといふべし。若し夫れ、本書の後を承くる續三國志、後三國志等に至りては、構想の艱澁、事象の蕪雜、全く論ずるに足らず。

(一一) 元代の諸家

元遣山は、まことに金朝文學の殿後なれども、しかも亦た元朝文學の先聲と爲すべし。蓋し遣山は逸民なり、未だ嘗て新朝に事へずと雖も、その故國の覆亡せるは、實にその四十五歳の時にして、其死に至るまでは、依然として大元の地に含糶し、海内の重名を負うて、文壇の牛耳を執れること、凡そ二十四年、當時の文學に裨補するところありしは、固より論なし、而して、その門下には、郝經の如き、王恽の如き、多數の俊傑を出し、朝に、野に、元朝の文運を鼓吹せしめしを見れば、元朝に文學あるは、實に遣山に始まると謂ふも、亦た何の不可か之あらむ。これに次いで、郝經より以下、陳時可、楊正卿、徐正隆、李輔之、王萬慶、李冶、王鶚の徒、皆金の舊人を以て、元朝に用ひられしもの、惜いかな、その述作、今多く傳はらず。

耶律楚材も、亦た元代文學の先聲となすべし。字は晋卿、もと遼の宗族、三歳父を喪ふや、母楊氏之に教へて學ばしむ。長ずるに及びて、群書に博涉し、傍天文地理律曆御數及び釋老醫の說に通じ、文を作る、宿構あるが如し。後、元に仕へて宰相となり、太宗十五年歿す。その相たるや、天下の貢賦、半は其家に入るを以て、皇后心にその奢を測り、近臣をして、之を覘はしめしに、唯だ琴玩十餘と古今の書畫金石遺文數千卷ありしのみといふ。

亦た以て其人と爲りを想見すべし。著すところ、浩然居士集あり。

郝經、耶律楚材等、もとより、詩文に名ありと雖も、その所長は、翻つて經史に在りしが如く、之を實力よりいへば、固より、當時の大儒許吳數輩に及ばず。許衡、字は仲平、河内の人、その學は、宋の趙復に出づ。復は北方に於て、程朱の學を樹植せしもの、學者之を江漢先生と稱す。衡、すてに其統を受け、道を以て自ら任じ、平生篤實、往進して先儒の蹤を追はむと欲す。その作るところの文章、明白質樸、主とするところは、達意に在り。官は集賢大學士兼國子祭酒に至り、世祖の至元十八年、病んで卒す。卒するに、臨み、その子に謂つて曰く、我、平生虛名に累せられて、遂に官を辭する能はず、死後慎んで諡を請ふ勿れ、碑を立てる勿れ、但だ許某之墓の四字を書し、子孫をして其處を識らしむれば足れりと。時に年七十二。許衡の講友に姚樞あり、字は公茂、柳城の人、その學、亦た趙復に出づ。從子あり、名は燧、字は端甫、その學、許衡より出づるも、文章は衡に過ぐること、甚だ遠く、一時の牛耳を執れり。延祐元年、病んで卒す。年七十六。他に劉因あり、金履祥あり、履祥、字は吉父、蘭溪の人、少にして、同郡の王柏及び何基の門に就いて學ぶ。宋の將に亡びむとするや、遂に意を仕進に絶ち、仁山の下に屏居せしを以て、學者之を稱して仁山先生といふ。門人許謙も、亦た其師に就いて、朱熹の傳を得たるもの、制行甚だ嚴なれども、世に應ず

る所以のものに至りては、古に拘らず、俗に流れず、跡を潜めて華山に入りしも、四方の士、千里を遠しとせずして來り、業を受くるもの、日一日よりも多し、これより先、何基、王柏、金履祥、相繼いで没し、その學、猶ほ未だ大に顯はれざりしが、謙に至りて、その道、愈よ重し、世、これを白雲先生と稱す、これと時を同うして、休寧に陳櫟あり、婺源に胡一桂あり、亦た道學を講明するを以て、その名、世に高し。

劉因、字は夢吉、保定容城の人、天資人に絶し、日に千百言を記し、目を過ぐれば誦を成す、はじめ經を學び、訓詁注釋の說を究め、歎じて曰く、聖人の精義は、殆んど此に止まらざらむと、周邵程朱の書を獲るに及び、一見して曰く、我、固より謂ふ、當に此あるべし、と、因つて、其學の所長を論じて曰く、邵は至大なり、周は至精なり、程は至正なり、而して朱子は其大を極め、其精を盡し、之を貫くに正を以てす、と、諸葛孔明が靜以修身の語を愛し、その居所を名づて靜修といふ、世祖至元十九年、徵して右替善大夫に擢んでしが、尋いて繼母の老ひしを以て辭し、歸る、俸給の如き、一も、受くるところなし、越えて十年、復た徵して集賢學士に拜すれども、起たず、世祖云ふ、古しへ謂ゆる不召の臣あり、當に斯人の徒なるべし、と、至元三十年、病んで歿す、年四十五、因は道學に長じ、兼ねて修辭に巧なるを以て、尤も世に名あり。

劉因、金履祥に後れ、許謙と同時に吳澄あり、字は幼清、撫州崇仁の人、仕へて、翰林學士となり、論策するところ多し、文宗至順二年卒す、はじめ、泰定の間、病を謝して、臨川に歸るや、四方の士、從遊するもの、日に數百人に下らず、著述亦た極めて多く、門下しきりに能文の士を出し、虞集の如き、詩文ともに秀づ、如上諸家の文を略評せむに、許衡は明白質樸にして、唯だ達意を主とし、吳澄は詞華典雅、篤實は前者に及ばざれども、工緻はるかに過ぎたり、劉因は曠世の高士、詩文を善くし、辭章遒健、迥かに許吳の上に在り、しかも、醇正亦たこれに減せず、これ最も稱すべし。

次に詩家に就いて觀るところあらむか、抑も、元は軟文學に於て其富を誇るべきも、史筆論策等の硬文學に於ては、頗る貧なり、而して、兩者中間の位地を占むべき詩は、詞曲と相鄰るの故を以て、纖麗に失し、金詩の悲壯と全く異なれり、括言すれば、詩は宋に於て散文化し、元に於て詞曲化したるなり。

元の詩人はじめに趙孟頫あり、これに次いで虞集、楊載、范梈、揭傒斯あり、北人には、薩都刺あり、而して、楊維禎、實に一代の殿をなせり。

趙孟頫、字は子昂、もと宋の宗族、宋亡んで、湖州に家す、世祖の至元二十年、詔して、前朝の遺逸を江南の地に訪采するや、遂に北行して、翰林學士承旨に拜せられ、五朝に歷事

し、英宗の朝に病歿す、年六十九。その人、固より鄙むべきも、その才藝の美、一世に冠たり。詩文清逸、奇逸、又書畫を善くす。楊載曰く、孟頫の才、頗る書畫の爲に掩はれ、その書畫を知るものは、文章を知らず、その文章を知るものは、經濟の學を知らず、と。岳王墳の一聯、「南渡君臣輕社稷、中原父老望旌旗、慷慨悲愴を極むと雖も、遂に殉國の忠臣たる能はず、まことに嘆惜するに堪へたり。その他、中原人物思王猛、江左功名屬謝安、白鷗自信無機事、玄鳥猶知有歲華、諸聯皆愛誦すべく、織耕圖二十四篇は、世に連璧と稱せらる。馬祖常、字は伯庸、延祐至元の間、在つて、富健の才と、鴻麗の文とを以て、海内に唱導すること二十餘年、かつて文宗に扈從し、龍虎臺に登り、一律を賦して、いふ、龍虎臺高秋意多、翠華來自似鸞坡、天將山海爲城壘、人倚雲霞作綺羅、周穆故漸黃竹賦、漢高空奏大風歌、西京巡省非行幸、要使蒼生樂至和、と。文宗見て感歎し、中原の碩儒は、唯だ祖常なりと稱す。その詩、天抵圓密清麗、尤も誦すべし。順帝至元四年卒す、年六十九。その他、方回、黃庚、尹庭高等、固より拔群の才なれども、遂に上の二人に及ばざれば、ここに詳論せず。

遷り、國子祭酒を兼ね、順帝の至元八年、病んで卒す、時に年七十七。集、人と爲り、孝友なり、師とするところのもの、すてに當時第一の大儒、獲るところ、亦た固より治博にして、本源を究極し、精を研ぎ、微を探り、心解神契、その經綸の妙は、一に之を文に寓し、頗る宋の慶歴乾淳の風烈あり。しかも、その尤も長と爲し、名を後世に留めたる所以のものは、一に詩に在り。抑も、詩は元遺山没してより、一代の正宗たるべきもの、久しく世に出てざりしが、虞集は、はじめて、その謹嚴なる法度と典實なる詞章とを以て知られ、健利の筆墨能く一時に壓倒して、文壇の寂寥を破す。その船次湖口の、霜氣隔篷纜數尺、斗杓插地已三更の如き、送袁伯長の、天連閣道長留輦、星散周廬夜屬纊の如き、以て氣格の一斑を窺ふべし。

虞集と時を同うして、詩に名ありしものを、楊載と爲し、范梈と爲し、揭傒斯と爲す。集と並び稱して、元代の四家と爲せども、集は固より、一代の文宗たり。楊と范と揭とは、之が輔佐たりしに過ぎず。然れども、猶ほ各自の本色を以て分道馳騁し、一時を粧點したれば、亦た宜しく傳ふべし。楊載、字は仲弘、杭州の人。趙子昂翰林に在り、載が作るころの文を待口を極めて推稱するや、文名殷然として、京師を動かす、かつて曰く、詩は當に材を漢魏に取り、音節は唐を宗となすべし、と。故に雍雅瞻正を極むと雖も、峻骨英氣に

乏し。紀曉嵐曰くその詩、清思は范棹に及ばず、秀韻は揭傒斯に及ばず、樞奇飛動は虞集に及ばず、しかも風規雅贍、三人の間に位置して、亦た終に作色なしと。大地山河微有影、九天風露寂無聲の如き、その詩、曠達清朗のもの、極めて多し。范棹、字は亨父、別字は德機、清江の人、家貧にして早く孤となりしが、流俗の外に卓立して、絶えて苟合の意なく、吳澄之を稱す。天遙一鶴立、山合百蟲鳴の如き、宛然たる自家の寫照、人物すてに高く、其詩に見はるゝもの、自ら遠情宕志あり。揭傒斯、字は曼碩、龍興富州の人、その詩、清麗婉轉、しかも神骨秀削、體裁尤も備はれり。順宗の朝、遼金宋史を修するや、その總裁となる。その佳句、近嶽常雲氣、中流忽雨來、落葉常疑雨、方池半是雲の如き、以てその體裁を知るべし。至正四年卒す、年七十一。

以上四家の詩、紀曉嵐の評、略ぼ之を盡す。はじめ、虞集、又自ら月旦して、曰く、楊載は百戰せる健夫の如く、范棹は唐人の晋帖に對するが如く、揭傒斯は美女の花を簪するが如く、而して、己は漢廷の老吏の如しと。傒斯、爲に不平なりしといふ。亦た以て、その趨向を察すべし。四家の詩系、もと江西より出づ。而して、集之が冠たること、萬口一異論なし。四家に後れて、薩都刺あり。字は天錫、もと色目の人、その祖父以來、雁門に居りしを以て、自ら號して雁門といふ。泰定四年の進士、その作るところの詩は、流麗清婉にして、尤

も情に長じ、多くは、時事を借つて、之を發せしが故に、當時すでに詩史の目より。その廣陵驛の落葉正飛楊子渡、行人又上廣陵船の如き、絶句の故人情、怨知多少、楊子江頭月滿船の如き、亦た以て、その筆墨を想見すべし。

次に、元の中葉以後に在りて、經學文章を以て知られたるものを擧ぐれば、先づ黃潛、柳貫、吳萊の諸家なるべし。黃潛の文は、法度を以て勝り、明初の名儒、王禕、宋濂の如き、實に其門より出づ。柳貫の文は、根源尤も深くして、名を獲ること、黃潛に齊し。或は云ふ、貫は、かつて、經學を金履祥に受けしが故に、得力の處、その然るを致せるなりと。吳萊の文は、秦漢を規模して、崢嶸なり、雄偉なり、これを黃と柳とに比すれば、稍や後輩に屬すれども、柳が之を稱して、絶世の才となし、黃が歎じて、我及ばずとなせしより、推せば、その才力の非凡なりしや疑なし。但し、齡を得ること、わづかに四十四にして死せしが故に、遂に老手、渾成を見るに及ばず、まことに惜むべし。黃、柳、吳の三家、また詩を善くし、吳萊の作、尤も誦すべし。その他、元末の諸家としては、倪瓚あり、何中あり、戴良あり、成庭桂あり。就中、倪瓚は、枯淡自ら喜び、詩名尤も高し、而して後に、一代の殿後として、楊維禎、乃ち出づ。

顧みれば、元の一代は、戲曲小説等、俗文體の製作、最も盛なる時にして、その詩に於て

も、史筆に於ても、叙事議論に於ても、遂に前代に追及するものあらず。當時の文章は、全く道學者が攻經の餘に成りしものにして、その人、すでに宋に及ばず、その作の愈よ下れるは、理の當に然るべきところ。但だ詩に於ては、多少取るべきものなしとせず。元詩は、由來纖弱綺靡の請あり。沈鈞德、これを辨じて曰く、人は謂ふ、元詩は纖弱にして、宋に遜れり、と。これ未だ元人の大全を究めずして、遽に一方の論たるなり。遺山未だ、かつて元には仕へざるも、巨手先を開いて、時に冠絶するは、もとより必ずしも言はず。趙虞楊范の如きに至りては、皆卓然として、家を成して正宗たり。その餘、奇を聘せ、麗を圖はず、一にして足らず。蓋し、宋詩末流の弊や、粗率となり、生硬となる。元詩は、之に反す。宋詩の流弊を救はむと欲せば、元を捨て、曷をか以てせむや、と。然れども、元詩が到底纖麗にして、その極、微弱に流れたるは、殆んど疑を著ぐるの餘地なく、謂ゆる錦囊を撥り、玉溪の芳韻を嗣ぐもの、亦た實に纖麗に陥るを免れず。蓋し、宋詩の弊は、多く虛字を斡旋し、流動自在なれども、動もすれば、逕露に失して、含蓄に乏しく、且つ莊重の趣を缺くに在り。これ、ささに、周弼が三體詩を著して、四實を先としたる所以にして、元初の趙孟頫の如き、さすがに之に鑑みるところありて、多く實字を用ひ、通體豐腴なるを以て、その歸宿となす。こゝに於て、元代の詩人、多く西崑に尸祝し、孟頫實にその唱首たり。然れども、宋

初の楊劉諸公の缺點を免れ得たるは、その才力、自ら然るならむのみ。されば、大體に於て、宋元の別をいへば、宋は其調甚だ駁、元は稍や純、宋は創撰に急にして、元は臨摸に過ぎ、詩としては、元、むしろ宋の上に在るも、唯だ體を具へて微なるを免れず。しかも、諸家が各體皆長じ、ひとり五古に短なるは、宋人に同じ。元人一般の風習、かくの如く、大抵辭に拘束せらるゝを免れざるも、虞集ひとり然らず。楊維禎は、又別調を出すに意あり、これ、その大家たる所以に外ならず。

(一三) 楊維禎

元末に楊維禎あるは、なほ金末に元遺由あるが如し。維禎、字は廉夫、紹興山陰の人、少にして穎悟學を好み、日に書數千言を記す。その父宏、爲に樓を鐵崖山中に起し、繞らし植ゆるに梅樹百株を以てし、新古書冊を聚むる數萬卷、維禎をして、之を讀ましめ、その或は怠らむを恐るゝや、梯を徹し、轆轤を以て食を傳へて之を督勵す。維禎、亦た發憤し、凡そ五年にして、經史百家に精通し、自ら號して鐵崖といふ。泰定四年、進士に第し、官に拜せられしも、狷直を以て之を罷む。至正の初、朝廷、遼金宋、三史を修むるや、與るを得ず。維禎、正統辨千言を作る。司徒歐陽玄、之を讀み、嘆じて曰く、百年の後、公論此に定まらむと。すでにして、四海兵起るや、遂に浙西山水の間に浪跡し、徙つて、松江の上に居り、聲價

愈よ高し。明興つて、天下大に定るや、詔して、遺佚の士を徴し、禮樂の書を修纂して、郡國に頒示す。維楨召されて、京都に至る。謝して曰く、老婦將に就木せむとす、しかも、再び嫁を理むるものあらむや、と。明年有司敦迫す。維楨已むを得ず、老寡婦謠一首を賦し、進御して曰く、皇帝、吾が能くするところを竭さしめ、吾が能くせざるところを強ひざれば可なり。然らざれば、海を踏んで、死するあらむのみ、と。太祖之を許し、安車を賜うて至らしむ。留まること百餘日、修纂するところの叙例、略ぼ成りしを以て、骸骨を乞ひ、山に歸るを求め、幾もなくして肺を病んで卒す。著すところ、四書一貫錄、五經鈴鍵、春秋透天關、禮經約、君子義、歷代史、鉞補正三史綱目、富春人物志以下、數十卷あり、然れども、詩文集の外、今傳ふるもの少し。

宋濂、かつて之を稱して曰く、商教周彝を觀るが如く、雲霄文を成し、寒芒横逸、人の目睛を奪ふ、と。その文、すでに此の如く、詩に至りては、更に長技を見る。その宗とするところは、唐の李賀、李商隱にして、才情雙絶、典麗の中に、一味の雋致を添へしところ、まことに千古の擅場たり。その佳聯、一雙孔雀銜青綬、十二飛鴻上錦箏、別院三千紅芍藥、洞房七十紫鴛鴦、杏花城郭青旗雨、燕子樓臺玉笛風、花鬢秋空戎馬順、神燈夜燭海鷄啼、童子單衣碧鷄立、美人雙袖彩鸞飛、燐光夜附山精出、龍氣秋隨海霧消、石佛浮江輕似葉、神珠照鉢隱

如燈の如き、以てその風骨を窺ひ見るべし。就中、詠史樂府は、奇譎を弄して、稍や正路を脱するも、新警殊に喜ぶべく、正に明代李東陽の爲に鞭を執つて先驅せし者といふべく、次に竹枝の類に至りては、太白飛卿の後、別に一軍を張るに足るものあり。當時號して鐵崖體といふ。張雨、かつて之を稱して曰く、少陵二李の間に出入して、曠世金石の聲あり、と。之を一概して、清麗芊眠、情文表裏、しかも骨力あり、唯だ時弊を矯むるに急なるや、往々にして、誕怪晦澁に陥ることあり、故に之を譏るもの、或は目して文妖と爲すに至ると雖も、その才情の横逸、まことに獨歩と謂ふべし。これを顧るに、元末の詩は、一般に纖弱に流れて、歌行の類、猶ほ小詩に髣髴たるものあるに至る。維楨これを歎じ、雄傑の才を以て、流弊を一掃せむと欲し、枉を矯めて直に過ぎたると、國變に遭遇して志の時と齟齬したるとは、從來背世違俗の士が、往往にして放縱に流るゝが如く、自ら此に至りしものなるべく、その志を推すに、もとより、一個の俠骨男子たるを失はず、區々たる枝葉の末、維楨に於て何ぞ病まむ。

維楨の詞友にして、詩賦文章を善くするものに張雨あり、倪瓚あり、顧英あり、李孝光あり、吳恭ありと雖も、その及ばざるや遠し。願れば、詩家の自ら一體を創成せしもの、古今能く幾輩ぞ。陶淵明の陶體と稱し、謝靈運の謝體と稱し、沈佺期宋之問の沈宋體と稱

し、韋應物柳宗元の韋柳體と稱し、白樂天元微之の元白體と稱し、李長吉の鬼體と稱し、李義山の西崑體と稱し、黃山谷の江西派と稱するが如き、榮として數ふべし。而して、維楨は、作者代興、諸體悉く備はれる後に生まれ、傑然として、一家の體を爲す。その稍や邪路に入ると否とは、しばらく之を措き、竟に牙後の慧を拾はざるもの、その才豈に偉ならずといはむや。而して、元代文學、乃ちこゝに畢る。

第二 明代文學

(一) 復古の氣運

明の太祖朱元璋、金陵に即位し、次いで元を破り、四方を經略し、統一の業、はじめて成り、中原の四百州は、再び漢族の手に歸しぬ。その元に勝つて歸るや、圖書を收めて、之を金陵に致し、詔して四方の遺書を求め、秘書監丞を設け、尋いて、改めて翰林典籍といひ、之を掌らしむ。而して、科擧士を取るや、經義を以て先と爲せり。かくの如きは、固より奎運の隆を謀るものに似たりと雖も、太祖刻薄の志よりいへば、天下の俊才を羈束し、風雲の志を抱くことなからしめむを欲せしものにして、その究極、四海を愚にするの手段に外ならず。但だ表面上、必然の結果として、一代を擧げて、文物典章、斐然として表面上、稍や觀るべきものあり。而して、謂ゆる八股文、亦た此間に出てぬ。

かつて述べたる如く、八股文の源は、宋の王安石熙寧中、詩賦を罷め、經義を以て進士を試みたるに擬まり、その後、多少の變遷なき能はず。而して、八股の目は、實に憲宗の時に起れり。股は對偶の意、蓋しこれより以前、經義の文は、傳註を敷演するに過ぎず。或は對し、或は散じ、未だ定式あらず。こゝに至りて、前後各四股を講じ、遂に此稱を來たすに

至りしがその後、又變じ、一正一反一虛一實、體裁大に革まれり。然れども、その間、亦た自ら通則あり、要は破題承題原起大結等を以て章句と稱するものなり。八股文、すでに受験の科目にして、之を學ぶもの多く、能手亦た少からずと雖も、要するに、腐爛の經義を反覆するのみ、その内容の文學趣味に乏しきこと、言を俟たず、加ふるに、その形式に於ても、千篇一律、陳々相仍り、遂に予が論述の對象となすに足らず。

ひとり八股文といはむや、古文に於て、亦た然るものあり。明代を通じて、鑄型的擬古的にして、氣骨峻贈たる詞章は、遂に之を求むべからず。實は言ふべき、或物を有せざるに因るや必せり。宋代文章の盛なるや、一方に於ては、哲學的思索の之に伴ふあり。元より以後は、然らず。明に至りて、愈よ甚し。永樂中、五經四書大全の勅撰ありし後、程朱の學、一世を風靡し、思想界は、全く統一されたり。その除外例としては、ひとり王守仁あるのみ。要するに、明人は、思索に短く、文章亦た光芒氣焰を缺く、而して、詩は、宋元以後、振はざること久しく、明人の力、亦た奈かむともするなきなり。

明の世を閱する二百七十餘年、固より短しと爲さず。文人詩客、亦た必ずしも尠からず。國初に當りては、宋濂、王禕、方孝孺等、文柄を握れり。而して、その本づくところは、實に元季の虞柳、黃吳に在り。師友講貫、以て之を致せるなり。詩壇に於ては、秀て、去た、實ら

ざりし曠世の逸才たる高青邱を中堅とし、前には劉基あり、相並んで吳中四傑の稱を擅にせしもの、楊基、張羽、徐賁あり。元季の餘風を存し、未だ隆時の正軌を極めずと雖も、亦た一時の盛を推すに足る。永樂以還、詩文ともに、體臺閣を崇び、軌轍振はず、弘治正徳の間、李東陽先づ出て、詩文兩道を分つて、氣運の先聲をなし、李夢陽、何景明等、謂ゆる前七子の徒、相繼いで起り、口を極めて復古を唱道し、文は西京以下、詩は中唐以下、ともに一切唾棄して取らず。天下翕然として、之に向ひ、明の詩文、こゝに、忽ち一大變を経たり。嘉靖の時に及び、王慎中、唐順之の輩、之に反抗し、文は歐曾を宗とし、詩は初唐に倣ひしが、李攀龍、王世貞等、謂ゆる後七子の徒、復た李何の舊に遵ひ、更に之を驅つて、極端に至らしめ、文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐、之を表面よりいへば、菁英彬彬々、大雅の章たるに似たりと雖も、氣力骨節、ともに之を缺けり。その後、この弊を矯正せむが爲に、歸有光は、司馬、歐陽を以て自ら命じ、徐渭、湯顯祖、袁宏道、鍾惺等の輩、亦た各一時に鳴りしも、その極或は激に失す。次いで、錢謙益、艾南英の北宋を矩獲するあり、張溥、陳子龍の東漢を奉守するあり、而して、遂に宗社の革命に際せり。

之を要するに、明代の文學は、全く復古的なり。前後兩七子の復古は、自ら標榜するところ、固より言を俟たず、之に反抗したるもの、亦た唯だ時代の先後を異にするに過ぎ

ずして、均しく是れ復古なり。宋代の思想界の活潑なるに反し、明の思想界は、萎微殊に甚しく、文學上の影響、殊に彰明較著、やがて這般の氣運を促進せしなり。腐爛の思想を載するに、擬古の詞章を以てす。人をして、殆んど辟易せしむ。明の文學、その量に於ては、頗る宏富なりと雖も、模擬剽竊その一半を占め、或は竊書の甚しきに至らむとす。清初の顧炎武は、明の遺臣、氣骨文章を以て、稱せられしもの、かつて、前朝文學の衰を慨し、覺えず、激語を着けて曰く、有明一代の若き、その著すところの書、竊盜に非ざるはなきのみと、やゝ酷なりと雖も、必ずしも、中らざるに非ず。詩文すてに取るに足らず、填詞亦た見るべきものなく、或は聲律を誤るものさへあり、ひとり、小説戲曲等の軟文學に至りては、元朝一時の盛、強弩の餘勢を留め、他に比して、はるかに稱賛すべき傑作を出しぬ。西遊、金瓶は、小説の尤なるものにして、湯顯祖の作に係る玉茗堂四夢は、亦た不朽の佳作たるに庶幾し。

(二) 明初の諸家

明初の宋濂は、同代を通じて唯一の大家を推すべきものなり、而して、詩に於て、同一の地位を占め得べき高青邱は、之と略ぼ時を同うして、やゝ後輩に屬せり。予は、こゝに便宜上、この兩者の間に伍すべきものを一括して、略述を試みむとす。濂の外、王禕、劉基、

方孝孺の諸家あり、ともに詩文兼達の名を庶幾すべきものなり。宋濂字は、景濂、浦江の人。元末薦められて、翰林編修となりしも、親の志を以て、辭して歸り、仙華山に入つて、道士となる。太祖起るに及て、劉基、章溢、葉琛と、徵されて建康に至り、帝に見ゆ。太祖喜んで曰く、我、天下の爲に四先生を屈すと、因つて座を賜ひ、從容經史を談論し、咨ふに時政を以てし、頗る尊禮せられ、有司に命じ、禮賢館を創めて之に處らしむ。後、元都を取り、その十三朝の實錄を得るや、廷臣に謂つて曰く、元は亡ぶと雖も、史は勸懲する所以、廢すべからずと、因つて、濂及び李善長、王禕に詔して總裁と爲し、山林遺逸の士、汪克寬等十六人を徵し、同じく元史を纂修せしむ。史成つて、翰林學士承旨を授けられしも、洪武十年に至り、致仕して歸る。越えて二年、宰相胡惟庸の誅に伏するに及び、濂も亦た逆に黨するに坐して刑せられ、その家を籍し、械して京に送る。太祖之を誅せむと欲す。皇后諫めて曰く、民間、一先生を請ふも、猶ほ始終あり、師を待つ禮を忘れず。今、宋濂は、かつて親しく太子及び諸王に教へしもの、宜しく此の如くなるべからず。况んや、濂の致仕して、家に在る、すてに久しければ、當に情を知らざるべしと、因つて宥して、茂州に安置せしむ。行いて、燕州に至り、疾を以て卒す。時に洪武十三年なり。正徳中、諡して文憲といふ。濂、人と爲り、軀幹短小、細目疎鬚、他に嗜好なく、唯だ學に耽り、文章

を以て自ら任じ、文原を作り、自ら序していふ、余の謂ゆる文なる者は、堯舜文王孔子の文にして、流俗の文に非ずと、その經國不朽の事業を以て、志と爲せるを知るべし。今、その全集に就いて之を觀るに、機軸自ら己に出て、敷腴朗暢を以て主と爲し、篇章字句の間、その語、或は緩漫、格も亦た稍や弱しと雖も、しかも深博典贖、蔚然として開國の氣象に富む、その閱江樓記の如き、華川書舍記の如き、劉兵部詩集序の如き、秦士錄の如き、優に一代文章の魁たるを知るべし。

王緯、字は子充、義烏の人、徵されて中省書掾となり、元史を修し、翰林待制に進み、雲南に使し、節に死す。建文元年、翰林學士を贈られ、諡して文節といひ、後、思文と改む。はじめ、濂と同じく、黃潛の門に學び、大體の趨向、頗る相似たり。明の太祖、かつて宋濂に謂つて、曰く、浙東の人才、唯だ卿と王緯とのみ。才思の雄は、卿、緯に及ばず。學問の博きは、緯、卿に若かず。と、その文、醇朴にして宏肆、詩も亦た切實にして純雅なり。緯、すてに才思に長ず、故に時に濂に勝るものあり。朱彝尊曰く、子充の文、元人元沓の間を脱去し、體裁明潔、當に景濂の右に在るべく、詩も亦た然りと。

劉基、字は伯溫、青田の人、幼にして、聰明人に絶し、凡そ天文兵法性理の諸書、一たび目を過ぐれば、其要を洞し、詩に巧に、文に妙、虞集之を稱して曰く、感慨を情性の正に發し、

憂愚を敦厚の言に存す、これ及ぶべからず。音韻の如きは、盛唐に愧づるなし。と、元の至正の初、春秋を以て進士に擧げられ、高安縣丞を授けられ、江浙儒學提舉に累官せしも、籌策するところ、皆用られず、劾を投じて出て、紹興に退處し、縱飲快談、以て自ら樂む。一日出て、西湖に遊ぶ、奇雲あり、西北に起る。同遊のもの、皆以て慶雲と爲し、將に韻を分ち、詩を賦せむとす。基、ひとり縱飲して、顧みず。大言して曰く、これ天子の氣なり、十年の後、當に金陵に在るべし。我當に之を輔くべし。と、時に杭州猶ほ全盛、衆皆耳を掩ひ、以て狂となし、復た基を知るものなし。唯だ西蜀の趙天澤、之を奇せし。以て諸葛孔明に比す。明の太祖の金陵に下るに及び、徵されて時務十八策を陳ぶ。太祖之を嘉納し、帷幄の中に留めて、機密の謀議に預らしむ。洪武の初、その佐命の功を論じ、茅土を開いて、誠意伯に封ず。後、胡惟庸の左丞相と爲るに及び、歎じて曰く、惟庸にして宰相とならば、この蒼生を如何と、憂憤して疾を成す。而して、惟庸亦た嘗て事を以て基を怨み、その疾むを聞くや、醫を遣りて之を視、藥二劑を飲ましむ。物あり、腹中に積み、卷石の如く、疾遂に篤し。太祖、自ら詔書を製して、之に賜ひ、使を遣り、送つて青田に歸らしむ。家に在ること一月にして卒す。時に洪武四年四月なり。年六十五。次いて、惟庸の逆露はるゝに及び、太祖、基が先見の明を思ひ、其孫を召して、爵を襲がしめ、正徳中、諡して文成といふ。基、人と爲り、

剛毅慷慨危難に遇ふごとくに計策立どころに成る。太祖甚だ之を禮重して曰く、伯温は我が子房なりと。その文雄奮なれども、神鋒太だ豁露せり。詩名固より更に高く、宋濂の文に於けると同じく、臺閣の重臣を以て、一代の先驅となりしものなり。故に揚維新は曰く、子房詞章を見ず、玄齡僅に符檄を辨ず、公は勳業邦を造り、文章世に名づく、千古の人豪と謂ふべしと。沈德潜、その所長を論じて曰く、元季の詩、すべて都華を尙ぶ。文成ひとり高格を標し、時に韓杜に追逐せむと欲す、故に超然として獨り勝る。允に一代の冠たり。樂府は古詩よりも高く、古詩は近體よりも高く、五言近體、又七言より高しと。然れども、七律又佳句多し。朱彝尊又曰く、樂府の辭、唐より以前、詩人多く之に擬し、宋に至りて、掃除殆んど盡く、元季の楊廉夫、李季和の輩、交も相唱答す、然れども、多く新題を構へて、古體となす、惟だ劉誠意、銳氣古を慕し、作るところ、特に多く、遂に明三百年の風氣を開く。その五言古詩は、専ら韋左司に仿ひ、その神詣を要するに、與に相伯仲すと。その佳聯、陰洞煙霞輝草木、古祠風雨出蛟龍、紫塞風高鴻失路、碧梧風冷鶻移居、百粵雨餘山翠合、三韓雲淨海青飛、高雲送雨來無定、獨鳥驚風去自遲、古戍有狐鳴、夜月高岡無鳳集、朝陽秋感代哭に、江流定與天河合、客淚還經地底廻、兩地身心悲夜鶻、五更鐘鼓夢春潮、山中虎豹人煙少、海上樓臺屢氣多、遊子到家無舊物、故人留客欲空尊、といへるが如き、皆誦すべく、

古詩は二鬼、感懷旅興、感時述事等、尤も覽るべし。胡翰、字は仲申、幼にして聰敏、吳師道、吳萊に從つて學び、許謙の門に登り、知を黃潛及び柳貫に受く、その文、宋濂、王禕と相上下し、尤も醇正を以て勝る。方孝孺は、文天祥、謝枋得に追隨すべき名節の士なり、字は希直、寧海侯城の人、宋濂に從つて學ぶ、同門の士、能く其右に出づるものなし。濂、かつて詩を贈り、其中に云ふあり、以茲稽古力、可敵讖定勳、濡毫寫雄願、勢足移峨岷、漏泄渾沌竅、出入造化神、盡抽神奇秘、不墮臭腐塵、所以自出之、愈見光景新、振古著作家、後先各繽紛、豈知萬牛毛、難媲一角麟と。建文中、文學博士となる。建安四年、燕王棣の師、京師を陥るに當りて、執へらる。乃ち筆札を授けて、詔書を草せしむ。孝孺筆を地に投じて曰く、死せば死せむのみ、詔は草すべからずと。燕王大に怒り、之を市に磔し、宗族坐して死するもの八百四十七人、歿後又その文字を嚴禁す。然れども、遜志齋集、その門人王稔、之を藏せしに因り、今に世に傳ふ。孝孺すでに烈丈夫、その文、光焰あり、氣魄あり、神氣流動、而して、本色は昌明博大に在り。しかも開闔自如、小韓の名ありと雖も、實は大蘇と相埒す。若し強ひて其失を求むれば、奔流激湍、一瀉千里、紆溯澗澗の致に乏しきこと、是れのみ。詩は餘技に過ぎざれども、渾朴醇正、談詩絶句、その本領を見るべく、就中、五言は、選體に熟精す。要するに、詩文ともに東坡の

所業に倣はむとせしもの、惜いかな、その死するや、未だ知命に及ばず、老成の域に達せ
まして止みき。

(三) 高啓

高啓字は季迪、長洲の人。少にして孤、力學して文武の才あり。元の末、張士誠の呉に據
りて四方の名士を招くや、禮を以て之に下れども、その必ず敗るゝを度り、拒んで往か
ず。遂に家を挈へて、婦翁周仲達に依り、松江の青丘に隠れ、徒に授けて自ら給し、暇あれ
ば、歌詠悠悠、殆んど草野に老ひむと欲するものゝ如し。因つて、自ら號して青邱子とい
ふ。明の洪武の初、薦められ、同縣の謝德と同じく召されて、翰林院國史編修に拜せられ、
元史を修め、復た命じて諸王に教授せしめ、尋いで啓を戸部右侍部に擢んで、又懲を吏
部郎中に擢んづ。啓自ら陳す、年少にして敢て重任に當らずと、懲も亦た固辭す。遂に許
され、並に白金を賜うて家に歸らしむ。この時に方り太祖の内行、漸く亂れ、官掖の間、論
ずべきもの、甚だ多し。啓かつて之を諷刺し、宮女圖及び書犬の詩を作る。宮女の詩に云
ふ、女奴扶醉踏蒼苔、明月西園侍宴廻、小犬隔花空吠影、夜深宮禁有誰來、と、書犬の詩に云
ふ、獨見初長尾、茸茸行響金鈴細、草中莫向瑤階吠、人影羊車半夜出深宮、と、太祖心に之を
惡み、未だ發せず。蘇州の知府魏觀は、啓が舊知なり、もと啓の才行を重んじ、ともに忘年

の交を結ぶ。啓が新に官を罷めて青邱に歸るを聞くや、爲に其家を城中なる憂侯里に
徙し、且夕延見して以て甚だ歎ぶ。洪武七年、觀、その府治の湫隘なるを以て、張府の故趾
を按じて、之を改む。而して、吳地は水患多し、故に復た錦帆溼を浚うて、以て民利を資く、
指揮蔡本といふもの、本と觀と惡し。因つて飛語して、太祖に聞す。太祖、御史張度をして
之を檢せしむ。度は儉人なり、觀を誣ゆるに既滅の基を興すを以てし、稱して異圖あり
と爲し、併せて啓がかつて觀が爲に作りしところの上梁文を摘發し、目するは黨を以
てせしかば、遂に太祖の怒に觸れて、市に腰斬せらる。時に年三十九、謂ゆる上梁文、今佚
して傳らず。後人諱んで存せざるを以て、その詳、考ふに由なしと雖も、要するに、文字奇
禍を得しは、斷じて疑ふべからず。張羽の槎史、赴臺の詩は、實に啓の爲に作り、その中、遊
者固云樂、子去不復還、平生五千卷、寧救此日艱、天網詎恢恢、康莊徧榛菅、の句あり。後人、或
は啓が如上の詩を以て、庚申君の作にして、好事者之に因つて、附會をなせしならむと
いふ。この説、非なり。蓋し、太祖刻薄、且つ閨門修まらざりしことは、願祿の事に徴して、之
を概見すべし。祿又かつて宮詞を作りて、諷刺するところあり。太祖、之を治せむとせし
が、その平生の詩、皆洪武正韻を用ひしが故に、遂に、之を釋せりといふ。これ以て、啓の事
を證すべきなり。

啓才思駿發、文には鳥藻集あり、氣を尙ひ、辨難攻撃の體多し。詞には、扣舷集あり、然れども、その絶技は實に詩の一邊に在り。吹臺、銜鳴、江館、風臺、青邱、南樓、姑蘇、勝壬の諸集は、自ら手訂せしものにして、後人之を合せて大全集となせり。又金檀の施注せし青邱詩集あり、最も善本と稱す。その詩、凡そ二千首、むしろ多しといふべし。傳ふるところに因れば、弱冠を踰ゆるや、日に五首を課し、久うして精ならざるを恐れ、日に二首、後に一首知るべし、終生吟哦を廢すること無かりしを、（此處に青邱の詩集の事あり）趙甌北の青邱を論ずる、極めて公平妥當の見を推すべし。曰く、詩は南宋の末年に至りて、纖薄すてに極まる、故に元明兩代の詩人、又轉じて唐を學ぶ、これ亦た風氣循環、往復自然の勢なり。元末、明初、楊鐵崖、目して巨擘となす。然れども、險怪は昌谷に倣ひ、妖麗は溫李に仿ふ、之を以て、自ら一家を成すとすれば、究むべきも、康莊大道に非ず。當時、王常宗、すてに文妖を以て之を目す、未だ後生の爲に法を取るべからざるなり。惟だ高青邱、才氣超邁、音節響亮、唐人を宗派して、自ら新意を出し、一たび涉争すれば、博大昌明の氣象あり、亦た有明一代の文運を開く、論者推して開國の詩人第一となす。信に、虛ならざるなり。李志光、高太史傳を作つて、謂ふ、その詩、上は建安を窺ひ、下は開元に逮ぶ、大曆以後に至りては、之を藐とす、これ亦た確論に非ず。今、悉く之を閱するに、五古五律は、

漢魏六朝及び初盛唐に脱胎し、七古七律は、參するに中唐を以てし、七絶は、併せて晚唐に及ぶ、要するに、その英爽、人に絶つ、故に唐を學んで、唐の囿するところとならず。從來唐を學ぶもの、李何の輩、その面貌を襲うて、その聲調を仿ふ、而して、神理索然、優孟の衣冠たり。鍾譚等、又一字一句に従ひ、冷僻を標舉し、以て味外の味を得たりと爲す。幽獨君の鬼語なり、ひとり青邱は、天半の朱霞、下界に照映するが如く、今に至るも、猶ほ光景常に新なり、その天分、及ぶべからざればなりと、

青邱の唐代名家に於ける體に従ひ、その形似を認むべし。杜を學びしものあり、韓を學びしものあり、白を學びしものあり、李商隱を學びしものあり、溫飛卿を學びしものあり、萬有を挫籠して、常師なきを見るべし。而して、その高きものは、往々にして、李白に逼り、天分の異常なること、こゝに於て、愈よ知るべし。李白の詩、未だ能く之を學びしものあらず、惟だ青邱之と相上下し、惟だ形似するのみならず、且つ神似するものあり。趙甌北、又曰く、司馬子微、青蓮の仙風道骨あるをいふ、而して、青邱の陶蓬先生に贈るや、亦た云ふ、謂予有仙契、泥滓非久淪と、蓋し二人實に皆出塵の才あり、故に相契神識の間に在るのみと。謝玄懿、青邱の詩を總評して曰く、季迪の詩、情に縁つて事に隨ひ、物に因つて形を賦し、縱横百出、開闔變化、その體製雅醇なれば、冠裳委蛇、佩玉して、長裾するなり、

その思致清遠なれば、秋空素鶴、廻翔下らむと欲して、輕雲霽月の連娟するなり、その文采の縟麗なるは、春花翹英、蜀錦新に濯ふが如く、その才氣の俊逸なるは、秦華秋隼の孤鶩、崑崙の八駿、風を追ひ、電を躡んで、馳するが如きなり、と形容刻劃を極むと雖も、青邱の詩、固より、之に當るに足れり、然れども、亦た必ずしも其失なく、沈德潜曰く、侍郎の詩、上は漢魏、盛唐より、上は宋元諸家に至るまで、其間に入出せざるなく、一時大作手を推す、特に才調餘あり、蹊徑未だ化せず、故に元風を一變するも、未だ能く直に大雅を追ふ能はず、と、紀曉嵐曰く、啓天才高逸、明一代詩人の上に在り、凡そ古調を摹擬する、真に逼らざるはなし、惟だ殞折太だ速にして、未だ鉛鑄變化、自ら一家を爲す能はず、故に古人の體を備有して、吾、何の體を爲すと名づくる能はず、これ、天、實に之を限る、啓の過に非ず、と。

今、集中に就いて之を観るに、明皇秉燭夜遊圖の如き、憶昨行の如き、陳氏歌の如き、雨花臺の如き、張中丞廟の如き、鐵券歌の如き、塞下曲の如き、悲歌の如き、皆古體の佳なるもの、次に青邱子歌に至りては、其詩に於ける抱負の尋常に非ざるを見る、五七言律に在りては、函關月落聽雞度、華嶽雲開立馬看、白下有山皆繞郭、清明無客不思家、疎柳一旗江上酒、亂山孤艇道中詩、半雨暮成風外雪、孤梅春動臘中花、數杵秋聲荒苑樹、一帆暝色大江上、

湖船、吳歌重把還鄉酒、蠻布猶穿過嶺衣、松風吹壁鶴翎墮、梅雨過溪魚子生、客中得酒銜悲喜、亂後相逢說死生、人雜島夷爭午市、潮隨山雨入秋城、寒池蕉雪詩人畫、午榻茶煙病叟禪、閉園細雨梨花落、廢苑平蕪燕子飛、冬多暖天無雪、半夜初寒月有煙、吳地有園花已盡、楚山無塚草空新、雪滿山中高士臥、月明林下美人來、の如き、帆過京口渡、碣響石頭城、僧來雙屐雨、漁臥一船霜、馬帶雲過嶺、人同燕到家、日短清江路、風高大樹村、雪明恣促曙、陽復坐銷寒、飛雉新阡麥、啼鶯故苑花、樓空三日雨、書亂一床塵、舊音猶帶楚、新夢未離吳、の如き、孰れか清俊ならざらむ亦た以て、その才思を概見すべし、

(四) 青邱同時の諸家

青邱同時の諸家固より少からず、而して、他の三傑尤も重しとなす、楊基、字は孟載、號を眉菴といふ、その先は蜀の嘉州の人、父、江左に官じ、基を吳中に生む、幼にして穎敏人に絶し、書十餘萬言を著し、名づけて論鑑といふ、天下亂るゝや、天平山の南、赤城の下に歸臥し、高啓等と相得て、歡ぶこと甚し、元の至正の末、張士誠の參軍、饒介の所に客たり、明の太祖の蘇州を取るに及び、その饒氏の客たるを以て、臨濠に安置して、江南に徙す、洪武二年に至り、はじめて赦され、幾たびか下僚に沈淪し、後、出て、山西按察使と爲りしが、尋いて職を視がれて、供役し、遂に工所に卒す、其少にして詩名を負ふ、會稽の楊鐵

厓、一代の詞宗を以て吳下に來遊し、詩を基に求む、基之に應じ、鐵笛歌を作りて、故らに鐵厓が詩體に倣ふ、鐵厓驚喜し、ともに東し、從遊者に謂つて曰く、我、吳に在つて、また一鐵を得たり、老鐵に勝ると歎するの、後、平生の所作、多くは散亡せしが、吳人張翊、之を訪求し、編次して十二卷を得、名づけて眉菴集といふ、その詩、秀清澗、神致の俊爽と才鋒の英銳とを以て、勝を占め、絶えて晦澁填切の病なく、之を宏正嘉隆の間に求むるも、未だ多く獲易からざるべし、唯だその少時、楊鐵厓に親炙せしが、故に、無題香奩の諸什は頗る其派に沿ひ、纖麗にして、未だ元人の氣習を脱せざれば、後の論者、往往之を詆誦し、王元美の如きは、風雅地を掃ふと極言せしに依り、耳食の徒は、遂に基を目して、王百穀、王次回の流と爲すに至る、然れども、その五言短古の如きは、李頎、常建に本づき、清逸喜ぶべく、佳聯には、無數白鷗閉似我、一江春水碧於天、草於間處生偏密、花到春深看漸疎、江浦荷花雙鷺雨、驛亭楊柳一笛風、江通溪水晴偏綠、山入湘雲晚更多、故人別後皆黃土、南浦春來又綠波、花裏小樓雙燕入、柳邊深巷一鶯啼の如き、鶯啼湘女廟、花落楚王祠、碧雲初見雁、紅樹尙聞蟬、水吞三楚白、山接九嶷青、帆影江沈寺、簫聲月到城、花疎寒食後、人遠暮雲前、の如きあり、但し未だ元人の習を脱せず、その高さもの、纒に之を晚唐に得たるのみ、徐子元云ふ、孟載は天機雲錦、自然に美麗、獨り時に纖巧を出すや、高の冲雅に及ばずと、

次は張翊、字は來儀、後附鳳と改む、潯陽の人、父に従つて江浙に官遊し、兵阻むに由り、吳興に居り、徐賁と約して、居を菁山に營む、元末、安定書院山長となり、明初徴して太常司丞に擢んでられ、翰林院同掌文淵閣事を兼ね、事を以て嶺外に竄せられ、未だ半道ならずして、召し還され、その免れざるを知るや、龍江に投じて死す、靜居集あり、文を善くして、歐陽修を學び、緻密宛轉、當時及ぶなく、書は小米を師とす、然れども、最も詩に工に、その五言は、杜韋を學びて、神理あれども、微に體格を嫌ふ、近體亦た長ずるところに非ず、歌行の一體、音節諧暢、律詩は清圓渾脫、彫績を事とせず、常に徐楊二人を凌ぎ、青邱と並馳すべし、但だ憾むところは、頓挫を缺くに在り、夕陽江上匆匆酒、細雨燈前草草詩、南渡客來多漢語、下江船去半吳歌、秋聲不盡蕭蕭葉、夕景無多淡淡山、片雨隔村猶夕照、疎林隔竹已秋風、の諸聯、尤も愛誦すべし、

徐賁、字は幼文、その先は蜀人、昆陵より徙つて、吳に居る、畫に工にして、山水に妙、元末、張士誠の客となつて、その幕下に在り、張翊、之を危み、詩を以て之を招く、その結に曰く、蠶餘即宜稼、樵罷亦堪漁、結屋雲林下、殘年共讀書、と、こゝに於て、士誠を避けて、吳興に之き、蜀山に隱居す、明の太祖の吳を取るに及び、その嘗て張氏に客たりしの故を以て、臨濠に誦徳せられしも、尋いて放還せらる、洪武八年、薦められて京に至り、給事中に拜せ

られ、御史主事參政に歴仕し、政績の卓異なるものあるを以て、江南の左布政に擢んで
 られしが、會々大軍の洩帳を征して其境を過ぐるに遇ひ、犒勞の時ならざるに坐し、獄
 に下つて死す。北郭集あり、その詩、體裁精密、情喻幽深、しかも風韻凄朗、顧玄言評して楚
 客の叢蘭、湘君の芳杜、毎に惆悵多しとなせり。朱竹垞、その詩を論じていふ、呂志學、かつ
 て幼文が畫くところの山水圖に題していふ、肆筆遺麗清潤にして書法を帶ぶと、詩に
 於ても亦た然り、その才氣は、之を高啓、楊基、張羽に較ぶれば、稍や未だ及ばずと爲すも、
 しかも詩法宕然、森として紀律あり、長篇險韻、その熨帖を極めて、頗る皮日休、陸龜蒙に
 類するものありと、今その佳句一二を抜かむに、風旗春獵野、雪帳夜歸營、水煙魚市晚、花
 氣野橋春、雁宿蘆中月、人歸草際煙の如き、皆傳ふべし。

吳中の四傑、均しくその終を克くせず、まことに嘆惜に堪へたり、張翥曰く、國初高
 楊、張徐を以て唐の四傑に比す、故老言ふ、惟だ文才の似たるのみならずして、その終る
 ところも、亦た相遠からずと、眉菴、盈川、令終に一の如し、太史の斃るゝ、賓王に同じ、北郭
 は海に溺れず、僅に首領を全うすと雖も、しかも首丘に非ず、來儀は龍江に投ず、又照鄰
 と異なるなし、噫、亦た異なり、その中、青邱ひとり、雋絶、他の三人は、要するに、第二流たり、
 啓、また嘗て北郭に家し、張羽、徐賞、王行、高遊、寺、宋克、唐肅、余、堯臣、呂敏、陳則と、比鄰を結ひ

詩文を以て相砥礪し、時に北郭の十友といひしが、その多數は、第三流以下にして、愈々
 論ずるに足らず、

劉高の間に介立し、家數は少しく小なるも、亦た別に自ら一家を成せしものは袁凱
 なるべし、字は景文、華亭の人、洪武三年、郷に擧げられ、尋いて御史を授けらる、時に諸武
 臣功を恃んで驕恣、罪を獲るもの漸く衆し、凱疏を上りていふ、諸將は兵事に習ふも、恐
 らくは、未だ君臣の禮を悉くさず、請ふ、都督府に於て、經に通じ古を學べるの士を延き、
 諸武臣をして講を聽かしむれば、族を保ち身を全うするの道を得るに庶幾からむと、
 太祖之を嘉納し、臺省に勅し、名士を延き、諸將の爲に書を説かしむ、後、帝、かつて一人を
 戮せむと欲す、太子請うて、これを釋す、帝凱を召し問うて曰く、朕と太子と孰れか是な
 る、凱頓首して曰く、陛下は法の正なり、太子は心の慈なりと、帝怒り、以て兩端を持すと
 爲し、これを獄に下す、獄に在ること三日、食はず、帝之を宥し、朝に臨むごとくに指して曰
 く、これ兩端を持するものなりと、一日朝に趨き、詭つて風疾を得と稱し、仆れて起たず、
 因つて郷里に歸るを得て、鐵索頂を鎖し、以て自ら形貌を毀つ、帝常に之を念ひ、使者を
 遣り、その家に即き、拜して本郡の儒學教授と爲す、凱、こゝに於て瞠目して使者を視、且
 つ一曲の詞を歌ふ、帝以て狂せりと爲し、復た問はず、永樂の初、病んで歿す、人と爲り、權

講にして才辯あり、談諧を能くし、之を以て禍を免る。晩年自ら海叟と説し、烏巾を背戴し、黒牛に倒騎し、九峰の間に遊行し、好事者之を圖す。その詩渾厚にして含蓄あり、沈徳潜曰く、李獻吉謂ふ、海叟、子美を師法すと、何仲默謂ふ、歌行杜の體を得たりと、鄒意平直を傷み、未だ變化を極めず、七言斷句は、李庶子、劉賓客の間に在り、青邱、孟載、俱に未だ及ばざるなりと、相傳ふ、凱未だ仕へざるの前、かつて鐵崖に謁す。几上に琴川の時大本作るところの白燕の詩あり、曰く、珠簾十二中間捲、玉剪一雙高下飛と、凱曰く、先生、この詩は、殆んど體物の妙を盡くさずと、鐵崖以て然りと爲さず、乃ち歸つて、同題の詩を作り、翌日鐵崖に呈す、曰く、故國飄零事已非、舊時王謝見應稀、月明湘水初無影、雪滿梁園猶未歸、柳絮池塘香入夢、梨花院落冷侵衣、趙家姊妹多相妬、莫向昭陽殿裏飛と、鐵崖驚喜、數紙に手書して、座客に分ち、凱の名はじめて高く、人呼んで袁白燕といふ、その佳句、江路猶殘照、荆門正落暉、好風因樹起、新月渡江來、看人兒女大、爲客歲年長、江外無來雁、淮南盡橘衣、水繞吳宮樹、山連禹穴雲、風塵遠道歸何日、燈火高樓合斷魂、西北朝廷無使節、東南城郭有烽煙等、皆誦すべし。

貝瓊、張以寧も亦た當時に於ける作家なり、貝瓊、字は廷琚、崇徳の人、人と爲り、坦率、志に篤うして學を好み、楊鐵崖に従つて學ぶ、その言に曰く、立言は嶄絶刻峭に在らずし

て平衍を觀るべしと爲す、荒唐險怪に在らずして、豐腴を樂むべしと爲す、蓋し鐵崖に學ぶも、その好むところに阿らざるものなり、元の末、張士誠、吳中に據り、辟せども、就かず、明の洪武の初、招かれて京師に入り、元史を修む、史成るに及び、賜を受けて歸る、六年、儒士を以て擧げられ、國子助教に拜せられ、後、中教、國子監に進む、十一年、致仕して家に卒す、その詩、雄整は劉基に亞ぎ、風華は高啓に近く、清空は袁凱に似、明麗は孫蕢の如く、律に於て其妙を極め、五律の沈警なるものは、杜甫を宗とし、七律の工麗なるものは、虞集に敵し、之に加ふるに、五古は温雅、七古は清新なり、元の姚燧、承旨たりしとき、玉堂に侍宴し、聲伎をして樂を奏せしむ、中に眞眞といふものあり、閩音を操る、之を詢へば、眞德秀の後なり、父が官錢を失ふに遇ひ、身を鬻いで以て償ひ、遂に娼家に流落せるもの、燧之を愍み、執政に白し、其籍を落し、以て翰林の屬官、王棟に嫁せしむ、廷琚、爲に詩を作らば、其事を記し、名づけて眞眞曲といふ、一時に盛傳し、廷琚も亦た此に因つて、その名を得たれども、其詞は繁縟にして、剪裁を缺けば、固より集中の傑作には非ざるべし、近體中、林間無日月、地底有風雷、漢節無歸使、夸歌有野童、士卒悲秦戍、兒童唱董逃、白雪作花八面落、青山如鳳馬頭看、石入劍門皆北向、水通鹽澤自西流、鹿跡滿山雲氣白、雞聲千古日車紅、地脈不從滄海斷、潮聲猶上浙江來の如き、以てその一斑を見るべし。

張以寧字は志道、下田の人、翠屏山に家居し、翠屏山人といふ。元の奉定中、進士に擧げられ、群邑に歴官し、世亂れて、江淮の間に留滯す。順帝召じて國子助教となし、尋いで、學士承旨を授け、明の太祖の元都を取るや、名對旨に稱ひ、復た侍讀學士を授けらる。洪武二年、安南に使し、途にして卒す、人と爲り廉潔少にして、俊才、春秋に於て自得するところ多し。しかも、衰暮二姓に事ふ、出處頗る惜むべし。はじめ虞集、黃潛、歐陽玄、揭傒斯以後の文家と稱せられ、その後、詩名亦た高し。その詩、沈鬱雄健なるものは、漢魏を追ふべく、清新俊逸なるものは、盛唐に配すに足ると稱せらる。紀曉嵐曰く、才氣は高啓、楊基、張羽に及ばざるも、しかも法律謹嚴、字句熨貼、長篇短什、並に首尾溫麗、三人に於て、又別に一格を爲す、以て人に勝るなしと雖も、しかも亦た敗るべからざるに立つ、と。翠雨、流雲、連玉、洞丹霞、担日、護樓臺、金馬、隱來人、豈識木鷄、老去我方全、英雄已盡中原沒、臣主終無北渡心の如き、皆佳聯といふべし。

明初の詩派、凡そ五處に於て、その源を發せり。胡元瑞曰く、吳の詩派は高季迪に防まり、越の詩派は劉伯溫に防まり、閩の詩派は林子羽に防まり、嶺南の詩派は孫仲衍に防まり、江右の詩派は劉子高に防まると、伯溫、季迪、すてに之を述ぶ。仍つて次に他の三家に及ばむ。

劉崧、字は子高、江西泰和の人、洪武三年、兵部職方司郎を授けられ、命を奉じて糧を鎮江に徵す。鎮江には功臣の田多く、租賦の民累を爲すもの一二に非ざるを以て、力請して之を少減す。尋いで北平の按察副使に遷るや、刑を軽くし、事を省き、流亡を招集し、治績頗る多し。後、宰相胡惟庸の惡むところとなりて、一時貶せられしも、十三年、惟庸の誅せらるゝに及び、徵されて禮部侍郎に拜せられ、吏部尙書に擢んづ。尋いで致仕し、明年また召して國子司業と爲す。未だ幾ならずして官に卒す。人と爲り、廉慎にして、友愛に厚し。家もと貧にして、兄弟三人、ともに節屋に住む。田五十畝あり、貴に及びて、増益するところなく、官に居るや、未だ嘗て家累を以て自ら隨へず。哺時吏退けば、ひとと一室に處りて、書を讀み、往々且に達す。その詩、詞彩鮮媚、音格未だ高からず。朱竹垞曰く、子高、句於ては大曆の才子に近く、宋に於ては永嘉の四靈に類し、元に於ては最も薩天錫に肖たり。と。たゞ、閩海烽塵、鳴戍鼓、江湖煙雨、暗漁裝、當戶雨、苔雙石、古、隔江煙、柳數峰、聞、北郭晚晴、山更遠、南塘春盡、水爭流の如き、以てその一斑を見るべし。

孫黃、字は仲衍、廣東南海の人、人と爲り警敏、書に於て、窺はざるどころなく、詩賦文章、筆を授れば、立どころに就る。尤も氣概を負ひ、妄りに交遊せず。元の末、何眞の南海を保

有するや、禮遇すること甚し、明の征南將軍廖永忠、兵を率ゐて南下するに及び、仲真費に乞ひ、書を作りて歸附す。一人だも戮せられずして、南海の恬然たるは、實に費が力なり。洪武三年、工部織染局使を授けられ、居ること一年餘にして、召されて翰林主簿と爲り、洪武正韻を修め、復た出でて平原の主簿に補し、累に坐し、逮繫せられて京師の城垣を修む。工を督するもの、費が鼻聲を以て謳吟するを聞き、之を太祖に奏す。太祖召し見、更にその歌ふところの詩を誦せしむ。皆忠愛の語、故に釋して郷に歸らしむ。二十六年、太祖の涼國公藍玉を誅するや、併せて其黨を窮治し、隻字の往來するものあれば、皆死に當つ。費かつて五題一書あり、或は之に勸めて謂ふ、當に上書して自ら明らかにすべしと。費答へず一詩を賦し、從容として刑に就く。その詩は、氣象雄渾、興喻深遠、五古は遠く漢魏を師とし、近體も亦た唐音を失はず、而して、歌行は尤も琳琅にして誦すべく、少しく繁縟に涉るを嫌ふのみ。費かつて南海に在りしとき、王佐黃哲、李懷趙介と詩社を南園に結び、以て名士を招き、時に稱して南園の五先生といふ、而して、費尤も稱すべし。林鴻、字は子羽、福清の人、明初薦を以て將樂訓導を授けられ、後、禮部員外郎に拜せらる。高棟、陳亮と同時にして、閩中十子と稱す、而して、鴻、その巨擘たり。その詩、唐人を宗法し、尺歩を繩趨し、唯だ字面句法のみならず、その題を并せて之に倣ひ、その集、一見舊本

の如し、之を細玩すれば、間々肺肝より出づるものあるも、亦た實に七子の俑を作りしを疑ふ。その他、明初の作家として、李昱、程本立、汪廣洋等あれども、一一詳論を値せず。餘は元季織縛に習ひ、薰染するもの、比々皆然り。これを要するに、明初の詩は、高啓が風華穎邁にして、特に諸人に度越せるは、當に推して中堅と爲すべく、而して、劉基が清新なるは、その先驅たるに愧ぢず。袁凱の峭拔、楊基の俊逸、之に羽翼し、張以寧、孫養、張羽、林鴻、李昱、程本立の徒、後勁と爲り、殿後と爲り、以て一代の氣運を展拓す。蓋し、その能く元季織縛の習を一洗せるは、一に國初人心の渾朴なるに、歸因するもの、亦た必ず多からむ。

(五) 臺閣體

永樂宣德の間は、明室の守成時代にして、國初に於ける崢嶸磊砢の氣風、漸く變じて儒雅となり、悠揚となり、その詩に於けるや、遂に臺閣體を確立せしめき。

解縉、字は大紳、吉水の人、洪武二十年の進士、一たび御史となりて、河州衛史に謫せられしが、旋つて、命を翰林に待ち、永樂の初、侍讀學士となり、年を踰えて、翰林學士に進み、出て、廣東參議となる。後、高煦の譖するところなりて、獄に下つて死す。その詩、當時に在りて、豪脱放逸を以て稱せられ、才名烜赫、海内を傾動す。しかも、篇什合存するもの少

し之に次ぐものは、楊士奇、楊榮、楊溥にして、英宗の初世、三楊と稱せらる。その傳は、これに詳述せず。この諸人、久しく館閣に在りて、朝廷の高文大冊多く其手に出て、述作亦た自ら典型あり、唯だ天下を擧げて、之を崇奉するや、形摸拘泥、萬喙一音、興象存せず、仍つて眞詩の亡を致す。その罪、之を窺めしものに在らずして、之を學びしものに在ること、辯を俟たず。

若し夫れ、臺閣派の外に在りて詩名ありしものを求むれば、曾棨、郭登、蓋し第一なるべし。曾棨、字は子啓、安吉、永豐の人。永樂二年、進士第一を以て翰林修撰を授けられ、侍講、侍讀、學士、左春坊大學士を歴て、詹事府少詹事に進み、卒して禮部左侍郎を贈らる。その詩、天才雄麗、後人或は稱して永樂の獨歩と爲すものあれども、平生迅筆千言、思索を費さざりしが故に、謹嚴精深の處少し。郭登、字は元登、七歳にして詩文を能くし、長するに及びて博聞強記、議論を善くし、兵を談ずるを好む。正統五年、王驥に從つて龍川を征し、七年、林斌に從つて騰衝を征し、功皆同列に冠たり。十四年、土木の變に都督僉事を以て大同を守り、也先を拒ぎ、功を以て、定襄伯に封ぜられ、成化八年、病んで卒す。その詩、才力排奐、七古尤も觀るべく、長阮道中謁山王祠、楸子樹の諸篇の如きは、夙に人口に膾炙し、詠梟の作に至りては、張王杜韓の長を兼ね、李東陽稱していふ、國朝の武臣の詩を能く

するもの郭定襄に過ぐるは、莫し、と何ぞ唯だ武臣のみならむや、一時臺閣の諸公、誰か復た其右に出てむ。かの髯、爲胡笳吹作雪、心因烽火練成丹の如き、以てその面目を想像すべく、樂府又張王に倣うて、佳作多し。

これを外にして、王直あり、李昌植あり、偶桓あり、劉績あり、秦旭あり、陳獻章あり、王越あり、劉濤あり、或は正統十才子と稱し、或は景泰十才子と稱し、復た屈指に暇あらざれども、多くは家數大ならず、謂ゆる時に英雄なく、賢子をして名を成さしめたるもの、特筆するに足らず。加ふるに臺閣の詩風、依然として存し、その薰染するところ、蒼華渾雄の氣、殆んど絶ゆ。

(六) 李東陽

物極まれば變ず、永樂以還、三楊の臺閣體、一時その跋扈を極めてより、一般に氣品と風致とを剝落し、天順成化の際に至れば、復た觀るに足るものなく、中晚宋元の諸調雜興し、殆んど敗墮して已まむと欲するの概あり。しかも、此時に在つて能く其間に砥柱し、以てその弊習を一洗せしものを李東陽と爲す。但し東陽は謂ゆる復古派に非ず。その門下生の如き、むしろ復古派に反抗せるもの多し。蓋し復古派を創起せしものは、李夢陽なり、何景明なり、皆東陽に繼いで出て、一たび其説を首唱してより、天下の之に歸

するもの、猶ほ萬派の海に朝するが如し、今その才力を以て視るに、李何は唯だ東陽に過ぎたるものあるのみにあらず、抑も亦た明代第一の作家と謂ふべし、しかも李何の起るは、東陽が一塵の功、亦た與つて力あり、王世貞稱していふ、李東陽の李何に於けるは、猶ほ陳涉の漢高を啓けるが如し、と、されば、李何、李王を知らむと欲せば、先づ東陽に就いて知るところなかるべからず。

李東陽字は賓之、號を西涯といふ、茶陵の人、幼にして神童の稱あり、天順八年、進士となる、時に年十八、庶吉士に選ばれ、編修を授けられ、累遷して侍讀學士に進む、弘治九年、早災あり、言を求むるや、上書して時政の得失を論じ、禮部右侍郎に擢んでられ、久うして、太子太保禮部尙書兼文淵閣大學士に進み、屢ば上疏して匡諫し、劉健、謝遷と並びて賢相と稱せらる、武宗の天徳元年、内官劉瑾の入つて司禮監となるや、東陽、劉謝等と即日官を辭す、詔して、皆罷められ、ひとり東陽をして留まらしむ、東陽之を耻ぢ、再び疏して懇請せしも、遂に許されず、その間、瑾の凶暴、日に甚しく、務めて縉紳を摧抑し、東陽に於ては、陽に敬して陰に忌む、而して、瑾が爲すところの亂政、東陽之を彌縫し、亦た補救するところ多く、劉謝以下の正人、幾たびか危禍を罹りしも、皆東陽の力争するに因つて、幸に身を保つを得たり、帝亦た嬉遊を好み、出入度なく、大に豹房の役を興し、寺觀を

禁中に立つるに至る、東陽、前後上疏して極諫すれども、聽かれず、老病を以て歸休を乞ひ、章數回入り、七年はじめて許され、後四年にして卒し、太師を贈り、諡して文正といふ、著すところ、懷麓堂集あり。

東陽、昭代に生まれて群英を弘獎し、正始を力追し、以て休明の運を鼓吹す、その天材の穎異なる、長短密約、高下疾徐、滔滔莽莽、唯だ意の欲するところ、その自序にいふ、興況の寄るところ、左に觸れ、右に激して聲を成し、これを止めむと欲するも、得て止むべからざるものありと、これ自得の言なり、而して、その尤も後世の眼を驚かしたるものは、擬古樂府なり、擬古樂府は古來の史集に就いて、忠孝義烈及び奇事異聞の以て歌詠すべきものを取り、之を洩發するに長短句を以てせしものにして、別に機杼を出し、人に因り、題を命じ、事に依り、義を立つ、王元美稱していふ、奇旨を創造し、名語疊出す、たとへ未だ之を管絃に被らしむべからざるも、天地間、一種の文字なり、と、宜なるかな、後人の範を取るもの多くは、此に於てするや、洵に元末の場、鐵厓が樂府と分道、馳鑣するも、その優劣、孰れか復た遽に之を判せむ、次に七言古詩は、杜少陵、蘇東坡の間に出入し、七律は清麗流逸にして、事を使ふに工に、尤も劉夢得に近く、餘體も亦た醇正にして、疵なし、唯だ才情の秀發に至りては、未だ高青邱に又ばざるも、氣度の雍容と風骨の遒健とは、

まことに一代の正宗たるに愧ぢず。徐子元曰く長沙大韶一たび奏し、俗樂ともに廢す、中興の宗匠、逸として、儻少しと。穆敬甫曰く、李公才情兼美、何李に於て倡始の功あり、大に唐の燕許に似たりと。沈德潛又曰く、永樂以後の詩、茶陵起つて、之を振ふ、老鶴一たび鳴いて、喧啾ともに廢するが如し。李何繼いで起り、廓して之を大にし、駸々乎として、一代の盛を稱す、と。後に錢牧齋が之を目するに、明代第一の詩人を以てし、王漁洋が口を極めて毀斥したる如きともに、公論に非ずと雖も、その家數、固より小ならざりしを、臆度すべきなり、要するに、その詩の尤も觀るべきは、長篇に在り、近體は、湖上青山到處有、鏡中華髮逐年深、奔走耻隨燕道路、死生惟着宋冠裳、萬古乾坤此江水、百年風日幾重陽、閉逢北地論山價、老向南枝識鳥心の諸聯、以てその風格を窺ふべし。

東陽と同時に楊一清あり、字は應寧、遂菴と號す、その先は雲南安寧の人、八歳文を能くし、奇童を以て薦められ、翰林秀才となり、十四、郷試に擧げられ、成化八年、進士に第す、父死して丹徒に葬るや、遂に之に家し、服除して中書舍人を授けられ、山西按察僉事に遷り、副使を以て陝西に督擧し、入つて太常卿となる、宏治十五年、劉大夏の推薦するに、遇ひ、都察院、左副都御史に擢んでられ、尋いて陝西の巡撫に遷り、三邊の軍事を總制す、正徳の初、邊寇を擊破せし功を以て、右都御史に進み、建議して邊牆を修集し、以て警に

備へむことを請ふ、帝、之に従ふ、功未だ卒らざるに、劉瑾、その己に附かざるを惡み、誣ゆるに邊用を浪費するを以てし、逮へて錦衣の獄に下せしも、大學士李東陽の之を救ふに因つて解くるを得たり、因つて致仕して歸る、安化王眞鑑の反するに及び、復た起つて軍に従ひ、眞鑑を擒にし、歸つて帝に謁し、劉瑾が奸狀を極陳し、瑾、遂に誅に伏す、天下頼つて以て安し、戸部尙書に拜し、功を論じて太子少保を加へ、尋いて吏部に改め、武英殿大學士を兼ね、入つて機務に參す、後、江彬、鐵寧の構毀するところと爲りて骸骨を乞ふ、帝、之を許す、帝、かつて南征し、一清が第に幸し、樂飲すること兩晝夜、詩を賦して、廢和するもの、十を以て數ふ、因つて從容として諷諫し、その江浙の行を止む、世宗、世子たりし時、獻宗と語る、曰く、楚に三傑あり、劉大夏、李東陽及び楊一清なりと、位に即くに及び、詔して兵部尙書、左部御史を以て陝西に赴き、三邊の軍事を總制せしむ、大臣の邊に行くは、一清より始まる、一清、邊事に通曉して、計畫するところ、皆その宜しきを得たり、之に久うして、内閣に召還し、少師を加へ、太子大保、吏部尙書、華蓋殿大學士を兼ね、時に張璁、桂萼、儀禮に因つて驟に貴く、多事紛更、一清之を抑裁し、仍つて、その憎むところとなり、讒に遇うて、籍を削られ、憤恚の餘、疽、背に發して卒す、その詩、古體は韓蘇に原本し、近體は陸放翁、陳簡齋を以て師となす、但し朱竹垞が之を東陽の上に出づとなせしは、斷

じて篤論に非ず、蓋し絳灌の韓彭に於ける如きのみ。

(七) 李何七子

李東陽、一たび復古を唱道してより、雄傑の才力を以て、能く一世を風靡し、嗣いで起るもの少しとせず。就中、一團體として、殊に勢力ありしものを李何七子となす。七子とは、李夢陽、何景明、徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相にして、この中、李何徐邊は、別に四傑の目あり。又王廷相を除いて、他の六子に加ふるに、朱應登、顧璘、陳沂、鄭善夫の四人を以てし、名づけて十才子といふ。如上の諸人は、詩文兩道を兼ねしものにして、文は必ず秦漢詩は必ず盛唐を稱し、相標榜して一世を藐視し、明の奎運は、こゝに一大轉向をなせり。七子の業功、罪利害、兩つながら之ありと雖も、沈頹せる文界を覺醒せし効果に至りては、斷じて争ふべからず。

李夢陽、字は獻吉、慶陽の人。宏治六年、進士に擧げられ、戸部主事を授けられ、員外に遷りしも、その館閣に處る能はざるを以て、居常怏怏として樂まず。氣を負ひ、酒を使ふ。考滿つるの日、尙書呂鎮、その考に署して曰く、一官不滿其心、三差不終其事と、時人以て實錄と爲す。夢陽憤ること甚し、偶々詔して直言を求むるに遇ひ、上書して、二病、三害、六漸を陳べ、併せて外戚張鶴齡が利を貪り、民を賊するを彈劾す。疏末に、陛下張氏を厚うす

の語あり。鶴齡曰く、これ皇后を誦るなりと、帝、已むを得ず、錦衣の獄に下せしも、尋いて之を釋し、郎中に進む。正徳元年、韓文に代りて奏を草し、劉瑾等の八閹を彈劾す。八閹深く之を恨み、旨を矯めて山西に謫し、復た他事を借り、逮へて獄に下し、將に之を殺さむとす。夢陽大に懼れ、片紙に書して曰く、對山、我を救へと。婦弟左國玉をして、持して康對山の所に至らしむ。對山は、その同學の友なり、爲に劉瑾に説き、僅に免るゝを得たり。瑾の誅せらるゝや、起つて原官に復し、江西の提學副使に遷る。これに久うして、同列を凌轢し、上官を挾制するを以て、停職せらる。こゝに於て、益す氣を負ひ、園池を治め、賓客を招き、日に俠少を従へ、繁臺、晋邱の間に射獵し、自ら崆峒子と號す。これより先、寧王宸濠、江西に傲據し、久しく異志を蓄ふ。夢陽が副官たりし時、濠、その盛名を負へるを以て、尤も之を禮重し、夢陽も亦た心を傾けて相附す。濠、かつて陽春書院を構へて、離宮に僭擬す。夢陽爲に之が記を撰ぶ。布政使鄭岳、正直を以て、濠に忤ふ。夢陽、濠と謀り、ともに其罪を構ふ。故に濠の兵を擧げて叛し、遂に誅に伏するに及び、御史周宣、その逆に黨し、善を誣ゆるを論じ、之を劾して斬に當す。幸に大學士楊廷和、尙書林俊が之を力持するに因つて死を免れ、唯だ書院の記を作るに坐して籍を削られ、嘉靖十二年、家に卒す。夢陽、人と爲り、偏僻危矯にして、絶えて儒家の風なし。かつて途に張鶴齡に遇ふ。醉に乗じて之

を罵り、撃つに馬鞭を以てし、その二齒を折る。識者以て、市井の無頼の所爲に類すと爲す。又その逆に黨し善を誣ひしを以て、乖戾を論ずるもの、頗る多し。然れども、その才思は勁摯なり、悍然として以爲へらく、天下人なしと、宏治中、宰相李東陽の文柄を執り、楊一清之が羽翼と爲りて、一世を風靡するや、夢陽師として之に事へ、傾倒して曰く、吾師崛起楊與李、力挽一髮廻千鈞とす。てにして、その詩萎弱、法とするに足らざるを譏り、何景明と復古の説を唱道し、また専ら摹擬を以て主と爲す。曰く、今人古帖を摹臨するに、太だ似たるを嫌はず、却つて事を能くすといふ。詩文の道、何を獨り然らざらむやと、亦た以て、その懷抱を見るべし。

その詩、衆體兼ね長ずと雖も、その中、自ら出入あり。沈德潛曰く、空同の五言古陳思康樂を宗法す。然れども、彫刻に過ぎ、未だ自然を極めず。七言古は雄渾悲涼、縱橫變化。七言近體は開合動盪、拘はらず、方に之を杜陵に準じ、體を具ふるに幾し。故に一代に雄視するに當つて、逸として儻少しと、要するに、その所長は、七古に在り、雄渾悲壯を以て本色となす。故に徐子容曰く、空同子の詩、衆體兼ねて長じ、渾厚沈着、格高くして調古く、尤も七言古歌辭に工なり。開闔縱橫、人の述ぶる能はざるもの、ひとり、摹寫曲盡、雄健喜ぶべし。乃ち杜甫高適の歌行中に、錯置するも、能く辯ずるなきなりと、然れども、刻劃甚だ過

ぎ、剪裁甚だ至れるは、錢謙益をして、その剽賊、嬰兒の語を學ぶに等しく、讀書種子、これより斷絶すといはしめし所以、疑もなく、その短處、但しその才力、氣格、群雄を牢蓋するの概あるに至りては、固より稱すべし。その佳句、一一こゝに擧げず。

何景明、字は仲默、號して大復山人といふ。信陽の人、八歳にして能く文を屬し、十九にして進士に第し、衆皆翰林を以て屬望す。大學士劉健曰く、此子誠に才あり、惜むらくば年遐かならざるのみと、因つて中書舍人を授く。正徳の初、劉瑾が政を專にするに依り、病を謝して歸る。瑾が誅せらるゝに及び、復た中書を授けられ、内閣敕房に直す。人と爲り、和にして介、節義を尙ぶ。李夢陽の獄に下り、書を作りて救を求むるや、景明爲に書を楊一清に上り、之を救ふ。錢寧、正に貴倖せられ、事を用ひ、かつて書を持して門に造り、題を求む。景明之を留むること年餘、擲ち還して曰く、この名繪、吾が題に汗さしむること勿れと、天變に遇ふや、上書して曰く、義子は善ふべからず、宦官は寵すべからずと、之に久らして吏部員外に轉じ、出て、陝西提學副使と爲る。その任に在るや、經學を以て士に課せしが故に、秦俗爲に化す。嘉靖元年、病を以て劾を投じて歸り、尋いて卒す。沈德潛曰く、北地の詩は、雄渾を以て勝り、信陽の詩は、秀朗を以て勝る。同じく是れ少陵を憲章するも、造るところ各異なり。薛君采云ふ、俊逸終憐何大復、轟豪不解李空同と、意に任

して抑揚す。詎ぞ定論となさむと。要するに秀朗はその特色なり。仲默の才本と夢陽に及ばざるも、妙悟は聊か深く、且つ翫關に意あり、これ稔秀朗健、その場を擅にせし所以なり。王阮亭、その明月篇を挙げ、風人の遺意を得たりとなし、之を評して曰く、接跡風人、明月篇、何郎妙悟本、從天、王楊盧駱當時體、莫逐刀圭誤後賢と。その平生の立言、謬論頗る多く、かつて李夢陽に答へて、詩は陶に溺し、文は韓に亡ぶといへる如き、殊に甚しと雖も、その詩の工は、別才に出づるに似たり。

邊貢、字は廷實、號は華泉、歷城の人。宏治九年弱冠を以て進士に擧げられ、太常博士を授けられ、兵科給事中に擢んでられしが、孝宗崩後、事を言ふを以て、外に出ざる。嘉靖の初召して、南京太常寺卿に拜せられ、尋いで、戸部尙書に擢んでらる。少にして、盛名あり、史事に通じ、交るところ、悉く海内の才俊なり。久しく南都に在り、優閒事なく、江山を遊覽し、毫を揮ひ、白を浮べ、夜以て日に繼ぐ。汪鏗掌憲たり、その名を忌み、論じて之を出す、因つて家居し、典籍を耽翫し、金石を搜訪し、古文甚だ富みしが、一夕火に燬かれ、大慟して曰く、嗟乎、我を喪ふよりも甚しと。遂に病を發して卒す。年五十七。その詩、古體は朴實餘あれども、風華に乏しく、近體は秀整婉約にして、大復に肩隨し、五言に於て、尤も其長を見る。

徐禎卿、字は昌穀、大倉の人。徙つて吳縣に居る。天資穎異、家に一書を蓄へずして通せざるところなし。宏治十八年、進士に擧げられ、國子監博士に拜せられ、京師に卒す。年纔に三十二。その詩、少にして六朝を學び、華を散じ、艶を流す。文章江左家家玉、煙月揚州樹樹花の句の如き、今に至るまで、人の口吻を香しかしむ。登第の後に於て、李夢陽と交遊するに及び、その少時の作を悔ひ、改めて漢魏盛唐を主とし、心傾意寫して已まず。この時に方り、李何陣を並べて、未だ雌雄を決せず。禎卿の精銳も、とより之に下るも、編師を以て勝を取る。標格清妍、遺詞婉約、李何と全く別調なり。大復の詩、邊幅や、狭く、しかも、風人の遺韻あり。徐の詩、大は李に及ばず、高は何に及ばず、しかも、丰骨超然、故に相並ぶを得たり。四傑の中、邊貢や、下り、何李徐は殆んど鼎立す。故に朱彝尊は曰く、人の有るべきところ、盡く有り、人の無かるべきところ、盡く無きは、大復是れなり。人の有るべきところ、盡く有り、人の無かるべきところ、盡く無からざるは、空同是れなり。三人の分量、自ら見はると、迪功は、徐集の名なり。

康海、字は對山、武功の人。弘治十五年、進士に擧げられ、翰林修撰となりしが、李夢陽を救ふに坐して、落職して、民となる。その詩、興致を先とし、語必ずしも典麗を盡さず。故に

又薦められ、起つて浙江の副使と爲り、參政より河南の按察使に擢んづ。攀龍、こゝに至つて襟度漸く和平なり。賓客も亦た稍や進む。三年母の喪に奔り、哀毀病を得、小祥を踰えて死す。その後、一家の寥落甚しく、その寵姬蔡氏、萬曆三十一年、年七十餘、濟南の西郊に在り、餅を賣つて自ら給す。人あり、これを見るや、賦していふ、白雪高埋、一代文、蔡姬典、盡舊羅裙、と。攀龍人となり、英邁、才氣敵なし、たゞ早歳名を求むるの急なるや、遂に自ら誤る。然れども、己を持する清嚴はしめに、循吏の名をなし、終に殉母の孝を爲す。亦た君子たるを失はず。

その詩、一に格調を尙び、聲律を重んず。しかも、辭意の重複、固より關せざるなり。その樂府の如きは、古人の數字を改め、以て己の作となす。摸擬剽竊、すてに甚しく、生吞活剝、視として顧みず。その文に於ける、亦た然り。沈德潛、攀龍の詩を評して曰く、歷下の詩、元美諸家、推獎過盛、而して受之の倍擊するや、謹呼叫喚、幾んど身に完膚なきに至る。皆黨同伐異の見なり。分つて之を見れば、古樂府及び五言古體は、臨摹太だ過ぎ、痕跡宛然たり。七言律及び七言絶句は、高華矜貴、凡庸を脱去し、短を去り、長を取り、意見を存せず。歴下の眞面目なり。と。然れども、是れ猶ほ寛に過ぐるの嫌あり。朱彝尊曰く、たゞ七律は人ともに推すところ、心慕手追するものは、王維、李頎なり。合せて之を觀れば、句重字複、氣

斷續して、神孤離なり。亦た絶品に非ず、と。

王世貞、字は元美、號は鳳洲、大倉の人。嘉靖二十六年進士に擧げらる。楊忠愍の嚴嵩を彈劾して獄に下るや、心を傾けて周旋し、其妻が夫の冤を訴ふる如き、一に皆之を代草し、其市に死するや、復た其喪を經理し、詩を賦して之を哭し、また數ば他事を以て嵩に忤ひしが故に、遂に其恨を受け、出て、青州の兵備副使と爲る。父、扈が滿遼の邊備を總督し、事を失するに依り、嚴嵩に構陷せられて死地に在るを聞くや、官を解いて奔赴し、弟世懋と百計營救せしも、遂に免れず。闕に伏して其冤を訟ふ。大學士徐階の之を左右するありて、扈の官を追復せらる。後、大名兵備副使、建西右布政を經、入つて大僕寺卿と爲り、尋いで、右都御史を以て、鄖陽を撫治す。偶々張居正と隙をなし、一時罷められしも、居正の死するに及び、復た起つて南京の兵部右侍郎に拜せられ、刑部尙書に擢んづ。萬曆二十二年卒す。時に年六十五。世貞は、はじめ李攀龍と社を結び、李夢陽が復古の説を紹述せしが、晩年に至り、漸く之を抉摘するものありて、深く自ら舊學を悔み、かつて著すところの藝苑卮言を論じていふ、余、卮言を作るの時、年未だ四十ならず、于鱗の輩と古を是とし、今を非とし、此は長、彼は短、未だ定論と爲さざるに、今世に行はるゝ、すてに久しく、復た秘する能はず。唯だ事に隨うて改正す、と。又、歸有光の畫像に賛して、傾倒の意

を表し、晩年翻つて東坡集を手にして、諷玩措かざるが如き、本來の性、頗る聰明なるを知るべし、著すところ、鳳洲山人四部稿百七十四卷續稿二百七卷あり、亦た盛なりといふべし。

蓋し世貞の才たるや、素より攀龍の敵に非ず、しかも、その邪説に惑はされしもの、文士の持説に於ける、なほ臣子の節操に於けるが如く、一たび之を誤れば、亦た奈何ともするなきなり、沈德潜曰く、弇州、天分すてに高く、學殖亦た富、珊瑚木鶏、以て及び難く、牛溲馬勃、有せざるところなし、樂府古體、高く、歷下に出づ、何を香に數倍のみらならむ、七言近體、亦た大家を規し、しかも鍛鍊未だ純ならず、故に華瞻の餘、時に淺率を露はす、と、朱彝尊の論、更に精なり、曰く、嘉靖七子の中、元美の才氣、于鱗に十倍す、惟だ病は博を愛するに在り、筆は千鬼を削り、詩は兩牛を裁す、自ら以爲へらく、有せざるところなく、方に大家を成すと、一時の詩流、皆その品題を望み、推崇實に過ぎ、諛言月に至り、箴規聞かず、之を究むるに、千篇一律、安んぞ、その有せざるところなきに在らむや、樂府は奇奇、正を變じ、陳を易へて新となし、遠く于鱗が生呑活剝するもの、の比に非ず、七律は高華、七絶は典麗、亦た未だ遽に于鱗の下に在らず、當日名は七子と雖も、實は一雄、その自述に云ふ、野夫興就不復刪、大海廻風吹紫瀾、と言は、大なりと雖も、しかも夸に非ず、と、蓋し

その博を愛するは、學殖の富に本づき、古文辭の剪裁を事とする間に於て、なほ新を出せしは、才思の敏に因るものなり、李王の詩、かくの如く、その文に至りては、特に論ずるに足らざるなり。

はじめ攀龍の刑曹に官するや、李先芳、謝榛、吳維岳と詩社を結べり、世貞の褐を解くや、李先芳、引いて社に入れ、遂に攀龍と交を定む、明年、先芳出て、外吏となり、又六年、宗臣、梁有譽、社に入る、是を五子となす、未だ幾ならずして、徐中行、吳國倫、亦た入りしを以て改めて七子といふ、この諸人、少年多く、才高氣鋭、互に相標榜し、當世を見ること人なきが如く、七才子の名、天下に遍ねし、すてにして、先芳、維岳を擡けて與らしめず、榛も亦た擡けられ、攀龍、遂に之が魁となり、その死後、世貞ひとり其柄を握り、之に次いで、前五子、後五子、廣五子、續五子、末五子等の號を爲り、名稱紛々、識者之を笑ふ。

李王の持論は、何李と異ならず、しかも、之を標舉して、極端に進めしものなり、曰く、文は西京、詩は天寶よりして下、ともに觀るに足るなし、本朝に於ては、ひとり李夢陽を推す、と、諸子、翕然として、之に和し、之に違ふものは、詆つて末學となす、李王の才力、もとより庸流に非ず、しかも、千古の醜名を貽せしもの、誠に惜むべきなり、次に李王以外、他の諸子に就いて略述するところあるを得む。

七才子中李王に次ぐものを謝吳となす。なほ邊徐の李何に於けるが如く、その本意は、忠臣羽翼たるに自かざるものなり。

謝榛、字は茂秦、四溟山人と號す。臨清の人。一目を眇し、少にして遊俠を喜ぶ。ずてにして節を折つて書を読み、刻意歌詩を作り、鄴下に寓居す。趙の康王、これを賓禮し、厚遇至らざるところなし。嘉靖の間、詩卷を挾んで長安に遊ぶ。時に瀋縣の盧柟、無辜を以て獄に在り、榛、諸貴人の前に於て柟が作るところの詩賦を誦し、泣いて曰く、生、一盧柟あり、その死を視て之を救はず、其れ之を奈かむと。瀋縣の令陸光祖、之を聞いて感激し、柟を宥して獄を出てしむ。時に李王の徒、社を結んで燕に在り、榛が行誼を重んじ、推して盟長と爲し、詩を選ぶには、多く定を榛に取る。攀龍が贈詩にいふ、謝榛吾黨彦、咄嗟名士籍、遂令清廟音、乃在布衣客と。世貞も亦た五子の詩を作り、皆謝榛を以て首と爲し、次ぐに攀龍を以てす。後、攀龍位貴く名盛に榛と詩を論じて合はず、絶交の書を作つて曰く、豈に其れ一の眇君子をして二三の兄弟の上に肆にせしめむやと。同社のもの、皆李を助けて謝を斥け、其名を七子五子の列より削る。故に榛の詩にいふ、奈何君子交、中道兩棄置と。蓋し明の時、資格を重んず、章服の中に於て、雜ゆるに布衣を以し、終に以て嫌を爲す、亦た悲むべし。然りと雖も、榛の遊交、日に廣く、秦晋の諸藩、争うて之を延致し、河

南河北、稱して謝榛先生といふ。趙の康王薨じ、曾孫穆王、亦た之を禮し、爲にその全集を刻するに至る。かつて、その關中より歸りて王に謁するや、王之を便殿に宴し、愛幸するところの賈姬に命じ、獨り琵琶を奏し、榛が作るところの竹枝詞を歌はしめ、また命じて出て拜せしむ。光華人を射る。地に席して坐し、更に十章を唱ふ。榛曰く、これ山人が里言のみ、請ふ更に製して、以て房中の奏に備へむと。詰朝、竹枝の詞十四章を上る。姬悉く按じて、これに諧す。明年元夕、穆王盛禮して、姬を榛に贈る。榛携へて燕趙に遊び、大名に至りて卒す。姬二子を率ゐ、柩前に於て、毎夜琵琶一曲を彈じ、榛が作るところの竹枝の詞を唱へ、必ず慟絶して已む。因つて千金の裝を以て二子に付し、歸り葬らしめ、自ら樂器を破り、闌闌の間に歸老す。時に萬曆六年なり。その詩、近體は字烹句鍊、氣逸調高、七子中、獨歩を稱す。古體は、所長に非ざるも、本色自ら存す。その説に曰く、初盛十二家、並に李杜集中の佳なるものを取り、録して一帙となし、然る後、之を熟讀して以て神氣を會し、之を申詠して以て聲調を求め、之を玩味して以て精華を集むべし。この三要を以て、深成するに至れば、必ずしも謫仙を塑し、少陵を畫かずと。李王の輩、心に此説を師とし、後來排撃、しかも、なほ之を以て詩の指要となす。今人、謝詩の妙を悟らず、偶々之を誦するも、その格調の高きをいふのみ、絶えて意境の細を知らず。朱竹垞が、弇州才の大は曹孟

徳の如く、放蕩にして威儀なく、笑ふ時、頭、杯案を没す、英雄たるを失はず、四溟は磨折工なりと雖も、特に公孫子陽邊幅を修飾し、僅に清水の令たるに堪へたるが如きのみと、いへるは、斷じて篤論に非ず、然れども、眇山人の意氣、天の如く、その古人の詩を論ずるや、往々にして偏見を免れず、故に王阮亭之を嘲つて曰く、楓落吳江妙入神、思君流水是天眞、何因點竄澄江練、笑殺談詩謝茂秦と、彼の贈々自ら高しとするもの、亦た以て頂門の一針と爲すべく、詩を作ると詩を評すると、自ら異なるも、後人稍や慊らざるもの、その一、蓋し此に在り。

吳國倫、字は明卿、興國の人、嘉靖二十九年の進士、中書舍人を授けられ、兵科給事中に擢んづ、楊繼盛が死せし時、首唱して賻送せしが、故に、嚴嵩に忤ひ、南康府の推官に左遷せられ、官を棄てて歸る。嵩の敗るゝに及び、起つて建寧同知より河南左參政に遷る。才氣横放、義を好み、財を輕んず、歸田の後、聲名王世貞に均し、名を求むるの士、東、太倉に走らざれば、西、興國に走る。萬曆中、世貞すてに没して、國倫猶ほ恙なく、年八十餘にして卒す。陳臥子、その雅鍊流逸、情景相副ふを稱す、亦た鐵中の錚々たるものなり。

梁有譽、字は公實、廣東順徳の人、國倫と同年の進士にして、刑部主事を授けらる。居ること三年、母を念ふを以て、歸るを告げ、門を杜して書を讀み、大吏至るも辭して見ず、後、

羅浮に遊び、滄海の日出を觀るや、海颶大に起り、田舎に宿ること三夕、寒に中り、病を得て卒す、年三十六。その古詩は、選體に類し、五七律は、意趣沈實、絶えて叫囂の態なし。

徐中行、字は子興、長興の人、官、右政使に至る。人と爲り清介、篤厚の行あり、その詩、古哲を規摹すと雖も、手追心慕は、李攀龍に在りて、沈滓の致少し。その他は、一々詳述せず。

これを要するに、前後七子の主奉せし修辭、即ち古文辭の學は、言語の發達と語法の變遷とを無視し、斬新なる思想を棄却し、一意古に摸擬せむとしたるものに外ならず。もし之を以て、詩文製作に於ける或る時期の修練方法に過ぎずとすれば、なほ恕すべしと雖も、文學の本領、こゝに在りとするに至りては、斷じて、取るに足らざるの偏見たり。先づ文に就いていはむに、韓柳二子は、唐代に於ける古文の復興者なり。しかも、李王の之と異なる、水火も雷ならず。韓愈、かつて文法を論じて曰く、古文の意を師として、その辭を師とせずと、而して、李攀龍は曰く、古を視て辭を修めよと。又韓は、難くする勿れ、易くする勿れ、難易に意あるときは、文、條暢せずといひ、李は、専ら難きをなし、古書の險なるところを驅使す。又、韓は、豊にして一言を餘さず、約にして一辭を失はずといひ、李は、但だ簡爲を尙び、百字を減じて五十字となし、五十字を減じて三十字となさむとす。かくの如くして、七子の修辭は、重んずるところ、辭の一邊に在り。氣格の古に近きを求

むる極は、その構想の大半を棄て、理の透徹を缺くを顧みず、故に其手に成りしものは體の如何を問はず、すべて全然古陋にして、窮屈なるものに過ぎず。これ、むしろ笑ふべきに非ずや。次に詩に於けるも、亦た此の如く、いたづらに、摸擬を事として、變化に乏しく、その題は塞下曲、青樓怨等にして、筆を下せば、中原萬里、天地乾坤、陽春白雪、金樽明月、紅塵白雲の類、その重複疊出に堪へず、身、明代に生まれて、數百十年の前に於ける、唐人の構思と口吻とを摸して、自ら得々たるもの、畢竟、時の推移を解せざる愚人の事のみ。海陵生、かつて滄溟の語を借り、漫興の一首を作つて曰く、萬里江湖迥、浮雲處處新、論詩悲落日、把酒嘆風塵、秋色眼前滿、中原望裡頻、乾坤吾筆在、白雪誤斯人。この四十字、亦た以て、李王の徒の箴砭となすべし。李王の輩、すでに修辭を業とし、その究極は、集字集句の小技に外ならず、故に、李攀龍が白雪樓を構へ、詩文を屬する毎に、樓に上り、楷梯を棄て、人の上るを許さず。又稿を脱せざれば、終に下らずと傳ふるもの、後人或は之を誹譏し、これ勞擾を厭ふのみに非ず、實は獮祭抄寫の醜を人に見せざるが爲ならむといふに至る。やゝ酷に過ぐると雖も、必ずしも、中らざるに非ず。若し夫れ、末流の徒に至りては、遠く秦漢以上に溯らずして、李王諸子の文集を以て、金科玉條となし、その成語を抽出して、その源を古書に求めず、轉々徵引、往々にして、その本義を失し、誤用殊に甚し

きものあり、修辭の陋、まことに極まれりといふべし。故に、清初の艾南英は曰く、後生小子、必ずしも書を讀まず、必ずしも文を作らず、たゞ前後四部稿あり、應酬に遇ふ毎に、頃刻に裁割すれば、便ち篇を成すべく、驟に之を讀めば、濃麗鮮華、絢爛目を奪はざるなきも、細に察すれば、一腐套のみと。

古文辭の學は、後に我が邦に入り、元祿貞享の間に盛行し、浸淫數十年、後に具眼者の之を辯駁せしに由りて、漸く正に復歸するを得しが、その言、修辭の本質に論及し、往々にして傾聽を値するものあり。今試に、その數條を引抄せむか。曰く、今夫れ、鞞鞞の飾、金鐵銀銅の嵌、鏤刻は、好玩者、古を愛して、新を喜ばず。均しく一物なり、古き者は貴くして、新しき者は賤しく、その價、曾だ倍蓰するのみならず。こゝに於てか、姦工ありて、古物を摸倣し、質輕文浮、これを爛すに硝石を以てし、之を腐らすに淤泥を以てし、わづかに鏤錘を雕るれば、即ち古物となし、鏤剝嵌落、刻畫刑弊、然る後、繋くるに綵縑を以てし、藉くに文錦を以てし、以て千金の子を銜惑し、羸を得ること、蓋し多し。但だ賞鑒するものあれば、乃ち棄て、顧みず。然らば、古物は、竟に爲すべからず、しかも、新、又人に喜ばれず、今の工たるもの、亦た難からずや。曰く、然らず。その質、堅重、その文、條暢、金鐵銀銅、唯だ意の用ゆるところ、嵌、鏤、鏤、刻、たゞ心の規するところ、巧を極めて、織ならず、美を致して、靡

ならず、端莊溫文、典にして古意を失はざるものは、今の良なり。賞鑒するもの、新を以て之を捨てず、何ぞ必ずしも剝落剝弊を之れ爲さむや。近世復古の學を爲すもの、妄りに古文を以て號となし、剽竊蹈襲、以て古文となし、冷炙に朶頤し、殘瀝に流涎し、經の燒痕を模し、史の闕文に放ひ、寸斷咫刻、隣合篇を成し、錦繡百結、問ふるに世服を以てし、險怪腐爛醜態萬狀、乃ち大言して、以て譽を釣る。その姦工たるや、亦た大ならずや。然り而して、之に銜惑せらるゝもの、滔々として皆是れ、棄て、顧みざるもの、天下幾人ぞと。又曰く、王李は齷齪たる豎子、その作爲するところ、割裂纂組の巧、摸擬剽竊の務、何の古文か、之れあらむ。特に謂ゆる鷄鳴狗盜の雄のみ。これに誑誘せられ、謬り信じて、古文こゝに在りといひ、遂に其巧を牛鼎にし、これを古經に移し、以て聖門の眞を得たりと爲す。齷齪亦た甚しと。一言すれば、李王の修辭は、古錦繡を剪裁して、襤褸となすの徒勞にして、痴愚なるものに非ざれば、古器物を贋作して、その値を増さむとするの姦に外ならず。あゝ古しへ、果して貴ぶべきか。數百年後の將來よりいへば、今も亦た古しへのみ、社會の思想言語にして、幾多の推移を累ぬれば、今の文も、亦た遂に、古文たらむ。彼等の悟つてこゝに至らざるは、極端なる崇古主義に沈醉して、終に醒めざるが故か。且つ夫れ、李王の徒が修辭を唱へしは、もと時弊矯正の意に出でしものにして、これを或る程度と

範圍とに限れば、その效果、蓋し見るべきものありしならむと雖も、一時濟藥の方、天下後世に浸漸し、その除毒、愈よ甚しきを加ふるに至りては、却つて、當初の本志に違ふの觀なくむばあらず、惜まざるべけむや。

然りと雖も、前後七子は、ともに當代の英豪にして、就中、李王は、之を李何に比して、規模の大小、やゝ相及ばざるも、謝吳の諸子とともに、才氣自ら富健にして、猶ほ一世を牢絡するの概あれば、觀るべきもの、亦た随つて多し。後世耳食の徒、自ら李王の眞價を知るに及ばずして、妄りに前人に附和雷同し、しきりに、口舌を弄し、以て詬罵を極む、たとへば、萬犬の虛に吠ゆるに同じ。予も、亦た、もとより摸擬の作を惡むもの、何ぞ李王の見地に取らむ、たゞ、その才氣を稱するのみ。讀者、幸に誤解することなかれ。

大凡、前後七子及び其徒の見地偏狹にして、妥當を缺き、人文發達の自然的趨勢と相反するの甚しきや、その生時より、早く既に幾多の反抗者を輩出し、是非の論、文界に喧しく、やがて、明の社稷と相終始せしめしが、これ亦た必然の結果に外ならず。

(九) 七子の反抗者

前後七子の間に立ちて、一家の別調を立てしもの、二三その人あり、その最たるものを楊慎となす。字は用修、新都の人、升菴集あり。沈德潛曰く、升菴、高明抗爽の才、宏博絕麗

の學を以て、題に隨つて形を賦し、一に依傍を空うし、李何諸子の外に於て、拔戟自ら一隊をなすと、同時に、亳州の人薛惠、字を君采といふものあり。稍や後れて、高叔嗣、華察、皇甫冲あり。この諸人、時俗の少陵を規撫するに對して、韋柳を學び、或は、進んで、三謝の體を仰がむとす、多少の卓見慧思あるものといはざるべからず。

李王一時の弊、滄海橫流の日に方り、その窠臼に陥らず、卓然特立したるを王守仁となす。字は伯安、餘姚の人、實に近世陽明學派の祖なり。守仁は、哲學史上、獨絶の位地を占むるものなれども、文學史上に於て、亦た殆んど相譲らざるものあり。彼も亦た、はじめは李王の徒に從つて學び、時習に染みしものなれども、一旦翻悟して後は、舊套を保持せず、その文、一家の新調を成し、詩も亦た道學に係るものを除いて、蒼勁雄偉、時に觀るべきものあり。

李王の古文辭に反抗して自己の持論を主張せしもの、亦た頗る多し。而して、詩よりも、文に於て愈よ多きを見る。蓋し李王の詩、なほ取るべきも、文章は、もと實用を主とし、その弊の極まるるところ、殆んど、言ふに堪へず、從つて、革新の必要、最も目前に在りたればなり。

その首に居るものは王慎中、字は道思、遵巖と號す、晉江の人、之に次ぐものは、唐順之、

字は應德、荆川と號す、武進の人、遵巖の文を爲るや、はじめ秦漢を主としたりしが、後に歐曾作文の法を得、尤も力を會鞏に得たり、荆之、はじめは之に服せざりしが、すてにして、其說に従ひ、卓然として一家を爲すに至れり。天下之を並稱して王唐といふ。

王唐に嗣いで、唐宋諸家を崇重せしものを歸有光となす。字は熙甫、崑山の人、嘉靖十九年、鄉試に擧げらる。然れども第せずして止み、嘉定に居り、亭を江上に起して、書を讀み、學を講ず、その徒、常に數百人、稱して震川先生といふ。十四年、六十にして、始めて進士となり、長興知縣を授けられ、古しへの教化を用ひて治を爲す。隆慶四年、大學士高拱、趙貞吉、有光を知り、引いて南學大僕寺丞とし、世宗實錄を修めて、官に卒す。年六十六、その古文、經術に本づき、法度謹嚴、太史公の書を好んで、その神理を得たりと稱せらる。時に王世貞、文壇の牛耳を執り、大に聲望あり、有光之を觚排し、目して妄庸臣子となす。世貞大に憾み、翻つて、又有光を評して、秋潦の地に在るが如く、時に汪洋たれども、一瀉のみといへり。すてにして心折け、深く之に服し、有光の歿後、その贊を作つて云ふ、千載有公、繼韓歐陽、余豈異趨、久而自傷と。蓋し歸川は、明代古文の中堅、太だ雅正なれども、その失枯淡なるに在り。

次に詩に於けるや、徐渭は、李長吉の鬼體を以て、之を變ぜむとし、湯顯祖は、范陸體を

以て之を革めむとし、その他王百穀王承父屠少卿の輩、皆亦た此に志あり。就中、渭は、一代の奇才、詩文書畫、ともに絶妙、狷性遂に狂を以て死するに至る。一部の青藤居士集、鬼氣人を襲ふを覺ゆる、豈に其故なしとせむや。然れども、三袁兄弟と鍾譚とは、この前後に在りて、殊に横行濶歩を極め、天下殆んど敵なからむとす。その人、必ずしも、才學あるに非ず、時勢亦た自ら然るのみ。

(一〇) 公安派と竟陵體

袁氏兄弟三人、伯は宗道、中は宏道、季は中道、公安の人。宗道字は伯修、萬曆十四年の進士、卒後禮部尙書を贈らる。宏道字は無學、萬曆二十年の進士、官は吏部侍郎に至る。故に世に中郎と稱す。中道、字は小修、萬曆四十四年の進士、官は禮部郎中に至る。伯道の才力、弟に及ばずと雖も、着意最も早く、白蘇二家を主奉し、しかも、その高雅の處を棄て、鄙俚の致を學び、二弟をして之に繼がしむ。宏道才力尤も鋭、時風剽竊を事とするを排し、性靈を主とすべきを論じ、以爲へらく、唐人は自ら唐人の詩あり、必ずしも選體ならず、中晚皆詩あり、必ずしも初盛ならず、歐陽蘇黃、各その詩あり、必ずしも唐人ならず、唐の時、色澤且暮に筆を易ふるもの、如し、而して、今の詩は、皆陳言、觀るに至らず、これ、その性靈に出づると剽竊に出づるとに由つて然るもの、詩は宜しく性靈を主とすべし、と。

その主張、大に取るべし、故に之を唱道するや、一時聞くもの、渙然として神悟し、争つて其門に趨り、七子の偽體をして源涸根滅せしむ。革新の功、誠に偉且つ大なりと謂ふべし。然れども、宏道が機鋒の銳利なるは、却つて枉を矯め正に過ぐるの弊を醸し、狂瞽交も扇して、鄙俚公行し、俳諧調笑の詩を作りて、以て自ら喜ぶに至る。宏道が西湖の詩にいふ、「一日湖上行、一日湖上坐、一日湖上住、一日湖上臥」と、偶見白髮の詩にいふ、「無端見白髮、欲哭翻成笑、自喜笑中意、一笑又一笑」と、滑稽の談、狂言に近く、此の如きもの頗る多し。今その鄙俚の作を削除して、數句を抄せむに、「一洲魚子市、千樹木奴郷、沙平晴獻雪、樹老夜屯風、邊秋自古無、中下、朝論于今有是非」といへるの類は、稍や意を用ひたるものなるべし。然れども、格調甚だ低し、宏道にして、猶ほ且つ然り。况んや、その之に雷同附從せる諸家の詩、觀るに足らざるは、推して知るべきのみ。蓋し當時に在りて、嘉靖七子の偽體を非とし、以て天下の詩風を革新せむことに務めたるものは、唯だ袁氏の兄弟のみに非ず、前述の如く、徐渭、湯顯祖以下、各その師とするところを以て、之を變ぜむと欲せしも、寡は衆に敵せず、遂に皆その志を酬ゆる能はずして、已みしが、獨り袁氏の兄弟に至りては、能く謂ゆる白蘇を以て、一たび唱へて、容易に之を變じ、天下の耳目を聳動せしむ、亦た才子なるかな。

公安の詩體は、鄙俚淺俗、もとより取るに足らざれども、しかも性靈に出づ、之を竟陵の鍾惺及び譚元春が首唱せしところの竟陵派の僻澁なるに比すれば、その流毒猶ほ少し。鍾惺、字は伯敬、萬曆三十八年、進士に擧げられ、行人に除し、工部主事に昇り、禮部主事に改め、郎中に進み、福建の提學僉事に遷る。少にして才氣を負ひ、名、夙に公車の間に聞こゆ。譚元春、字は友夏、天啓七年、郷に擧げらる。その才力は鍾よりも薄く、學殖尤も淺し。蓋し鍾惺は才子なり、夙に袁氏の兄弟が淺率の調を以て七子の弊を矯めしを見て、心に之を羨み、別に手眼を出さむことを思へり。故にその進士に第して、漸く志を得るに及びてや、首として之を唱ふ。然れども、その身、仕途に在るが故に、湖海の聲氣、甚だ廣からず。元春の之に和するに及び、閩中の禁一年、先づ心を降して相従ひ、吳中の張澤華、淑等も、亦た聲を聞いて遙に相應せり。然る後、海内の詩を稱するもの、皆靡然として、之に従ひ一言を奉じて準的と爲さざるなく、遂に其詩を稱して鍾譚體といふ。鍾譚體の意義は浮薄なり、詞旨は晦蒙なり、俚率なり、僻澁なり、しかも、その徒は自ら清真幽峭にして古人に駕せりとなし、名を一時に取り、毒を天下に流し、淫浸三十年、滔々として返らず、而して國運之に従つて愈よ危し。

(一一) 明末の諸家

公安竟陵の世に行れし前後より、明の滅亡に至るまで、如上流派の外に立ち、超然一家を爲せしもの、その人亦た乏しからず、たとひ、名聲相若かざるも、持論の正、尤も稱するに足る。

萬曆の末、高攀龍あり、字は雲從、無錫の人、官、都察院左都御史に至り、逆閹に忤ふに坐し、籍を削られ、水に赴いて死す。後、太子少保、兵部尙書を贈り、諡して忠憲といふ。その友、歸子慕、字は季思、崑山の人、有光の少子、萬曆十九年、郷に擧げられしも、再試して第せざりしに因り、郷里に屏跡し、性命の學を講じて、身を終ふ。二人の作、陶淵明を學び、その神髓を得たるに近く、明代に在りては、絃外の希音なり。次に程嘉燧は、娟秀にして塵なく、鄭琰は、燕趙悲歌の聲ありといはる。之と前後して、區大相、鄭明選、李流芳、徐燾、及び弟、謝肇淛、曹學佺等、皆名あり。

陳子龍、字は人中、又臥子といふ、青浦の人、崇禎十年の進士、巡撫左光先の命を以て許都を撃ち、功を以て兵部給事中に擢んでられ、後、清軍に捕へられ、自ら水に赴いて死す。年四十。乾隆四十一年、諡して忠裕といふ。人と爲り、慷慨激烈、大節傳ふべく、而して斯文に於ける功蹟、亦た録すべし。蓋し、公安、竟陵の偽體、一たび勢熾を逞うしてより、一時異を好むもの、踵を接して出づること、猶ほ日輪の暎に就いて、鷗子、鷓母の四野に群

飛するが如し、子龍ひとり此時に頓起し、之を引挽し、以て大雅の正に廻らし、む、孰れか復た之を稱して功に非ずといはむ。唯だ其詩を論ずるの宗旨、七子を以て歸と爲すが故に、後人、或は王李を痛貶するの餘に於て、敢て矢を子龍に集むといへども、その集に就いて之を觀るに、襟度宏邁、天骨開張、國變以後の作に至りては、激昂沈着、李王亦た當に後に瞠若たるべし。而して、諸體皆古調を鑄鎔し、神理自ら存し、七律に於て尤も其長を見る。九龍移帳春無草、萬馬窺邊夜有霜、三市銅駝愁夜月、五陵石馬泣秋風、南浮灘水啼猿滿、北望君山落雁多、隋苑樓臺迷曉霧、吳宮花月送春潮、簿書衡石皆秦使、封事飛霜半楚囚、周室保監分陝廓、漢家庭績念宣房、左徒舊宅猶蘭圃、中散荒園尙竹林、四塞山河歸漢闕、二陵風雨送秦師、黃巾連戶著、白骨少人收、諸侯悲睨首、耆舊失隆中、浮雲生采石、春色斷蕪城、牙橋淮雨暗、玉管楚聲多、雪積黃河岸、風高青塚沙、といへるが如きは、その意格を見るべく、古體に在りては、嘔靈雜詩、平陵東、小車行、寄黃石齋先生等の諸篇、殊に誦すべし。これ、明代掉尾の一大作家をなす。

同時に王翊、鄭露、黎遂珠、劉孔和等あれども、固より相若かず。錢謙益、吳偉業に至りては、すでに清初に及ぶ。その他、有明一代、釋道閨秀の作家は、一々擧げず、千羊の皮多しと雖も、遂に取るに足らざればなり。

(一一) 湯顯祖

元の一代を通じて、其盛を誇りし傳奇は、明に入りて、なほ觀るべきものありき。沈青門、陳大聲、固より稱すべきも、その最も傳ふべきは、實に一人の湯顯祖に在り。顯祖、字は義仍、一字は若士、臨川の人、少にして善く文を屬するを以て名あり。張居正、その子の及第を欲し、海内の名士を羅す、ひとり顯祖謝して、往かず。萬曆十一年、はじめて進士の第に上り、南京太常博士を授けられ、次いで、禮部主事に遷る。十八年、星變の際、上書して徐に諷せられ、遂昌に遷され、その縣に知たり。その後、官を奪はれ、家居二十年にして卒す。顯祖は、李王末流横溢の時に方り、宋濂を宗として、歸震川とともに、その排擊に従事し、傍ら詞曲に及べり。傳ふるものは云ふ、その居るところの玉茗堂、文史狼藉、雞豚圈雜、沓す。而して、若士その間に詠歌し、俯仰自得せり、と。蓋し慷慨氣節の士、その人す、てに高く、固より尋常戲曲作者の倫に非ざるを知るべし。

顯祖曠世の才、詩は范陸を宗とし、文は韓蘇に本づき、著すところ、玉茗堂集あり。朱竹垞曰く、李王の興つてより、霧雪克塞、義仍穴を其間に穿ち、力めて解駁をなし、變じて香山、眉山に之く、自ら云ふ、詩三變して、力窮まると、その通懷、學を嗜み、自ら以て能事となさざる、こと此の如し、と。然れども、顯祖を重からしむる者は、實に傳奇の一體に在り、そ

の作、凡そ四種、皆夢を説く、曰く牡丹亭、曰く邯鄲夢、曰く南柯記、曰く紫釵記、謂ゆる玉茗堂四夢、即ち是れ、牡丹亭は、佳人夢に秀才と遇ひ、邯鄲夢は、黄梁の一炊を譜し、南柯記は、夢中蟻國に遊び、紫釵記は、夢に俠者の助を借る、四種一夢、試に、作者が自ら之を解するを見るに、牡丹亭にはいふ、夢中の情、何を必ずしも眞に、非ざらむと、紫釵記にはいふ、人生の榮困生死、何を常あらむ、歡苦を爲して足らざれば如何と、邯鄲夢にはいふ、桑滄岸谷も亦た常醒の物に非ず、概ね夢の如し、醒復た何を存せむやと、南柯記にはいふ、人は六道の中に處る、嘔笑失すべからず、夢了れば覺となり、情了れば佛と爲る、境に廣狹あり、力に強劣あるのみと、作者の心事、亦た哀むべし、その一生の大節、權貴に附かず、執政の爲に抑へられて、一官潦倒、里居二十年、幽憤の極、猛然として覺悟し、古今四海を視ること、一枕に同じく、すてに夢に在つて夢を云ふ、他に何をか計らむ、唯だ胸中に鬱積せる情塵を洗滌し、烏有に消遣するに於て、意を達し筆を執れるのみ、玉茗堂四夢の中、邯鄲夢と紫釵記と南柯記とは、必ずしも劣作には非ざれども、その脚色詞彩より論ずれば、その牡丹亭還魂記に及ばざること遠き甚し、杜麗娘といふもの、夢中に柳生を見情禁ずる能はず、自ら眞を寫し、日夕之に對し、懊惱の極、憂鬱之餘、終に病んで死し、梅花道院に葬る、然れども、夢中の人は、心上一片の幻影に非ずして、ま

とに現實の人なりき、偶々道院に宿するに因つて、夢に鬼と通ず、奇幻の極、こゝに於て麗娘の鬼は、閻羅廳前、回生を許されて、復た蘇す、而して、柳生夢梅は、京に赴いて、狀元となれり、たゞ麗娘の父は、軍に淮陽に在り、其女の蘇生を信ぜず、柳生爲に奇禍を買ふ、しかも、その末に於ては、人天相合し、夫妻共棲の樂を得、未了の因縁、忽ち全し、牡丹亭の結構、略ぼ此の如く、怪誕荒唐を極むと雖も、實は情の力を形化せむと試みしものに外ならず、この點に於ては、はるかに他を抜いて、一頭地を放出するものあり、顯祖、かつて人の講學を勸むるに答へて曰く、諸公講ずるところのものは、性、僕の言ふところのものは、情なりと、又かつて曰く、理の必ず無きところ、情の或は有るところに非ざるを知らむやと、又曰く、生々死々、情の爲にす、多情の極は生きむと欲するも得ず、死せむと欲するも得ず、以て生くべくして死し、以て死すべくして生く、如竟するに、青娥を抛却し、厭厭一死するも、亦た情の至れるものには非ずと、これ實に作者が平生情塊に對する觀察の主眼なれば、牡丹亭還魂記を作るに於ても、亦た三たび意を此に致せるもの、如し、故に曰く、情の力は、能く夢中の戀の爲にも死せしめ、死して復た蘇せしめ、蘇して現實に夫妻たらしむべしと、一個情の力を寫せしもの、その趣向は、幻なり奇なりと雖も、奇必ずしも奇に非ず、幻必ずしも幻に非ず、但し之を一部の演劇として、戲場の上ぼす

に於ては、或は怪誕荒唐に近くして、看客の心を動かすこと、未だ西廂琵琶の如くならざるべし。然れども、立案の主意より、之を見れば、百代不朽の傑作として、特に推稱するに足らむ。

世、或は牡丹亭の作を以て、曇陽子を刺るものとなす。然れども、確證なきもの、固より信ずべからず。若し夫れ、その詞章に至りては、悱惻芳芬、兼ね至り、有情の人をして、容易に銷魂せしむ。當時婁江の女子、愈二嬢、酷だ其詞を嗜み、斷腸して死す。顯祖詩を作つて曰く、冷雨幽窓不可聽、挑燈閒讀牡丹亭、人間更有癡于我、豈獨傷心是小青と。論者これを西廂に配し、その遜色なきを言ふもの、洵に其故なしとせず。李笠翁曰く、湯若士は明の才人なり、詩文尺牘、儘を觀るべきものあり、而して、その人口に膾炙するは、尺牘詩文に在らずして、還魂の一劇に在り。若士をして、還魂を草せざらしめば、當日の若士、すでに有りと雖も、無きが如く、况んや、後人をや、是れ若士の傳はる、還魂之を傳ふるなりと。湯顯祖は、誠に奇傑の士なり、その邯鄲夢に題する一節にいふ、士、まさに窮苦無聊なれば、倏然として、輿に時に出て、は將、入つては、相たるの事を語り、未だ嘗て憮然として、大息し、一た歎之に遇ふことを、庶幾せずむば、あらずと、これに由つて之を推せば、顯

祖は、その半生、天下を以て己の任と爲したるや、疑なし。猶ほ之を徐聞に於ける講學明道、遂昌に於ける滅虎縱囚に徴するに、或は經師たり、或は循吏たり、然れども、前後、執政の爲に壓抑せられ、終生、轆轤不遇にして、遂に郷里に窮死す。政治家としての失敗者といふべし。又かつて何李の徒が唱導せる古文辭を排撃せり、然れども、成功せざりき、詩賦文章家としての失敗者といふべし。詩賦文章に失敗し、政治に失敗せる湯顯祖は、ひとり詞曲の名家として成功し、千古に喧稱せらる。嗟乎、これ亦た以て瞑すべし。

清の蔣藏園深く顯祖の人と爲りを慕ひ、玉茗堂集中に載する諸種の情事を採取補綴し、一部の傳奇を作り、題して臨川夢といひ、篇首に序して曰く、臨川先生は、生を以て夢となし、死を以て醒となす、余は生を以て死となし、醒を以て夢となす。こゝに於て、先生すでに醒むるの身を以て、復た既に死するの夢に入れ、且つ四夢中の人をして、先生と夢外の身に周旋せしむ、亦た荒唐樂しからずや、と。顯祖の好知己なるかな。

明の一代を通じて、一代の才人、詩詞の餘技を以て、指を雜劇傳奇に梁むるもの、亦た決して少からず。周憲王は、心を翰墨に留め、曲を譜すること、尤も工に、その製するところの誠齋樂府、音律諧美、一時に傳誦す。李空同は、齊唱憲王新樂府、金梁橋外月如霜といひ、牛左史は、唱徹憲王新樂府、不知明月下樊樓といふ、以て其盛を想見すべし。就中、香囊

怨の一劇、最も世に稱せらる。康海は、李何七子の中に列し、詩を以て名あり。その李夢陽を救ふに因つて、落職家居するや、聲伎を以て、自ら娛み、間ま樂府を作り、青衣をして、之を管絃に被らしむ、著あるところ、中山狼あり。梁辰魚は、崑山の人、詞曲を善くし、撰するところの江東白苧、時人に妙絶す。時に、邑人魏良輔は、始めて、弋陽海鹽の故調を變じて、崑腔となすや、辰魚、浣紗記を填して之に付す。王元美の詩に、吳昌白面冶遊記、爭唱梁郎艷雪詞といふもの、即ち是れなり。崑曲、これより起る。同時に、陸九疇、鄭思笠、包郎郎、戴梅川の輩あり、更迭唱和、清詞艷曲、人間に流播す。その他、楊升菴に、洞天玄記あり、王漢陂に遊春記あり、胡秋宇に、金盒記あり、陳石亭に、四頭記あり、之を合刻して、四太史雜劇といふ。なほ、徐渭に、漁陽弄、翠鄉夢、雌木蘭、女狀元等あり、汪南溟に、高唐夢、五湖遊、遠山戲、洛水悲等あり、盛明雜劇、收むるところ、無慮六十種。又別に、梨園雅調六十種、曲傳奇四十種等あり、主として、明人の傳奇を集む。なほ、明末に至りては、阮大鍼の石巢傳奇、即ち春燈謎、燕子箋等あり。大鍼その人は、奸邪の賊臣に過ぎざるも、その作頗る稱すべきものあり。こゝに於てか、知るべし。明の雜劇傳奇に於けるや、これを元に承けて、末流漸く淪没すと雖も、殘山剩水なほ觀るべきものあり、世人たゞ元曲とのみいひて、全く之を閑却するは、斷じて偏見に外ならざることとを。

(一三) 西遊記と金瓶梅

明史藝文志載するところの書目に就いて、之を見るに、二百七十餘年間に群出せる述作の中、小説家類に屬するものは、實に一百二十七部、三千三百七卷といふ。然れども、その多數は、例に因つて、雜談小話を集めし隨筆雜記の類にして、玉池談屑の如き、留青日札の如き、西湖志餘の如き、瑯琊代醉篇の如き、五雜俎の如き、たとひ著名なるも、今こゝに論ずるの價值を認めず。明初瞿宗吉の剪燈新話の如き、久しく我に喧傳し、又その續として、李禎昌の剪燈餘話、遙青閣纂錄の剪燈因話等あれども、要するに美文の一種のみ。然れども、鉅作として取るべきもの、西遊記と金瓶梅とあり、これ實に元の水滸三國と並稱して、四大小説の目あるものなり。而して、西遊記は、ひとり明代文學を重からしむるのみならず、ツラン人種の産出に係る譬喩譚の最も偉大にして、且つ最も奇巧を極めし絶品として、千古に不朽なるべし。

西遊記の作者、今考ふべからず。或は邱處機の作となせども、もとより確證なし。邱處機は、長春子と號し、その傳は、元史に見え、太祖成吉思汗の招請に應じ、かつて、崑崙より、四載を経て雪山に達せしことあり、その行を紀せしものを又西遊記といふによりて、後人相混せしに非ざるか。若し假りに論者の言を許容せば、その時、宋末に屬し、現存せ

る支那小説中、最古の物に屬して、水滸傳に先つべけれども、元人の雜劇中、水滸傳を譜するもの、頗る多きに反して、一も之なきが如きは、殆んど解すべからざるところ、故に予は、近人多數の説に従ひ、しばらく、之を明人に歸せむとす。その書、全篇一百回、唐僧玄奘、天竺に赴いて、經を求むるの譚を假り、孫悟空、猪八戒、沙悟淨の三怪を以て、之に配し、巧に人類の性情を描破し、煩惱を去り、解脱を求むるの方便を暗示し、幽玄なる佛理を解釋せり。周流十四年、大小八十一難、三徒弟の通力を以て、群魔を攝伏し、やがて五聖正果し、靈鷲峯頭、彩霞簇り、極樂世界、祥雲集り、大衆歸依し、合掌して拜をなすに終る。大抵支那の小説は、一定の類型あり、その範圍、甚だ狭く、佳人才子の奇遇に非ざれば、忠臣烈士の艱苦、英雄豪傑に非ざれば、兇賊騙盜のみ、ひとり、本書に至りては、眞然として撰を異にし、奇想天外より落つるに似たるものあり、加ふるに、その事象の起伏變化、殆んど窮極するところを知らざるに至りては、作者の才思、むしろ驚くべし。顧みれば、六朝以後、怪を談じ、鬼を説くもの、漸く多く、明清に至りて、その書、亦た少からざるも、多くは、是れ狐狸の妖、たゞ其事の奇なるを取るのみ、遂に本書の如く一貫せる思想を包含して、偉大なる局面を構成せしものあらず。抑も、漢族の特質は、屢ば論せしが如く、あくまで、實際的にして、想像に短なれども、往々にして、却つて常軌を逸し、荒怪奇幻を極むるは、

盤古の神話に於ても、その趨向を認むべく、たとへば、獄中の囚人が、その放免以後を豫想して、到底常人の臆度すべからざる空中の樓閣を結成するが如し。しかも、その全然大陸的なるは、争ふべからざる事實にして、亦た風土の影響を認むるに足る。或は、元代以後に於ける、海外交通の顯著なる事實に因り、外國文學の影響を臆測すれども、未必の疑問、こゝに贅せず。

論者、或は西遊記を以て、パンヤンの天路歷程に比し、又その奇幻を以て、北歐の古代神話に比すれども、東洋的特色の存在は、斷じて閑却すべからず。なほ、本書の結局的な想は、主として佛經の譬喩より出で、之を展拓し、變化したるものなれども、道致に關する事實、亦た頗る多く、兩漢時代の小説、即ち神異經、十洲記等の神仙譚が、併せて、その資料となりしは、特に注意すべく、又その當時の地理的知識が、盡く其中に包括せらるゝは、斷じて、疑ふべき餘地を存せず。故に、洪北江は曰く、小説家、言ふところ、亦た皆本づくところあり、西遊記の雷音寺、火燄山の如き、皆、吐魯番道中に在り、余、伊犁に遣戍せし日、かつて、之を過ぎぬと。

西遊記、世に傳ふるもの二本あり、一は、其文頗る多く、形容甚だ過ぎしものにして、何人の手に出でしかを知らず。一は、通行本にして、悟一子の評を加へしものに係り、名づ

けて眞詮といふ。その評は、文辭を評し、意匠結構を論じたるに非ずして、一章一句の意義を解説したるもの、その往々にして曲解に流れ、附會に陥りしは、たしかに其弊なり。と雖も、幽情微旨を闡明するの功、亦た没すべからず、その業、決して、徒爾ならざるなり。水滸三國の諸書、續撰あると同じく、本書にも、亦た數種あり。その中、稱すべきものを、後西遊記となす。唐の憲宗、大顛をして西天に至り、佛經の眞解を求めしむるを主とし、配するに、悟空の子孫小聖、八戒の子猪守拙、悟淨の子沙致和を以てす。而して、その途中、妖を除き、怪を破るの事、亦た略ぼ相肖たり。と雖も、條理貫透、旨意頗る明白、且つ往々にして、斬新なる意匠を加ふ。之を要するに、美を前に媿する能はず。と雖も、嬉笑怒罵、皆文章をなせるものにして、少くとも能品たるべし。又續西遊記あり、三藏師弟、西天より歸る途中、數多の艱難に遭遇するを記す。命意すでに拙、文辭極めて鬱齋まことに狗尾なり。他に東遊記、南遊記、北遊記の類あれども、宜しく噴飯すべきのみ。

金瓶梅も、亦た作者を詳にせず。康熙乙亥、敬齋謝頤、これに序して、王鳳洲、世貞門人の作といひ、又鳳洲の手集ともいへり。要するに、明の中葉以後の作なるべく、或は嘉靖中、嚴嵩相となりて、暴虐を恣にせしを目撃し、これを宋の蔡京に擬して、細に其姦を寫し出せしものといふ。然れども、主題は、こゝに在らずして、全篇一百回、宋の巨商西門啓が淫樂蕩佚の話説に係り、その九友、應伯爵等と、玉星廟に義を結べるを開場とし、この時武松が景陽岡に虎を搏ちたる風聞あり。次に、潘金蓮が西門啓と通じ、王婆と謀つて、その夫武植を毒殺するに至る。兩三回は、全く水滸傳の事實を取り、その文を易へたるところあり。畢竟、水滸傳中、西門啓、潘金蓮が好通の情事を父母として、胚胎したるものにして、武松の復讐は、八十七回に在り、但し、西門啓は、これより先、胡製の房藥を過飲して、遂に其身を喪へること、七十七回に見え、即ち武植を鳩殺せし惡報といへり。全篇の結構、頗る複雑にして、巧に個々の性格を描出するも、往々にして、淫褻狂猥に流れ、後世の淫書、覺後禪、痴婆子傳等と、其科を同じうするものあり。張竹坡の評論は、金聖嘆の水滸傳批評に倣ひしものにして、勸懲に附會して、作者を辯護するを勉め、その讀法に於て「金瓶梅は、人を是れ誤るものに非ず、人々自ら誤るのみ。夫れ人に賊を説くものは、もと戒を示すなり。然ども、聞くもの、これに因つて遂に賊を做すときは、これ説くもの、過ならず。聞くもの自ら賊を做すのみ」と。然れども、この書、さながら、宣淫導欲に意あつて、ことさらに然るが如く、到底、君臣父子の間には、公然讀むべからざるもの多く、たとひ、その結構は、較や稱すべしとするも、その文章に至りては、斷じて、後世の覺後禪に及ばず、しかも、虛名却つて、其上に在り、これ亦た理の解すべからざるところなり。この書、彼

等に在りては、現に禁本に屬するを以て、往々にして、他の名を冠し、私に刊行して世に布く、勸善第一新書といひ、第一奇書鍾情傳といふが如き、即ち是れなり。

この書の續篇として見るべきものを三世教隔簾花影となす。卷頭に作者の名號を署せざれば、何人の作たるを審かにせず。但だ四橋居士の序あるによりて、清初才人の筆たるを知るのみ。全篇四十八回、西門啓の死後、奸邪奢侈の惡報、その妻子に輪廻して、百巧千磨の艱苦を喫するを敘し、最後に、解脱の一篇を以て結局となす。蓋し作者の意、前傳一百回、唯だ西門啓が一世の荒淫驕侈を鋪張し、因果應報の旨、なほ淺きに慊らず、故にこの書に於て、彼が生前の爲體、死後の業果を詳にし、積不善の家には必ず餘殃あるの天理を實現せしめむとす。但し、西門啓を南宮吉となし、その嫡妻吳月娘を楚雲娘となし、その子孝哥を慧哥となし、その僕玳安を秦定となす等、他に其類多し。然れども、前傳の荒淫姦作を箴め、専ら因果の理を示すに急なるや、一部の趣向は、略ぼ存するも、時に拘摯檢束に失するを免れず。その文、亦た華ならず、巧ならず、もと止むを得ざるに出づと雖も、聊か作者の爲に憾なき能はざるなり。

その他、明人の著作、少からずと雖も、我が邦に傳へて現存するものは、極めて寥々たるを以て、すべて省略に従ふことゝなさむ。

第三 清代文學

(一) 考證學風の起原及び影響

今の清朝は、滿洲に居住せしツングス族の一派にして、その起原、甚だ遠く、長白發祥の始祖は、當に遼金の末造に在るべし。而して、太祖努爾哈赤に至りて、はじめて、中原を窺ふの志あり、聖祖に至りて、遂に支那本部を并せ、現代帝國の基礎をなせり。

天下統一の前に於ける滿人特有の文明は、殆んど言ふに足らず。太祖の時、蒙古文を以て、滿洲の語音に合せて、滿文を創制し、世祖に及び、天下に詔して遺書を購求し、三國演義を翻譯して、將士に頒ちしが如き、特に彰著なる事實なり。さばれ、文華は居、然として、漢族の間に存在し、滿人は之を保護し、助長せしめしといふに過ぎず。聖祖在位六十年、性、學を好み、はじめ七八の時、讀書過勞の故を以て、血を略くに至りしも、肯て少らくも休せず、晩年に至るまで、兀兀書を讀み、名家の手卷を臨摹すること一萬餘、寺廟の扁額を寫すこと一千餘、上は天文、地理、音樂、算數、刑律、農政より、下は射御、醫藥、滿蒙西域外洋の文書字母に至るまで、殆んど一として通ぜざるはなく、復た一として新法を創立して別に津途を啓かざるはなく、後來の高才絕藝、終に能く其範圍を出づるなし。

今その逸事の二を挙げむに、漢の武帝が柏梁臺の唱和に倣ひ、群臣を大和殿上に集めて、置酒高會の間に、自ら、麗日和風被萬方の句を首唱し、諸臣をして逐次に之に聯ねしめて九十三韻の長篇を成せしが如き、毛奇齡、尤西堂等の著書に御製の序文或は題詞を賜ひしが如き、時に諸學士を内庭に召し、文酒交歡、沈醉するものあれば、内官に命じて、扶擁して去らしめしが如き、その文士を禮遇するの隆なるを見るべし、又遺書を求め、英俊を羅し、勉めて圖書筆研の間に、牢蓋し、之をして不善を企圖すること無からしめむとするや、大に學者を召集して、編者の業に従事せしめ、明史、佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典の類を纂述し、ともに百世の寶典として、文教を裨益せしこと、固より少からず、そも聖祖興學の意は、明祖の故轍を學びし政治的方策に外ならずと雖も、その性情の寛宏と才氣の高朗とは、大に明祖と同じからず、故を以て、學者亦た能く墳典の間に起臥して、其業を勵み、一生を斷送するを得たり、而して、上の好むところ、下之より甚しきはなく、民間又知名の士多く、詩客文人、紛として雲の如し、康熙の後は、雍正十三年にして終り、之に次いで高宗乾隆の御宇、六十年の久しきに亘り、聖祖の遺志を紹ぎ、大に文事を獎勵し、古今圖書集成、大清會典、大清一統志、四庫全書總目、十八省通志等の撰あり、清朝の奎運を言ふ者、必ず康熙、乾隆を並稱するは、即ち此故なり、乾隆の後を嘉慶とな

し、二十五年にして道光となり、又三十年にして咸豐となり、十一年にして同治となり、十三年にして光緒となる、光緒は今の年號にして、今茲即ち我が明治四十年は、その三十三年に當れり、蓋し嘉慶より以後、世運漸く振はず、歐洲諸強國との交渉、愈々頻繁にして、内憂外患、交も至り、長髮賊に次いで鴉片戰爭あり、英佛同盟軍の攻撃あり、最近の事變をいへば、日清戰爭あり、燕京の攻圍あり、日露戰爭あり、わが邦もとより輔車唇齒の關係上、之を扶植し擁護するに專なるも、諸外邦、之に垂涎して、その衰弱に乗ずるや、邊海の要嶽、多くは諸外國の占領に歸し、内地に於ける鐵道布設權、鑛山採掘權等、亦た皆之を他に讓與し、四百餘州の曠土を擧げて列國爭強の舞臺に供す、國力の萎靡衰頹、殆んど言ふに堪へず、たとひ、黃禍を叫ぶの聲、世界の各處に反響すと雖も、睡眠の中に葬られし老帝國の覺醒は、未だ何の日に在るかを知らず、顧みれば、東亞に於て、獨創の文明を創造し、四千年間の治化を誇りし漢族の末路、甚だ憐むべく、國事日に多端、文物典章、亦た之を修治するの暇なきを奈何ともするなきなり。

清朝の學風は、考證に在り、而して、之を促進せし理因は、一にして止まらずと雖も、之を汎説すれば、宋儒性理學說の反動にして、兼ねて、明の中葉以後に於ける復古の氣運やがて學問上に、その立脚地を定めしものなり、蓋し、宋儒の研究は、主として、新生面を

開くに在り、故を以て、漢唐の授受に係る訓詁を重んぜず、その注釋の如き、古しへの名物度数、果して如何なりしやに注意することなく、各見るところに因りて説を立て、甚しきは、想像臆斷を以て、古典を解するなき能はざるに至れり。こゝに於て、清初の學者は、一般に、その空疎粗漏を厭ひ、實事求是、博涉清該、考證を以て、儒學の眞義を解釋せしむと欲したりき。之を要するに、清朝の考證は、漢唐二學の特有なる註釋的研究の程度及び範圍の一層に擴張せられ、進歩したる者に過ぎず。故に、予は時代の遞降に従つて立論し、之を明代復古の氣運増進の結果となすの頗る至當なるを信ぜずむばあらず。漢唐に於て、獨立的思索家なかりしが如く、清代に於ても、亦た然り。顧炎武、閻若璩の如きは、才學ともに備はり、精力非凡、しかも、その一生を擧げて、書齋的研鑽に従事す、當代一般の時代精神及び考證學家の態度、亦た容易に推知すべきのみ。

學風の考證に傾きたる弊は、詩文にも影響し、その作品は、之を一概して、精緻細巧の姿趣を曲盡せり。これ一は、明季の文學、怪詭艱澁に失せしより、往いて又變じ、變じて又正に歸りしものならむと雖も、その根柢は、一般時勢の好尚に在ること、言を俟たず、清の詩文は、漢代の辭賦と同じく、到底文字の技術、故に駢體對仗に長ずるもの多し。こゝに於てか、刻下の世、考證の學、漸く散漫に趁くと同時に、文界の生氣、頓に銷盡し、頽唐腐

爛、殊に甚しく、復た觀るべきものなきに至れり。

漢族が異種族の下に征服され、之に屈從したるは、元清兩代なり。然れども、これ國勢上及び政治上に限られたるものにして、思想上、文學上に於ては、長しへに、その勢力を失はず。たとひ、當朝の初に當り、漢族の故習を改め、滿洲の風俗を流布せしめむとせし計畫ありしとするも、四千年の長歴史と四億萬の人口とは、非常の重量を有するものにして、長年月の間、漸を以て之を行はざる限り、その基礎は、決して搖動するものに非ず。こゝに於てか、滿洲の朝廷は、却つて、その祖國の言語風俗文字を棄て、遂に戰敗國化するに至り、今日衰敗の根本的大原因を爲せり。試に之を史に徵するに、太宗の時、早くして其子弟を督勵し、漢字の書籍を修習せしめたるが故に、康熙、乾隆の際に至りては、滿洲人の滿蒙漢土の文義に曉通し、筆墨の間に於て一時に名を成すもの、漸く輩出するに至りしと雖も、之を本來漢人の手に成れる詞章に比すれば、新舊彼我の勢力、自ら一大懸隔を生じ、同日に論ずべきもの、甚だ少し、隨つて清朝文學の光華は、一に漢人に依つて發揚せられたるものといふべし。若し夫れ、漢族將來人文の進歩を圖らむと欲せば、外國思想を注入し、獨善自尊の陋習を去るを第一とす。機械的打撃と精神的刺激と、兩つながら、之を用ひざるべからず。故を以て、活眼達識の士、近ごろ、又之を言ふも

のあり、張之洞の如き、康梁二氏の如き、たとひ未だ全く超出せずと雖も、亦た漢族中の先覺者たるを失はざるものなり。嗚呼、老帝國の文運、振はざること久しく、その能くし大厦を一木に支へ、頽瀾を既倒に廻し、再び先秦唐宋の盛を現はし、予輩の研鑽を續がむるもの、將に何の日に在らむとするか。しかも、殷鑒遠からず、前車の覆轍、後車之を戒む。予輩は、翻つて輕佻、浮薄、たゞ新を逐うて移り、未だ十分に國民的自覺を爲すに至らざる自國文學の發達に就いて、幾分憂慮の念なき能はざるなり。

(二) 清初の文家

清初に在りて詩文家をなすもの、大抵明代の遺民、詩には錢吳あり、文には侯魏あり、前代の餘芳を傳へて、新朝の奎運を發揚す。その功、亦た偉なりといふべし。今はじめに、文家を叙し、次いで、詩客に及ばむとす。

侯方域、字は朝宗、雪苑と號す、歸德の人、明の戶部尙書侯恂が子なり、幼にして京師に從ひ、中朝の事を習知す。時に阮大鍼といふものあり、故の逆閹魏忠賢が義子なるを以て、金陵に屏居し、清議の士陳定生及び吳應箕等の擯斥するところと爲る。大鍼愧ち且つ悲るも、如何とすべきなく、方域が相善きを知り、私に之に依りて、交を二人に結ばむと欲し、その客に屬し、來つて交を求む。方域これを覺り、謝して通ぜず。大鍼遂に三人を

怨む。故に後日その志を得るや、首として獄を起し、將に之に報むむとす。方域、夜、走つて楊子江を渡り、高傑の軍に投じて僅に免る。明の亡ぶるに及び、父を奉じて商邱に歸り、順治十一年に至つて卒す。時に年三十七。その著、壯悔堂集あり。方域、豪俊にして英雄の風あり。その文は、韓柳を宗とし、詩は杜甫を追ひ、ともに牢騷の感慨を極む。而して、長ずるところは、文に在り。魏禧、これを稱して、目睛瞬するに及ばずといへり。固より、多少の瑕疵なきに非ずと雖も、才氣縱橫、深厚は未だしきも、疎暢はあり。徐鳳輝曰く、方域、史遷を步驟し、而して、才以て之を達するに足れり。故に行文、矯變不測、健鶻空を擊ち、鯨魚壑に赴くが如く、之を讀めば、人をして目眩し、魂驚かしむ。と。王阮亭又曰く、近日文を論する、侯朝宗を推尊して第一となす。と。その聲價を推稱するに於て、萬口一異辭なきを知るに足るべし。雪苑の吳下に在るや、か、つて其集を刻せむとし、集中の文、未だ稿を脱せざるものを、一夕に補綴して、時人を驚かせりと傳ふ。その才華の橫溢、想見すべく、之を才子の文といふ、中れり。

魏禧、字は永叔、勺庭と號し、また裕齋といふ。寧都の人、兄弟三人、兄の名は祥、字は善相、弟の名は禮、字は和公、寧都の三魏と稱せられしも、禧尤も著はれ、人呼んで魏叔子といふ。年十一にして諸生となる。甲申の變、愍帝社稷に死するや、號慟し、日に哭して縣庭に

臨み、憤咤して生を欲せず。又曹應鄰と義兵を挙げひとことを謀りしが果さず、諸生の服を棄て、隱居して子弟に教ふ。人と爲り、形幹修頤にして才略を負ひ、理勢を計畫し、成敗を事前に決し、事至つて後驗あるもの十に八九なり。故に流賊熾なるに方りて、承平の久しき、人皆亂を知らず、云ふ寇遠く、猝に及び難し、と。禧獨り憂ふること甚しく、遂に家を移して翠微峰中に住む。彭躬菴、林確齋等、亦た妻子を携へて之に従ふ。これ世に謂ゆる易堂諸子なり。後數年、寧都果して寇を被り、翠微ひとり完し。禧、すでに諸生を謝し力を古文辭に肆にし、喜んで史を讀み、尤も左氏傳及び蘇老泉の文を好む。その文を爲るや、一に議論を主とし、雄傑凌厲にして、忠孝義烈の事、尤も淋漓を極む。年四十にして、始めて出遊し、江を涉り、淮を踰え、吳越に至り、汎く天下の奇士に交らむことを思ふ。明亡びて後、山中に匿れ、髪を剪つて頭陀となり、自ら惡棺を置き、諸子を戒めて曰く、我死せば、此を以て歛せよ。先帝先后、此に視らべて何如。我死するも、成禮あるべからず、と。聖祖即位、中外に詔して、博學鴻詞を擧ぐるに及び、禧も亦た擧中に在り。徵されしも、疾を以て辭す。郡太守縣令、更に督して道に就かしむ。こゝに於て、止むを得ず、疾を昇して、南昌に至り、醫藥に就く。撫軍某、その詐なるを疑ひ、板扉を以て、之を昇して門に至る。禧、桀被頭に蒙り、臥して疾篤しと稱す。すでにして、放ち歸さるに及び、後二年、維揚故人の約

に赴き、舟儀真に至り、暴に心氣を病み、一夕にして卒す。年五十七。その妻、喪を聞き、絶食十三日にして死す。その書魏叔子、世に行はる。叔子の文、雄深雅健、霸氣稜々たるものあり、自ら快利奔放の趣を極む。故に紀曉嵐は、之を以て策士の文となし、程伯垂は、文家の飛將軍となせり。人、往々にして、叙傳は雪苑、議論は叔子といふものあれども、叔子の叙傳、亦た決して輕視すべからず。徐述齋、かつて之を稱して曰く、變化迷離、人を引いて、勝字の裏に入つて行かしむ、實に廬陵に似たり。翹楚といふべきなり、と。然れども、病は奇辭に在り。馮少渠曰く、その文、曲脫の處、能く折なるに在り、然れども、その病、亦た正に此に在り、波折太だ過ぎ、繆戾叢生す、と。

侯魏二家、明の遺臣を以て、文旆を樹て、旗鼓相當る、まことに一代の鉅觀たり、而して雪苑は不幸にして世を早うし、勺庭ひとり長く存し、愈よ老蒼の域に入る。予は雪苑の爲に、聊か嘆惜の念なき能はざるなり。

二家と對峙して、鼎足の勢を爲せるものを汪琬となす。字は茗文、蕘峰と號す。康熙十七年、博學鴻詞に擧げられしとき、試名一等、第十九名たり。次いで、明史編修官となり、史館に入るや、僅に六十日にして史傳を撰すること、一百七十餘篇、遽に病を以て、情を陳べ、告を請ひ、康熙二十九年、年六十七にして卒す。鈍翁類藁あり。その文、法度餘あつて才

未だ足らず、廬陵、震川を以て歸宿となすと雖も、規矩に局從せり。その馴雅溫粹儒者の文と呼ぶると雖も、僅に精鍊明截の趣を得、叙傳に於て稍や其長を見る。然れども、琬は高く自ら標置し、且つ妄に人に許さず、抱負の大、頗る觀るべきものあり。紀曉嵐曰く、琬誣訶を好み、文章を見れば、必ず其瑕を摘す。故に恒に人に滿たず、亦た恒に人に滿たされず。是を以て、交遊その終を善くするもの罕なり。王士正と同年、後乃ち之と相忤ひ、又閻若璩と禮を議して相詬り、皆世の口實となる。士正の詞章、一世に名ありて、他人と角せず、而して與に角するものは、たゞ趙執信と琬とのみ。若璩博洽、また一世に名あり、而して與に角するものは、たゞ顧炎武と琬のみ。琬の勁敵たること、略ぼ見るべし。と、嗚呼、是れ琬の位置を説明して盡せるものに非ずや。

三子と馳聘するに足るもの、廖燕あり、號を柴舟といふ。曲江の人、學問淺薄にして雜駁、議論沈着ならず、格を取る、未だ高からずと雖も、氣を以て勝り、豪宕奇偉、頗る人に可なり、二十七松堂文集、今に世に行はる。

如上の諸人と前後して、王猷定、顧炎武、姜宸英、朱彝尊、邵長蘅等あり。この中、顧炎武は、閻若璩、毛奇齡と並び、考證の學を以て名ありしものにして、朱彝尊は、經史詩文兼達し、王士正と相並び、風騷の主たりしものなり。左に姜邵兩家に就いて略說せむ。

姜宸英、字は西溟、號は湛園、浙江慈溪の人、少にして詩及び古文に巧に、書法に精しく、名九重に達す。聖祖朱彝尊、嚴絕孫と合せて、三布衣となし、兼ねて、古文の作者たるを稱す。その博學鳴詞を徵すや、他の二人、ともに翰林に入る、而して、宸英は預らず。後試に應ずるに及び、主試のもの、争つて宸英を得むと欲す。唯だその疎縱にして、醉後に試場に入り、式に違ふを以て、累りに斥けらる。又かつて謝表の中に於て、點竄堯典舜典の語を用ふ。受卷官、その出所を疑ひ、之を問へば、傲然として答へて曰く、義山の詩、未だ嘗て讀まざるかと、官怒り、遂に之を擯く。これより、連蹇して志を得ず。康熙三十六年、七十を以て禮部に試し、卷、復た格に違ひしも、主試のもの、其名を慕ひ、爲に之を更正して進士と爲す。帝問うて曰く、進呈十卷の中、浙人姜宸英あるか。續學能文、老に至りて倦まず、宜しく一甲に置いて、天下讀書の人を勵ますべし。と、遂に第三人を以て及第を賜ふ。三十八年、順天の鄉試に副官と爲り、同官に欺かれて獄に下り、遽に卒す。王士禎曰く、我、西曹に在り、湛園をして罪に非ざるを以て獄中に死せしむ、慚愧に堪へず。と、その文雅健、北宋人の意あり、而して、叙事に於て、尤も其妙を見る。魏叔子稱して曰く、侯朝宗は肆なれども醇ならず、汪堯峰は醇なれども肆ならず、姜宸英は、肆醇の間に在り。と。

邵長蘅、字は子湘、青門と號す。江蘇武進の人、少にして奇童の稱あり。諸生と爲り、試に

應ずる毎に、必ず高等なりしも、省試に於て第せざりしが故に、斷然舉子の業を棄て、心を六經三史及び唐宋諸大家の文に潜め、融釋貫串して、大に其辭を放にす、論者稱していふ、清朝の布衣、文を以て鳴るもの、侯魏より外、唯だ青門鼎足すべし、と、京に入り、友人に強ひられ、吏部に試するや、宋德宜、その文を得て、驚いて曰く、今の歸震川なり、と、因つて第一に抜き、官を授くれども、就かず、武林湖山の山水を愛し、數ば往遊し、廬を放鶴亭側に結ばむを擬し、また一舫を作り、筆床釣具を載せ、吳越の間に浮家せむと欲す、著すところ、青門集あり、集は、篋稿、旅稿、賸稿の三編より成る、而して、賸稿尤も勝る、卒する時、年六十八、今之を讀むに、長蘅は、立言必ず道に依らむと欲せしもの、如く、措辭頗る磊落にして、平生史學に耽り、文も亦た叙事に長ずといふ。

(三) 錢吳二家

清初の文と同じく、詩も亦た明の遺臣に因つて、その風氣を開けり、而して、その首に居るものを錢謙益となす、謙益は、元の楊鐵崖と同じく、前代の後勁となり、兼ねて、新朝の先聲となりしものなり、但だ貳臣傳中の人物なるを以て、その累を詩に及ぼすものあれども、亦た蔚然として、有數の大家たるを失はざるなり。

錢謙益、字は受之、江南常熟の人、明の萬曆三十八年、進士探花に及第し、編修を授けらる、崇禎元年、禮部侍郎に陞りしも、事に坐し、疏劾して、籍を削られて歸る、十一年、流賊京師を陥れ、史可法、呂大器、議して、君を江寧に立てむとするや、謙益陰に謙王を推せしが、馬士英と合はず、故に福王位に即いて、馬士英の重用せらるゝや、その罪を得むことを懼れ、上疏して、士英の功を頌す、士英、爲に謙益を引いて、禮部尙書と爲す、謙益、又力めて、閹黨を薦め、阮大鍼等の爲に冤を訴ふ、清の順治二年、清兵の江南を定むるに及び、先づ迎へ降り、翌年、禮部侍郎を以て、秘書院學士を兼ね、史局の副總裁を以て、明史を修め、疾を乞うて江南に歸る、謙益、すでに清朝に降るも、猶ほ時に詩を作りて、清朝の事を誹謗し、悻悻の語、頗る多し、五年四月、鳳陽巡撫陳之龍、江陰の人、黃敏祺を通州に捕ふ、搜して、總督の印及び謙益が詩を得たり、併せて謙益が嘗て敏祺を留めて、其家に宿せしめ、資を助け、兵を招くを許せしことを探知し、入つて之を奏す、帝怒り、馬國柱に命じて、謙益を逮へしむ、謙益、江寧に至り、訴辨して曰く、臣、夙に内院に供職し、恩榮に沐浴すれば、報を圖るに遑なし、况んや、年、すでに七十、奄奄たる餘息、履を動かさずも、猶ほ人の扶掖を借る、豈に他念あらむや、と、國柱之を哀み、爲に疏辨していふ、謙益、内院の大臣を以て、山林に歸老し、子姪三人、新に科目に列す、榮幸、すでに極まれれば、必ず衷心恩に負かず、と、因つて釋され、歸るを得たり、十年を越えて、家に卒す、年八十三。

謙益の極力排斥せしところは、李王の古文辭に在り。沈德潛曰く、尙書、天資人に過ぎ、學殖鴻博、詩を論ずるや、樂天東坡、放翁諸公を稱し、而して、明代李何王李の如き、概ね揮斥の餘、二袁鍾譚の如きは、比數の列に在らず、一時耳を帖れて推服す。百年以後、流風餘韻、猶ほ人を響むに足るなり。生平著述、大約經籍を輕んじて、内典を重んじ、正史を棄て、稗官を取り、金銀銅鐵、合して一鑑となすを妨げず。六十以後に至りては、頽然自放、向きに之を尊ぶものは、幾んど、上古人を掩ふと謂ひ、而して、近日之を薄しとする者は、唐風を撕滅すといひ、之を貶すること、太だ甚し。均しく、公論に非ずと、謙益専ら明人を排すと雖も、李東陽、歸震川の作に至りては、推奉して置かず。その詩、少陵に溯り、韓白蘇陸、元虞の諸家に入し、才力尤も富贍、著述亦た甚だ富、然れども、詩文籤註の類は、盡く乾隆の朝に焚燬せられ、臣節を勵まし、人心を正すの資となし、沈氏の國朝別裁集、後、勅命を以て、全然謙益の作を刪ることとなし、世亦た之を論ずるものなし。陳碧城曰く、かつて廢紙中に於て、鈔本無名氏の詩一冊を見る、古詩は未だ門に入らず、七律も亦た完善の作少し、惟だ句法は、沈博絶麗、以て一切を壓倒するに足れり、と、因つて、桃葉春流亡國恨、槐花秋踏故宮煙、煙月揚州如夢寐、江山建業又清明、南渡衣冠非故國、西湖煙水是清流、滄桑朝市開新局、烽火邊關覆舊棋、等、十數聯を擧げ、且つ曰く、皆沈鬱藻麗にして、杜陵に

原本し、逸情高致は、遠く梅村祭酒の上に在り、或は云ふ、是れ虞山蒙叟の作なり、と、その古詩七律を云々せしもの、必ずしも定論に非ず、略ぼ辭を加へて嫌疑を避けしのみ、謙益の詩は、初學有學の二集あり、その文世に名なしと雖も、亦た決して侯魏諸家の後塵を拜するものに非ず。

同時に吳偉業あり、字は駿公、梅村と號す、江南太倉の人、明の崇禎年間の進士、明の亡ぶや、すでに林下に退間す。侯方域、之に書を與へて、出處を論じ、必ず新朝に出づることなからしむ、然れども、聖祖素より其名を聞き、加ふるに、相國力薦するものあり、有司敦く逼り、控辭再回、二親流涕、切に諫めて、道に就かしめしに、因り、その老人の意を、傷け難きを以て、病を扶けて、都に入り、秘書院侍講に任じ、國子祭酒に遷る。その後、家居力學、康熙十年、年六十三にして卒す。偉業、すでに當事逼迫、その初志を屈せざる能はず、終身以て恨となせり。故に後年、夷門に侯方域を弔ふや、死生總負侯羸諾、欲滴椒漿淚滿尊の句あり、その病に臥するや、自ら事略を叙して曰く、吾が一生、萬事の憂危に遭際し、一刻艱難を歴ざるなく、一刻辛苦を嘗めざることをあらず、實に天下の大苦人なり。吾が死後、歛むるに僧裝を以てし、吾を鄧尉に葬れ、靈巖相近く、墓前に一圓石を立て、題して、詩人吳梅村之墓といひ、祠堂を作る勿れ、銘を人に乞ふ勿れ、と、その心衷の苦、まことに憫殺す

べきなり。

梅村、著書頗る多し、然れども、文は深く賞するに足らず、凡そ詩人の散文を作るや、強ひて學歩をなすと雖も、本質遂に曲ぐべからず。杜少陵の詩、千古に冠たり、而して、無韻の文、率ね讀むべからざるが如し、人各能あり、必ずしも一一全きを求めず、その古文、常に參するに儼偶を以てし、すでに齊梁に非ず、又唐宋に非ず、殊に正格に乖けり、唯だ其詩に至りては、一生心血の注ぐところ、その少作は、大抵才華豔發、吐納風流、藻思綺合、清麗芋眠の致あり、喪亂に遭逢し、興亡を閱歷するに及びては、激楚蒼涼、風骨彌よ適上、暮年蕭瑟、論者度信を以て、之に方ぶ、その中、歌行の一體、尤も長を擅にするところ、格律は四傑に本づき、情韻最も深しとなすべく、敘述は香山に類して、風骨勝れり、韻は宮商に協ひ、感は頑艶を均うし、一時尤も絶調と稱す、その詞林に傳播せしもの、亦た偶然に非ず、歌行長篇、特に史上に關係ありて、傳へ易きを取る、これ慧眼靈心の在るところにして、その特色は、敘事的技工を白氏の長慶集に得、更に詞曲的色彩を加味せしにあり、その擅場の技、尤も妙なるは、轉韻を推すべく、一轉すれば、通首の筋脈、倍す靈活なるを覺ゆ、之を詳説すれば、或る事實を描寫するとき、正にその中心に達し、絶頂を窮めし後、忽ち筆を轉じ、他の事實を以て之に襯映せしめ、印象をして、益す明晰ならしめ、讀者の回

顧を促し、心性上に射映する結果をして、益す深刻ならしむ、是を以て、關捩一轉、別に往復廻環の妙あり、摹寫生動、色飛び眉舞ふに幾く、筆情深く至り、俯仰姿趣あり、遂に平板滯滞に陥ることなし、意匠運旋の妙、すでに、かくの如く、加ふるに蟬聯の句法を以て、之を行り、その神韻は、悉く唐人に本づき、指事類情、意の如くならざることあらず、而して、その入手の處、もと香奩の一體に在るを以て、一たび見女閨房の事に涉れば、千嬌百媚、妖艶人を動かすものあり、之を要するに、情文兼ね至り、姿態横生せり、律絶の如きに至りても、猶ほ且つ然るものあり、その當行本色は、體制の如何に關せず、遂に失ふところなきなり、而して、趙甌北は、その庀材多く、正史を用ひしを以て、その所長の一となせしが、但だ、往々にして、題と稱はず、強ひて牽合をなすは、正に其病なりといへり。

梅村集中、時事に關する長古を擧ぐれば、一にして盡きず、永和宮詞、臨江參軍、松山哀、圓圓曲の如き、その最たるものにして、皆後世に不朽の規度を與へ、嘉慶の初に於ける陳碧城の如き、輓近の秦膚雨の如き、之を師奉せり。

當時錢吳と並び稱せられて、江左三大家の目ありし者を、龔鼎孳と爲す、江南合肥の人、明の崇禎中の進士にして、兵科給事中に拜せられ、呂大器を疏劾して、旨に忤ふ、流賊李自成の京師を陥るゝに及び、之に従つて、御史と爲り、池城を巡視す、清の順治元年、清

兵の京師に入るに及び、復た迎へ降りしが故に、官を授けられしも、未だ幾ならずして父の喪に遭ひ、江南に歸る。然れども、其身を慎まず、歌飲流連、以て日を度る。蓋し鼎革は少より情を聲伎に放にし、その京師に在るや、俳優妓娼の徒と相角逐し、置酒酣歌、以て樂を取る。又嘗て江南に在りし時、千金を用ひて、妓の名、顧眉生といふものを置き、父母と妻子とを度外にするも、猶ほ眷戀割き難く、多く奇房異珍を爲り、以て其悦を求め、淫縦の狀、時人の哄笑に上るもの、頗る多し。こゝに至りて、遂に孫給事の爲に疏劾せらる。然れども、恩詔を以て赦され、連りに拔擢せられ、康熙十二年、禮部尙書に陞り、會試正考官に充てらるゝに至る。この歳、病を以て致仕し、九月死す。その人物の取るに足らざるは、錢謙益と相似て、その作、愈よ下れり。その他、前朝の舊人は、大抵公安竟陵の餘習を帯び、全く論ずるに足らず。

(四) 王朱施宋及び其他の諸家

王士正の康熙雍正に於ける、なほ宋に蘇東坡あり、元に虞道園あり、明に高青邱あるが如く、詩を以て、海内に鳴ること五十年、藝苑之を尊崇すること、泰山北斗の如く、在廷中、博學にして詩文を善くするもの、第一と稱せらる。士正、字は貽上、新城の人、阮亭と稱し、別に漁洋山人と號す。少にして、錢牧齋に重んぜられ、長ずるに及び、學殖日に進み、

聲望随つて高く、その歷下に遊び、諸名士を湖上に集めて、秋柳の詩を賦するや、和するもの無慮數百人。その後、各處に於て、諸名士と唱和す。順治十五年、進士の第に登り、揚州推官を授けられ、任に在ること五年、大案を完うすること八十有三、尋いで數ば上書して、典を論ず。かつて使を西嶽南海に奉じ、秦貴洛蜀、閩越江楚の間に遊び、その賢豪を問ひ、その風土を考へ、佳山水に遇へば、必ず登臨し、融釋胥萃、一に之を詩を發す。官、刑部尙書に至り、前後御書、帶經堂信古齋の蓋額を賜ふこと各一。乾隆三十年に至り、追諡して、文簡といふ。著述甚だ富、帶經堂集、その作を觀るべし。

漁洋の詩を談ずるや、大抵源、嚴羽より出で、神韻を以て宗となす。紀曉嵐、その此に至りし、歴史的變遷に就いて論じて曰く、我が朝、開國の初に當つて、人皆明代王李の膚廓、鍾譚の織仄を厭ふ。こゝに於て、詩を談ずる者、宋元を尙ぶ。すてにして、宋詩の質直は流れて有韻の語録となり、元詩の綉豔は對句の小詞となる。士正等、清新俊逸の才を以て、範山模水、批風秣月、天下に倡ふるに、「一字を著けず、盡く風流を得たり」の説を以てし、天下遂に翕然としてこれに應ず。と、その選に係る古詩選、唐賢三昧集の如き、ともに詩眼の那邊に在るかを窺ふべく、特に三昧集に於て、李杜の一首を取らず、王維を以て巻を歴し、維の九江楓樹幾回青、一片揚州五湖白の句を評して、「大抵古人の詩畫、唯た與會神

到に取る。若し刻舟緣木之を求むれば、その指を失はむといひ、又筏を捨て、岸に登る、禪家以て悟境となす、詩家以て化境となす、詩禪一致、等しく大差なしといへるが如き、その趣旨を概見するに足るべし。神韻固より不可となさず、然れども、刻苦して之を求めむとするの極は、却つてその本旨に遠ざかり、むしろ修辭に傾き、李王の古文辭に近接するの跡なしとせず。これ漁洋が錢謙益及び馮班兄弟の説を駁すに至りし所以にして、翻つて又自ら後人の誦譏を免れざる所以なり。漁洋の聲望天下に奔走する時に當りても、吳喬は竊に目して清秀于鱗となし、汪琬亦た人を戒めて、その喜んで僻事新字を用ふるに效ふなからしめ、而して趙執信は、その宿憾を加へ、談龍錄を作りて、排証尤も甚し。後に袁隨園之を論じて曰く、阮亭、修飾を主として、性情を主とせず、その一處に到るを觀るに、必ず詩あり、詩中必ず典を用ふ、以てその喜怒哀樂の眞ならざるを想見すべし、と。之に次いで、或は宋荔裳が絶代消魂王阮亭の説、果して然りや否やを問ひしに答へて曰く、阮亭先生は、女郎に非ず、言を立つるや、人をして敬せしむべく、人をして感じ、且つ興らしむべし、必ず人をして消魂せしめざるなり。然れども、即ち消魂を以て阮亭の色を論ずれば、亦た並に天仙化人、人をして心驚かしむるものに非ざるなり。一良家の女、五官端正、吐屬清雅なるに過ぎず、又能く宮中の膏沐を加へ、海外の名香を

薫し、一時を傾動するは、原と過ぎたりとなさず、と。又論詩絶句を作つて曰く、不相菲薄、不相師、公道持論我最知、一代正宗才力薄、望溪文集阮亭詩、と。蓋し才力の薄は、幾んど否定すべからざる公評にして、漁洋の規撫するところ、亦た決して高きに非ず。紀曉嵐曰く、稱するところは盛唐にして、古體は惟だ王孟を宗とし、上は謝朓に及びて止まる。較ぶるに、十九首の驚心動魄、一字千金なるを以てせば、天工人巧の分あり。近體は多く錢郎に近く、上は李頎に及びて止まる。律するに杜甫の忠厚纏綿、沈疇頓挫を以てすれば、浮聲切響の異あり、と。凡そ神韻の妙は、一片の天機興會に在り、篇幅の大なる者は、固より之に適せず、且つ漁洋の才、未だ之を運旋するに足らず。故に絶句に於て、最も所長を見、太白以後、幾んど其匹を絶ち、その佳なるもの、僕を更ふるに暇あらず。唯だ晩年の作は、諸體兼ね備はり、さすがに家數の大なるを見る。張維屏曰く、入蜀の後、詩骨愈よ蒼、詩境愈よ熟し、大筆を濡染し、健を積んで雄となし、直に香象河を渡るに同じ、豈に獨り羚羊角を掛け、曲を聽いて眞を識るのみならむや、要は當に分別して之を觀るべし、と。

漁洋の神韻説を反駁せしもの、同時の趙執信あり。その詳は、後に述べし。而して後に、沈歸愚は、之を祖述し、翻つて、格調の一路に入り、袁隨園の性靈、亦た之に對峙するに依つて起る。この數者は、清朝の詩論中、特に注意すべきなり。漁洋の兄士祿、號は西樵、弟

士祐號は東亭、並に詩を善くす。浙江の彭孫通、字は駿孫、一時彭王の稱あれども、論ずるに足らず。

漁洋と名を齊うせしものを朱彝尊となす。字は錫鬯、竹垞と號す。秀水の人。年十七にして、舉子の業を棄て、力を古學に肆にし、凡そ天下字あるの書殆んど披覽せざるなく、饑寒の爲に四方に奔走し、北は雲朔に出て、南は嶺を踰え、東は滄海に浮び、芝罘甌越に臨み、至るところ、叢祠荒塚、金石斷缺の文を採取し、史傳と其の異同を參照して、其學を廣む。康熙十八年、博學鴻詞の科に召試して、翰林院檢討に除し、明史を修するに預りしが、思むものゝ中傷するところとなり、一級を削られ、尋いて、原官に復せしが、病と稱して、里に旋り、曝書亭を荷花池南に結び、家居十九年、藏書八萬卷、意を著述に專にし、康熙四十八年、八十一にして逝く。彝尊、經史に通じ、詩文ともに妙、かつて自ら謂ふ、詩文は須らく經史に本づくべし、否らざれば、淺陋勦襲のみと、彝尊もと布衣を以て、館閣に上り、一時の名士と文壇に掉鞅す。時に王士正、詩に工にして、文に疎、汪琬、文に工にして、詩に疎、閻若璩、毛奇齡、考證に工にして、詩文皆次乘、ひとり彝尊事々皆工、未だ必ずしも諸人を凌跨せずと雖も、諸人の勝を兼有す。その著作を核するに、實に一代の詞宗たるに愧ぢず。就中詩名最も高く、當時朱王並稱す。趙執信、かつて國初の詩人を評し、之を二大家

となし、論をなしていふ、王の才は高くして、學以て之に副ふに足り、朱の學は博にして、才以て之を運ぶに足ると、まことに千古の公論を推すべく、而して、その所長は、王の高華に反して、一に蒼勁に在り、蓋し、その跌宕なるものは、杜甫韓愈に出て、冷峭なるものは、皮陸に出て、往くところとして、可ならざるなきも、最も古體に長ず、亦た填詞に妙なり。

錢吳王朱、四家の外、施閻章宋、琬の二人、一時相並んで、南施北宋の目あり。閻章、字は尙白、愚山と號す。安徽宣城の人。順治六年の進士、刑部主事を授けられ、員外郎に補せらる。經を引き、獄を斷し、疑あれば必ず反覆推求して、曰く、かくの如くすれば、生者死者、兩つがら憾なしと。公餘には、宋務裳、嚴顯亭、丁飛清、張謙明、趙錦帆、周宿成等と相唱酬し、燕臺の七子と號す。尋いて、山東の提學僉事に叙せられ、秩滿ちて、湖西道參議に遷る。治蹟觀るべし。故に其歸るや、父老道を遮つて、輿すべからず、歩して船に登るや、香を薫いて、哭し送る者數千。里居十餘年、詔して、博學鴻詞を擧ぐるや、薦められて、試に應じ、侍講を以て、明史を修む。朝士大夫の碑版詩歌を求むるもの、門に相望み、四方名士の笈を負ひ、業を問ふもの、概ね虛日なし。康熙二十二年、病んで卒す。年六十六。性忠愛にして、朋友の義に敦く、口吃にして、語艱む。雖も、善く古文を屬し、特に詩に妙なり。著すところ、學餘堂

集あり。紀曉嵐かつて之を漁洋に比較し、論をなして曰く、士正の詩、自然高妙、固より閩章の及ぶところに非ず、而して、末學その餘波に沿ひ、多く虚響をなす。講學を以て、之を譬ふれば、王の造るところは陸の如く、施の造るところは朱の如し。陸は天分ひとり高く、自ら能く超悟し、繩墨を拘守するものに非ず。朱は篤實操修、積學に由つて漸進す。然れども、陸學は惟だ陸能く之を爲すのみ、楊簡以下、一傳して禪となる。朱學數傳以後、なほ典型あり。虚悟實修の別なり、と。愚山の名、亦た天下に滿ち、詩文醇雅を以て勝る。

宋琬、字は玉叔、莒蒙と號す。山東萊陽の人。順治四年の進士。戸部主事を授けられ、蕪湖の關稅を督し、頗る治績あり。吏部郎中に遷り、出でて、隴西道臺となり、寧紹に遷り、將に大に用ひられむとせしが、人の爲に宿憾を以て誣むられ、僅に赦されし後、吳越の間に流寓す。性孝友、吳三柱の成都を陥れしとき、妻子皆蜀に留るを以て、憂憤して死す。著すことろ、安雅堂集あり。その詩、放翁に擬し、五古歌行は、時に杜韓の奥に闢し、又好んで人名を用ふと雖も、點鬼簿に陥らず、典切渾成、到り易からずと稱せらる。當時南施北宋の目あり。その所生の地に因りて、各特色あり。施は南方的にして、宋は北方的。故に、沈德潜かつて論じて曰く、施は溫柔敦厚を以て勝り、宋は磊落雄健を以て勝り、各自ら場を擅にす、と。而して、施の名、更に重し。

王朱施宋に次いで時に名ある者、趙執信あり。字は伸符、秋谷と號す。康熙十八年の進士、編修を授けられ、右贊善に遷り、明史纂修官に充つ。然れども、才を恃んで、物に傲り、京朝官の嫉むところとなり、加ふるに、國恤樂を止むる日、長生殿の劇を観るに坐して、籍を削らる。時に年未だ三十ならず、これより益す情を詩酒に縱にし、居るところの因園、山に依つて亭榭を構へ、竹樹泉石、各その趣を極む。乾隆九年、病んで卒す。年八十三。はじめ王士正の甥女を娶りて、相契重せしが、後、事を以て隙を生じ、詬厲して身を終へ、その後、波に沿ひ、流を逐ひ、遽に相祖述し、堅く門戸を持し、入つては主とし、出づれば奴とし、曉々然として定説なし。談龍錄、漁洋を誦る爲に作りし者にして、漁洋之に服せずと雖も、その才を畏るといふ。然れども、その自ら作るところ、奔放餘あれども、醞釀足らず、各得失あり。紀曉嵐曰く、王は神韻縹緲を以て宗となし、趙は思路峻刻を以て主となす。王の規模は趙よりも濶く、而して、流弊膚廓を傷む。趙の才力は、王より鋭にして、末流纖小を病む。兩家をして互に其短を救はしむれば、乃ち各長ずるところを見るべし、と。執信が心契の友にして、詩を能くせしもの、甚だ多し。今その尤を抜けば、馮廷魁字は大本、康熙二十二年の進士にして、中書に拜せらる。かつて朝士に諸葛の銅鼓を得たるものあり、廷魁爲に秋谷と各長歌を作り、諸名士皆閤筆せりといふ。吳雯、字は天章、山西蒲州の

人不遇なれども安如たり、京に入るに及び、王士禎、その詩を見て、之を奇として曰く、漢魏以來二千年間、諸家の號して仙と爲すものは、曹子建、李太白、蘇子瞻三人のみ、本朝に於ては、惟だ天章に許すと、これ以て、その詩風を知るべし。康熙の作家、如上の數家を外にして、吳兆騫あり、陳維崧あり、尤侗あり、左に附説するところあるべし。

吳兆騫字は漢槎、吳江の人、順治丁酉の舉人、科場の事を以て、塞外に戍すること多年、後赦されて歸るや、旋つて卒す、その著、秋笈集あり、その詩、極めて悲壯、老杜の沈鬱頓挫を以て之を出し、必ず一格を高うするものあり、吳梅村は、はじめ之を稱す、以てその才思の妙を知るべく、唯だその餘味なきを病むのみ。

陳維崧字は其年、號は迦陵、江蘇宜興の人なり、父貞慧、文學を以て、明末に顯はる、維崧はその長子なり、かつて雲間の詩社に赴き、筆を索めて詩を作るに、數十韻、立どころに就り、併せて駢體を以て記序を作り、頃刻千言、鉅麗比なし、衆皆歎じ、以て神と爲し、其面に髯あるを以て、呼んで陳髯といふ、陳髯の名、始めて天下に高し、年三十にして出遊す、人と爲り、僦、錢帛を視ること、土芥の如し、出遊する毎に、手に任せて、餽遺し、囊を空うして歸る、歸つて資なければ、急に命じて、衣物を質し、用に供へ、質すべきものなきに至

れば、輒ち復た遊ぶ、維崧、すてに詩を以て海内に推重せられ、吳梅村の如きは、之を吳江の吳漢槎、雲門の彭古晋と並び目して、江左の三鳳凰といへり、又かつて朱竹垞と其作るところの詩を合せ、朱陳村詞と題し、以て之を世に公にせしが、流傳して禁中に入り、爲に聖祖の下問を蒙る、康熙十七年、鴻詞科に召試せられ、檢討と爲り、て明史を修む、時に年五十四、越えて四年、官に卒す、篋を易ふるの時、句あり曰く、山鳥山花是故人と、手を振ひ、推敲の狀をなして、瞑す、著すところ、湖海樓詩文詞集五十卷あり、其詩は、曲折高華にして、古今體ともに、擅場を極め、尤も風致に於て勝を取る、その詞亦た雋妙。

尤侗字は展成、西堂又は悔菴と説し、晩に其居に名づけて、良齋といふ、長洲の人、順治帝、かつて、その遊戯の文を覽て、親ら批點を加へ、歎じて、眞才子となし、以てその出身履歷を問ふ、他日又集中の討蚤檄を摘み、學士王熙に示して曰く、これ奇文なりと、仍つて侍從に命じて、副本を購はしめしが得ず、侗の京師に入るや、使者跡ね至り、一冊を取り、裝幀して進呈す、帝喜ぶこと甚し、康熙十年、博學鴻詞に召試し、擢んで、翰林に入つて、明史を纂修せしむ、居ること三年、かつて諸儒臣と平蜀の詩文を進む、聖視嘆じて曰く、これ老名士なりと、侗、因つて、二語を堂楹に刻して曰く、眞才子、先皇天語、老名士、今上玉音と、位官尊貴ならずと、雖も、天下皆その榮遇を羨み、之を唐の李白に比す、四十三年、病

んで家に卒す、年八十七、その詩、少歳の時は、専ら才情を尙び、筆墨或は温李に近し、また歸田の後は、一に白樂天に倣うて、淺易に流れ、街談巷議、皆取つて韻語の中に入る、後人或は之を遊戯視し、王元美が唐伯虎を評するに比す、然れども、四十より六十に至る間は、開闢動盪、軒昂頓挫、幾んど盛唐に近きもの多し。

嶺南の詩を能くするものには、陳恭尹あり、屈大均あり、梁佩蘭あり、陳恭尹、字は元孝、隱居して仕へず、羅浮布衣と號す、其詩は、拔俗清迥にして、頗る唐人の三昧を得たり、屈大均、號は翁山、梁佩蘭、字は芝五、併せ稱して嶺南の三家といふ、その他、浙江の曹爾堪、王庭山、東の顔光敏、及び吳中の杜詔、潘商、葉燮等、亦た一時の選、然れども、一一之に詳説せず。

清初の詩風、専ら明季の弊を革むるに在るも、搖曳下上、なほ唐を宗とす、而して、康熙の季、查慎行の出づるに及び、舉朝の詩、皆宋なり、次に當時の輕文學に就いて、一瞥の勞を取るを得む。

(五) 金聖嘆

若し支那に於ける文藝批評家を求むれば、金聖嘆、蓋し第一たるべし、勿論その批評は、今日予輩の謂ゆるそれと大に異なれりと雖も、卓見博識、固より稱すべし。

聖嘆の略傳は、塵柴舟の二十七松堂文集に見ゆるものを主とし、その他、二三の雜書に散見す、聖嘆は順治年間の人、舊姓は張、名は采、字は若采といふ、倜儻にして奇氣あり、少にして博士弟子員に補せられ、後、歲試に應ず、學使、その文、句讀する能はざるを視て、衆を説るとなし、之を褫ぐ、翌年は、乃ち一變して、萎靡庸腐、趨時の調を爲る、學使、大に悦び、冠童軍に拔き、遂に再び吳縣の邑庠に入る、長ずるに及び、好んで酒を飲み、文を衡し、書を評し、その議論、皆前人の未だ發せざるところを發し、時に講學を以て聞ゆるものあれば、輒ち起つて之を排斥し、居るところの貫華堂に於て、高座を設け、徒を召して經を講ず、講ずるところの經は、聖自覺三昧と名づけ、稿本は自ら携へ、自ら閱し、秘して人に示さず、座に上りて開講すること、聲音宏亮たり、顧盼儼然たり、凡そ一切の經史子集、箋疏訓詁、かの釋道内外の諸典と、以て稗官野史、九疊八蠻の記載するところに及ぶまで、その齒頰に供せざるはなく、縱橫顛倒、一以て之を貫き、秋毫も剩義なければ、聽くもの、皆頂禮膜拜し、歎じて未だ會て有らずと爲す、聖歎、これに至りて掌を撫して、自ら豪とし、彼の講學者流、これが爲に眉を擡むるも、亦た顧みず、その最も喜ぶは、易にして乾坤兩卦を講じて、十餘萬言を累ぬるに至る、生平、王斲山と友とし、善し、斲山は俠者の流、一日三千金を聖歎に與へて曰く、君、此を以て子母を權り、母は、後、我に歸せ、餘は君が

燈火を助くる、可ならむかと、聖嘆之を諾し、月を越えて殆んど之を盡し、乃ち斲山に語つて曰く、この物、君が家に在らば、適ま守錢奴の名を増すのみ、我すてに君の爲に之を遣へりと、斲山一笑して之を措く、稜々たる俠骨、想ふべきなり、明の亡ぶるに及び、意を仕進に絶ち、始めて名を喟字を聖歎に改む、人或は聖歎の義を問ふものあり、笑つて云ふ、論語に兩喟然曰あるに非ずや、顔淵に在りては歎聖たり、曾點に在りては聖歎たり、余は其れ曾點の流亞ならむかと、これより後、長年青氈に困み、佛火に對し、禪に參し、塵を揮ひ、道人の况味を領し、唯だ貫華堂中に兀坐し、書を著すを以て務と爲すのみ、達官貴人より同學舊交に至るまで遠見し、却避し、謂ふ、これ狂生なり、近づくべからずと、聖嘆の人物、かくの如く、尋常講學の士と大に異なるものあり、時を憤り、世に傲り、又慷慨激烈、利害を計らず、直前之を踏み、全く心肝なきを非とする者に似たり、之を以て、殺身の禍を得、遂に末路の厄を免れず、まことに悲むべきなり、柴舟の傳、諱んで之を書せず、秋坪新語、詳に之を記す、又辛丑紀聞に見ゆるもの、その遺を補ふに足るものあり、聖嘆死に臨み、家中の人に寄する書を作る、その中に云ふあり、殺頭は至痛なり、籍沒は至慘なり、而して、聖嘆無意之を得たり、亦た異ならずや、と、然れども、或は異説を爲すものあり、謂ふ、聖歎公憤を以て貪吏任維初を訟ふ、詞、撫臣朱國治に連る、之を以て死せりと、眞

に此説の如くなれば、聖歎の死は、本と義より出て、復た何をか憾みむ、惜むべきところのもの、は、卓犖不群の名士をして、昏庸冗蹋の夫に死せしむ、即ち天は才を忌まずといふも、安んぞ得べけむや、はじめ聖歎が著すところの解唐詩、五七言の律詩を中より分ち、上四句を前解と爲し、下四句を後解と爲す、當時の人、戯に聖歎は唐詩を腰斬せりと、いひしが、こゝに至りて識となれり、又傳ふ、聖歎杜詩を解するの時に在つて、自ら言ふ人あり、夢中より語る、曰く、諸詩皆説くべし、唯だ古詩十九首を説くべからずと、聖嘆以て戒となす、後、醉に因つて此詩を講じ、未だ幾ならずして、遂に慘禍に罹ると、これを執れにするも、その末路、頗る悲むべし、

かつて大言して曰く、天下才子の書、六あり、而して、世人知らず、謂ゆる、六とは、一に莊二に騷、三に馬史、四に杜律、五に施の水滸、六に王の西廂と、然れども、生平の遺稿散佚し、僅に存するものは、制舉文の外、西廂水滸の批本あり、すてに盛に世に行はる、この餘、莊騷馬杜等の書は、猶ほ未だ業を卒はるに及ばず、而して、聖嘆の才識は、この二書に於て、十分に窺ひ知るを得べし、

水滸西廂の評、細を穿ち、微に入る、かの因襲的偏見を打破し、小説傳奇をして、九鼎大呂よりも、重からしめしもの、その功、最も偉なりとなすべし、唯だその失は、盲從的崇拜

に在り、故を以て、たとひ、瑕疵あるも、之を發見する能はず、又發見し得たりとするも、極力之を回護す、これ支那批評家の通弊なりと雖も、彼に於て、特に甚しきものあり、然れども、忌憚なくいへば、聖嘆は、真正の意義に於ける批評を爲さむと欲するものに非ず、實は之を借りて自己の氣焰を吐かむと欲するものにして、その謂ゆる批評なるものは、血性一點を存する自家の抒情文に外ならざるなり、こゝに於てか、彼は原本の眞を顧るの暇あらず、水滸の如き、七十回以下を斷ち、西廂の如き、亦た擅に字句を改刪せし跡あり、之をして自家の水滸及び西廂となさしむ、故に僭越孟浪の誚を免れずと雖も、又原書と異なるの妙あり、而して、彼が批評の立脚地は、仙儒佛三教の旨義に本づき、雅俗の限界を抹殺し、極めて自在に論を着くるに在り、その態度の大膽にして、毫も檢束なき、自ら一種の神解あるものに非ざれば、斷じて能はず。

小説戯曲等純文學に關する確然たる大意見は、これを見るに由なきも、東洋流の修辭法を以て、古今の詩文を評釋する手腕と技倆とは、殆んど、その匹儔を絶てり、加ふるに、その文辭勁拔にして、神氣流動、人間洵に得易からざる絶妙好辭なり、塵柴舟之を稱して曰く、予、先生評するところの諸書を讀むに、異を領し、新を標し、迥に意表に出づ、作者千百年來、こゝに至りて、始めて生面を開くを覺ゆ、嗚呼、何ぞ其れ賢なるや、慘禍に罹

ると雖も、しかも、其罪に非ず、君子之を傷む、而して、説者謂ふ、文章の妙秘は、即ち天地の妙秘、一旦發洩して餘すなければ、鬼神の忌むところを犯すなきに非ず、先生の禍、其れ亦た以て之を致すあるか、然れども、書龍睛を點し、金線度に隨ひ、天下後學をして、悉く作文筆墨を用ふるの法を悟らしめしものは、先生の力なり、亦た焉ぞ少しとすべしや、その禍、一時に冤屈すと雖も、功は實に萬世を開拓す、顧ふに偉ならずや、と、李漁又曰く、施耐庵の水滸、王實甫の西廂、世人盡く戯文小説の看をなす、金聖嘆、特にその名を標して、五才子書、六才子書といふものは、その意、何にか在る、蓋し天下その道を小視して、古今來の絶大文章たるを知らざるを憤るが故に、これ等驚人の語を作して、その目を標す、とともに知言を推すべきなり、之を要するに聖嘆の批評は、哲理的考察を缺き、自家の氣焰を吐露するを主とし、作者の爲に忠實ならざるものありと雖も、文章技工の秘蘊を開き、以て啓蒙の資となし、且つ文學上に於ける小説戯曲の位置を高めしに至りては、古往今來、その獨擅に譲るといはざるべからず、渠れ、亦た遂に好個の奇才子たるかな。

聖嘆亦た間々詩を作る、沈德潛は愁の一律、江水流、水不當春、江花江草故愁人、開頭振尾、汝何往、擊鼓阻撓皆不倫、巫峽猿啼眞迸血、楚天朝雨最通神、老夫欲寄精誠去、憑仗高風

達紫宸を擧げ、袁隨園は、野廟の一絶、衆響漸已寂、蟲於佛面飛、半窓關夜雨、四壁掛僧衣を稱せり、便を以て、聊かこゝに附記す。

(六) 李漁

湖上の笠翁は、玉茗堂後の大作家たるのみならず、又實に支那に於ける最大戯曲家たるに愧ぢざるものなり。名は漁、浙江の人、徙つて金陵に居る。貯ふところの喬姬、主姬、黃姬、曹姬等、皆姿色あり、家貧にして著書を好み、任侠自ら喜び、四方に流寓す。その作るところの文章、詩歌、填詞、數十種に下らず、ひとり、作家として大技倆ありしのみならず、評家として、亦た聖嘆と相並ぶに足るべし。但し、其傳は詳ならず、その著作に就いて、わづかに摺撫して知るを得べきのみ。

その著に係る傳奇、凡そ十種、これを笠翁十種曲といふ。風箏誤、屢中樓、鳳求凰、意中緣、比目魚、玉搔頭、慎鸞交、巧團圓、奈何天、憐香伴、是れなり。而して、十種を一概して、すべて喜劇に屬す。かつて風箏誤の末に題して曰く、傳奇原爲消憂設、費盡杖頭歌十闕、何事將錢買哭聲、反令變喜成悲咽、惟我填詞不賣愁、一夫不笑是吾憂、舉世盡成彌勒佛、度人秀筆始堪投と。笠翁は、喜劇を以て、傳奇の本領となせるなり。

笠翁は、傳奇に於て、先づ結構を重んじ、次に詞彩、終に音律を以てせり。而して、之に關

する明晰なる見解は、その雜著中に散見す。故を以て、その結構、一として斬新ならざるはなし。かつて曰く、不佞半生操觚、他人の一字を攘まず、空疎自ら媿づるものは之あり、誕妄譏を貽すものは之あり、窳を剽き舊を襲ひ、前人の唾餘を嚼み、しかも謬つて、舌花新發といふに至りては、特に自ら其無きを信ずるのみならず、海内の名賢も亦た盡くその有るを屑しとせざるを知らむと。是に由つて之を觀れば、笠翁が著作に於ける平生の志は、その構想、前人の糟粕を簸拂し、必ず新機軸を出すに在りしや疑なし。隨つて、前人の未だ嘗て筆墨を染めざる喜劇の一道に於て、尤も力を用ひたる所以の意、亦た推して知るべきのみ。今如上の十篇に就いて之を檢するに、その全體としては或は調和を失するところ多く、その脚色の自然ならざるところ、亦た少からずと雖も、善く人情の弱點を觀破し、巧に彼此の不調和なる處を寫し、觀るもの及び讀むものをして冠纒の絶ゆるを覺えざらしむ、まことに滑稽の上乗なり。彼は又詞曲の平易に於て、頗る意を致せり。従前の傳奇は、その主とするところ、詞彩に在り、故に往々にして、俗耳に入らず。而して、笠翁の作は、婦人小子と雖も、盡く解せざるなし。故に西廂、琵琶及び牡丹亭の典雅清麗は、到底求むべからず、唯だ明白を取らむのみ。これを要するに、彼は戯曲その物に就いて、古人と頗る異なる見解を有せしものにして、しかも是れ、決して、謬れる

ものに非ざりき。

傳奇の外、著すところの小説、十二樓あり、合影樓、奪錦樓、三與樓、夏宜樓、歸正樓、萃雅樓、拂雲樓、十香樓、鶴歸樓、奉先樓、生我樓、聞過樓、是れなり、いづれも短簡零章に過ぎずと雖も、前人の作と頗る其撰を異にし、篇々新穎なり、又詩文雜著を集めたるものには、笠翁一家言あり、その中、閒情偶寄は、あらゆる事象に關する美的觀察を縷述したるものにして、獨特の見地、往々にして人の意表に出づるものあり、戲曲論、亦た其中に具す、芥子園畫傳、又畫論の粹たるに庶幾く、他に資治新書といふものあり、國家經濟に關する前人の議論を類集す、王士禛、その第一榮に題して、經濟の實學といひ、周櫟園、その第二集に叙して、二十一家の史乘と相表裏すといふ、名流の爲に稱揚せらるること、かくの如く、笠翁その人、必ずしも滑稽の雄に非ざるを知るべし。

世に傳ふるところ、覺後禪の一書あり、これ亦た笠翁の撰ならむといふ、玉臺金臺の集、香區疑雨の什、花月光華、色影迷離、時に放誕艶綺を極むと雖も、これを讀むや、君子必ずしも陋とせず、ひとり天下第一風流小説の八字を題籤としたる此書は、要するに、冶郎嬌婦が游蜂戲蝶の痴情慾態を演ずるを活描細寫せしものにして、終に見るに忍びざるを奈かむ、然れども、全篇の骨子は、兎にも、角にも、小説の體式を備へ、強ひて因果應

報の理に歸着せしめしところ、陳腐の嫌あるにもせよ、散漫ならずして、却つて緊密を推すべし、之を笠翁に歸す、他の故あるに非ず、篇中佳麗を形容するもの、概ね一家言中に見ゆる一定の矩準に因り、その體貼を備ふといふに在り、この書、一あるは或は可ならむしかも、終に二あるべからず、唯だその筆墨に至りては、疏蕩逸宕、優に別様の姿致あり、その淫褻の處を度外視して、文辭のみを玩賞するに於ては、必ずしも、不可となさざるべし。

(七) 桃花扇と長生殿

人、もし清朝に於ける戲曲傳奇の著作中、推して第一となすべきものは何ぞと問はば、予は先づ桃花扇傳奇を擧げて、之に應ぜむとす、桃花扇は、明末の名士河南の侯方域と秦淮の名妓李香君との情事を主とし、筆を先聲に起し、餘韻に至るまで、全部凡そ四十有四齣、まことに絶代の大手筆たるに負かず、而して、その作者を孔云亭と爲す。

孔尙任、字は季重、東塘と號す、云亭は、その別號なり、山東曲阜の人、孔子の遠裔にして、門地素より貴く、仕官して、戸部郎中に至る、詩に工にして、著すところ、湖海集あり、紅橋の一律、最も誦すべし、曰く、紅橋垂柳裊煙村、隋代風流尙尙存、酒旆時遮看竹路、畫船多繫種花門、曾逢粉黛當筵舞、未許笙歌避吏尊、可惜同游無小杜、撲襟絲雨總消魂、と、沈德潛こ

れを評して、名句採るべしといへり又憶昔の七律に云ふ、憶昔春宵傍父兄、故園風景乍承平、城門吏放深更鑰、樓下人聽上界笙、珠履貪遊從雪苑、花燈不息任天明、誰知此夜來爲客、漁火江村照獨行。と國朝詩人徵略、又他に對面疎于夢、交談勝似書の一聯を摘む。云亭亦た考據に密、漢銅尺記、周尺考、周尺辨の三篇を作り、又闕里志を作り、族譜を修すといふ。云亭の行事閱歷、上に記せしもの、外、その詳は、未だ考へず、その人、素より學者たり、士たりと雖も、却つて、傳奇作者として不朽の盛名を傳へ、桃花扇の劇、これを稱する、今に至つて遂に衰へざるなり。

桃花扇著作の動機に就いては、云亭が卷後の本末に於て自ら述ぶるところ、最も詳なり。曰く、族兄方訓公、崇禎の末、南部の曹たり、予が舅翁、秦光儀先生は、その姻婭なり、亂を避け、之に依り、羈客たること三載、弘光の遺事を得て、甚だ悉くす、里に旋るの後、數ば予の爲に之を言ひ、證するに諸家の稗記を以てす、同せざるものなし、蓋し實録なり、ひとり香姬の面血扇に濺ぎ、楊龍友、書筆を以てす、之を點ず、これは龍友小史、方訓公に言ふもの、諸を別籍に見ずと雖も、その事、新奇傳ふべし、桃花扇の劇は、此に感じて作り、南朝の興亡は、遂に之を桃花扇に繫ぐ、とこれ著作の所因なり、抑も侯朝宗、李香君、一段の情事は、南部烟花千古の話柄にして、壯悔堂文集中、李姬傳の一篇あり、朝宗自ら之を述

ぶ、而して、云亭の意匠、實に之を主とすと雖も、その構想亦た大に觀るべきものあり、試に左にその梗概を述べむ。

侯方域、一代の才人を以て、南闕下第せし後、莫愁湖畔に僑寓し、一たび李香君を媚香樓上に見るや、心魂飄蕩、ひそかに定情の歡を得むと欲し、しかも客囊太だ冷なるに苦む、阮大鍼之を聞いて、楊文驄に托して、其資を送與し、侯生の歡心を得、以てその友陳定生、吳次尾と交を結ぶを得て、再び世に出てむと欲す、然れども、佳人才子、定情の後、その情を聞くに及びて、之を却け、大鍼因つて、并せて三人を怨む、時に左良玉叛をなすの説あり、大鍼之を機として、侯生を鳳陽督撫馬士英に譖するや、侯生、難を恐れて逃れ去り、史可法の軍に投じ、因つて、香君と別る、すてにして、燕京陥り、崇禎帝、自經するや、士英大鍼、德昌王を南京に迎立し、各高官に任じ、田仰といふもの、亦た擢んでられて、漕撫となり、その赴任に際し、香君を携へて去らむとす、香君、節を守つて聽かず、侯生がかつて贈りし扇を以て之を拒み、遂に地に倒れて、半面の花顔を傷つけ、鮮血迸つて地に滿ち、併せて扇面に濺ぐ、而して、その困睡するや、楊文驄來り見、扇上幾點の血痕、紅艶常に非ず、些の枝葉を添へて、書を爲さむといひ、香君が歌唱の師、蘇崑生、益草を摘み、鮮汁を取り、此に書いて、桃花となし、之を持し、北に之いて、香君を尋ね、香君の養母貞麗、香君と稱し

て田仰に従ふ。侯生、さきに史可法の依托を受け、高傑の幕下に在りしが、志を得ず、辭して郷に還らむとし、その黄河の堤を過ぐるや、崑生に遇ひ、之とともに南京に歸り、文聰に邂逅し、はじめて香君が其後召されて宮に入りしを知る。香君、宮中の筵に臨んで、士英大鉞を見るや、大に罵辱し、因つて、小房に幽囚せらる。之に次いで、侯生亦た拘へられ、獄に繋がる。すてにして、清兵江を渡つて南京を陥るや、香君逃れ出て、兵を城東の樓霞山に避け、侯生又獄を脱し、江に沿うて東せしが、史可法の死を聞き、又轉じて樓霞に入る。かくて山中の道士張瑤星、崇禎帝の爲に修齋追薦をなすや、その席上、二人忽ち相見ると得、香君、桃花扇を開いて、舊を述べむとすれば、瑤星の一喝に遇ひ、家國興亡の恨を并せ、やがて、情恨怨種を斷ち、百年の愛、こゝに割かれ、粉黛又道に入る、これを一篇の終尾となす。

地覆天翻、亡國の末路、極めて悲惨なるは、上下四千載、八十餘朝の間、宋と明とに若くはなし、而して、明は其時最も近く、遺事なほ人の耳に在り、殊に感興を惹き易しとなす。加ふるに、侯朝宗は絶代の才人、英雄の資を備へ、氣節風流、翰略文章、ともに欽仰すべく、たとひ、亂離の世、功業を立つるに及ばざりしと雖も、身節を守つて、新朝の粟を食むを屑しとせざりしもの、その人、固より偉とすべし。李香君は、慧眼靈心、花貌柳容、色藝一時

に冠絶し、しかも氷清玉潔、終始渝らず、實に烟花の淑女、脂粉の丈夫といふべし。二人幾んど理想の男女、配し得て恰も好く相當るといふべく、西廂の張生、琵琶の禁生、ともに無能庸劣にして、之を鶯鶯、趙二嫂に配するの不倫なるに似ず。作者の用意深きこと、知るべく、その世に稱せらるゝ所以、その一、蓋し此に在るを疑はず、而して、之を描寫するや、面貌躍如、生動紙に出てむとするが如く、幾んど遺憾なし。李貞庵は老妓の多少、俠氣あるもの、楊文聰は狎客のみ、蘇崑生、柳敬亭の輩、その業とするところ、固より賤しと雖も、本と氣概の丈夫、之を寫す、惜むらくは稍や足らず。馬士英、阮大鉞の奸曲を寫すも、亦た然り。若し夫れ、左良玉、史可法等に至りては、必ずしも、篇中主要の人物に非ずと雖も、殉國の名臣、大節堂堂、叙寫又精到、人をして、覺えず、一幅の痛涙を濺がしむ。これを要するに、個々の性格を描くに於ては、作者頗る神解あり、大體に於て成功したるに近しとすべし。

この劇、寫すところの事實は、毅宗の崇禎十六年より、福王が位に南京に即き、尋いで明の亡ぶるに至るまで、前後わづかに二年、その間、事象極めて複雑なるに拘らず、その布置排列の巧なる、變化あり、波瀾あり、局面屢ば改まりて、正に點染の妙を極む。香君がはじめに田仰の聘を却けて、桃花扇の本事に入りたると、宮中の筵に於て馬阮二人を

罵辱したると、前後映帶、而して、侯生が香君を舊院に尋ねて遇はず、その宮中に入りしを聞くと、香君宮より脱し歸りし後、侯生破獄の報を得て、之を尋ねるの便なきと、劇中の二關鍵として、人をして、離合常なきを嗟嘆せしむ。侯生香君、ともに心花を剝り、情苗を爰る、何等傷心の事、從來の雜劇傳奇に於て遂に觀ざるところ、設想の巧、天荒を破るものといふべし。之を要するに、一部四十四齣、侯李の情事を經とし、明社の覆亡を緯とし、花月消魂の境に配するに、兵馬倥傯の景を以てし、忽ちにして燈紅酒綠、忽ちにして金戈鐵馬、脚色天然に出で、かの西廂の平板にして、他の奇なきと、牡丹亭の荒唐にして、譎幻なるとに比して、自ら其選を異にするを見るべし。

全部の結構、かくの如く、次に措辭、即ち填詞は如何、卷首の凡例十數項、大抵詞曲に就いて述べ、實に云亭その人が劇曲の詞彩に關する自得の綱領に外ならず、試に之を抄すれば曰く、詞曲は皆浪りに填するに非ず、凡そ胸中の情、説くべからず、眼前の景、見るべからざるものは、詞曲を借り、以て之を詠ず。又一事再述の前すてに説白あるは、詞曲を以て之に代ふ。若し説白となすべきものを詞曲に入れるれば、聽者解せず、而して、前後の餘斷つ、その已に説白あるものは、又奚ぞ必ずしも、重ねて詞曲に入れむや、と、又曰く、曲を製する、必ず旨趣あり、一首は一首の文章を成し、一句は一句の文章を成し、之を案

歌に列し、これを場上に歌ひ、感ずべく、興すべく、人をして節を撃つて嘆賞せしめなば、謂ゆる歌うて善きなり、若し勉強敷衍して、全く意味なくむば、唱者聽者、皆苦事なりと、又曰く、説白は、抑揚鏗鏘、語句整練、設科打諢は、ともに別趣あり、むしろ通俗ならざるも、肯て雅を傷らず、頗る伶人の旨を得たりと、曰く、舊本説白止だ三分を作る、優人場に登つて自ら七分を増す、俗態惡諛、往々にして金を點じて鐵となし、文筆の累をなす、今説白詳備、再び一字を添ふるを容るさず、篇幅稍や長きは、職として、これが故のみ、と。

はじめ、元の雜劇は、優伶輩、自ら之を作る。その後、學士詞人、指を此に染むるや、絶えて劇の所作を解せざるを以て、その作るところ、直に之を場の上ぼすを得ず、殊に説白に於ては、索莫味なきもの多し、西廂琵琶及び牡丹亭の如きも、その白、甚だ簡なるが故に、場の上ぼすに際しては、優伶自ら之を改補し、遂に前記の弊あるに至る。云亭の着意、頗る佳、故に、その詞を填むるに方りては、明末秦淮の歌客として盛名ありし、丁繼之の朋友なる王壽熙に曲本を示し、その熟解するを待つて、はじめ譜に依り、之を填し、一曲を成す毎に、壽熙をして節を按じて歌はしめ、稍や穩妥を缺く處あれば、即ち就いて改製せしといふ、その能く宮商に協ひ、平仄に諧ひ、毫も贅牙の病なきもの、決して偶然ならず、而して詞彩の麗、幾んど其比なく、詩家射鵰の手を以て、藻繪甚だ力め、典雅にして

新婉、湯顯祖の諸作と相并んで、殆んど元人の壘を攀せむとす。李笠翁の十種曲の如きは、遂に儻父の面目、宜しく前後相伍するを羞づべきなり。之を概言するに、桃花扇の内容は、新警なる最近史上の題目を捉へ來り、能ふだけ細心巧緻なる脚色を施し、詞曲に於ては、新機軸を出したるものにして、その性質上、傳奇の最上乘たるべく、その古今に艶稱せらるゝもの、亦た決して偶然ならざるなり。

然れども、予輩は、作者の經營苦心に就いて、なほ一言するところなかるべからず。これより先、云亭、小忽雷傳奇の撰あり、但し詞曲は、顧天石をして之を作らしむ。桃花扇を撰するに及びては、天石、すでに都を出て、在らず、故に自ら詞曲をも并せて作り、はじめて着想せしより、實に十數年を経たりといふ。云亭、自ら曰く、予、かの仕時、毎にこの傳奇を作らむと擬せしが、聞見未だ廣からず、信史に乖くあらむを恐れ、寤歎の餘、わづかに、その輪廓を書いて、實は未だその藻采を飾らざるなり。然れども、獨り好んで密友に誇つて曰く、吾に桃花扇傳奇あり、尙ほ之を枕中に秘すと、米を長安に索め、僚輩と飲饌するに及びて、亦た往々之に及ぶ。又十餘年、興、すでに闌なり。少司農田綸霞先生、京に來るや、見る毎に、必ず手を握つて、覽むことを求む。予、已むを得ず、乃ち燈を挑げて、填詞し、以て其求を塞ぐ。凡そ三たび稿を易へて書成ると、この書が一時咄嗟の作に非ざるこ

と、之を以て、概見すべきなり。

劉中桂曰く、一部の傳奇、五十年前の遺事を寫し、君臣將相兒女友朋、人人活現せざるなく、遂に天地間最も關係ある文章を成す。往昔の湯臨川、近今の李笠翁、皆敵手に非ずと。劉几曰く、奇にして真、趣にして正、諧にして雅、麗にして清、密にして淡、詞家の能事畢る。前後作者、未だ此より盛なるはあらず、本と名世の一寶たるべしと。葉藩曰く、慷慨悲歌、淒涼苦語、これ何種の文章、之を讀んで、涙を墮さるもの、その心必ず石、その眼必ず肉と。凡そ此等の評語、推稱頗る到ると雖も、實は猶ほ足らざるを覺えず、むばあらず、桃花扇の一劇、こゝに於て、善く千古たり。

この曲本の成るや、王公搢紳、借鈔せざるなく、時に紙貴の譽あり、遂に乙夜の覽に入る。その翌年、馬歳の燈節、總憲李木菴が倡優を集めて扮演するや、首にして、作者孔尙任を招く。翰林の諸公、皆席を譲り、尙任をして、ひとり上座に居らしめ、諸伶に命じて、更る觴を進めしめ、その品題を請ひ、座客嘖々として指顧し、尙任の名、これより輩下に重く、京師の桃花扇を演ずるもの、歳に虚日なし、楚地の容美は、古しへの桃源、萬山の中に在つて、人境を阻絶す。而して、洞主田舜年の客を饗するや、宴ごとに家従に命じて、この劇を奏せしといふ、亦た以てその聲價の高さと流傳の廣きとを證すべく、尙任その人、百